

生活文化

S·E·I·K·A·T·U·B·U·N·K·A

生活文化同人会報 2000年第1号 №41

もくじ

第1回目定例会	01
・(仮称)長浜鉄道文化館に壁画を描く会の報告	02
・私の近作「南郷村民家の移築・再生	06
・リレー連載「日本の」季節	10
・同人紹介	12
・掲示板	13
・トピックス	14
・「語る会」のお知らせ・事務局からの報告	15

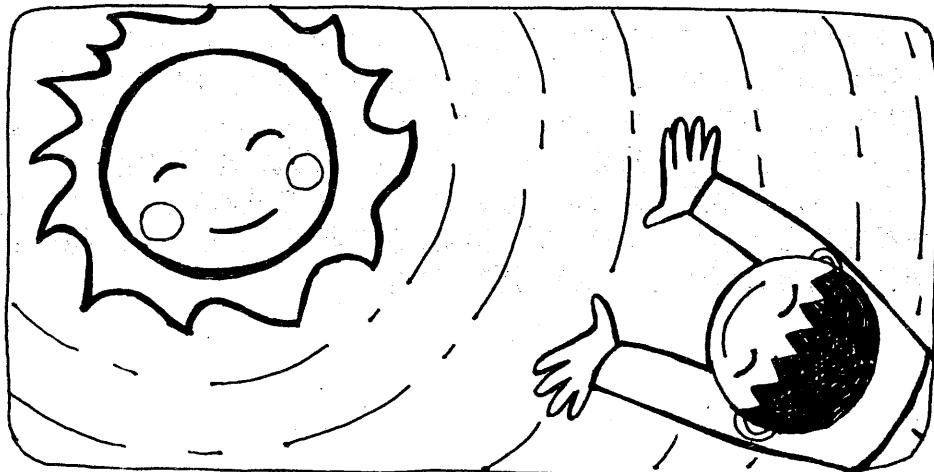
2000年第1回目定例会

「住宅と熱環境」

日時 2月18日(金)午後6時30分~8時30分

場所 池袋芸術劇場小会議室 401

講師 前田誠一 氏



限られた石油エネルギーなどに頼った毎日の私たちの生活。

しかし、太陽エネルギーは無限です。

今回の講師前田さんは、床暖房の会社に勤務しながらも今までの方法に疑問を持ち独立。現在は床暖房の会社 IZENA を設立し家族と共に経営されています。

太陽エネルギーの上手な利用の方法、限りあるエネルギーをどうすれば最小限に押さえられるのか。

これから将来を考えながら、今を語っていただきます。

*会費: 2000円(年会員以外の方、学生は半額)

*参加者は必ず連絡してください。

申し込み先 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp

世話人 岡部知子

(仮称) 長浜鉄道文化館に壁画を描く会

連合設計社市谷建築事務所/戎居連太

現在、滋賀県の長浜市に、現存する最古の鉄道駅舎に隣接するかたちで、吉田桂二設計による(仮称)長浜鉄道文化館を建設中である。

(財)日本ナショナルトラストのヘリティジセンターとして、旧駅舎を利用した鉄道資料館の再利活用も含め、計画されている。

長浜には鉄道と琵琶湖航路の結節点として発展してきた歴史があること、また鉄道資料を展示する器の可能性として動態展示=鉄道模型を走らせるここと、この二つの必要性から鉄道を走らせる背景は単なる壁ではなく、琵琶湖からみた風景を壁画として製作することになりました。

去年の12月18. 19日と生活文化同人の面々を中心としたボランティアにより、壁画を作成して参りました。限られた時間の中で製作しやすくするため、事前に壁画に塗る色(水性ペンキ6色)を調合し、33m×1.2mの石膏ボードにあらかじめ、下塗を決め、前日に下書き及び丸太などの養生をしました。調合した色は遠景・中景・近景により色分けし、どの場所には、どの色を塗るのか、決めていきました。また、9尺の壁面を各自担当とし、最終的な町並みは33m一気に吉田桂二が仕上げという運びです。



鉄道文化館外観：SLが置かれる広場介して、旧駅舎資料館に隣接するかたちで配置されている。

一日目。

前日にすませた養生と、吉田がものの二時間あまりで下書きをした壁面に参加者各々が各自確認しながら、一気に塗り始める。

感動的だったのは、建物に絵を描くというミケランジェロばりの離業はもちろんのこと、33mのキャンバスから、琵琶湖から見える山々が作業開始からほぼ同時に立ち現れてくる光景は、皆で共に製作しなければ不可能な瞬間であった。また、思っていたよりも作業が早く、もっと俺に描かせろ、という方がいたり、この壁画のために水彩画入門を購入し、前日徹夜して現場に入った方がいたり、前日から車を飛ばして参加したなど心にしみるエピソードがたくさんありました。

現場途中にもかかわらず、施工を担当している宮本組の方からお弁当とお茶、おやつも用意される。（手弁当のはずが・・・・）

その心に打たれ、僕は二つも弁当を食べてしまいました。（笑い）

町並み以外の塗る作業を終え、ほぼ7割方終了。

これからが、本番。例のごとく終わらない夜の懇親会に突入。



内部見上：間口7間奥行9間の丸太組による変形トラスによるアーチ構造



事前に下塗色を決定し、その上に木炭にて下書き
2時間ほどで、1.2M×33Mの壁面の下書き終了。



9尺を1ブロック、計12のエリアに分かれ、
参加者全員が同時に描き始めた。遠景・中景
・近景に合わせて、それぞれが色を重ねていく。



作業をする松本昌義氏と飛山龍一氏。
作業は工事途中ということもあって、全員ヘルメット着用。最終的には、このヘルメットは、宮本組から記念にプレゼントされた。

●懇親会

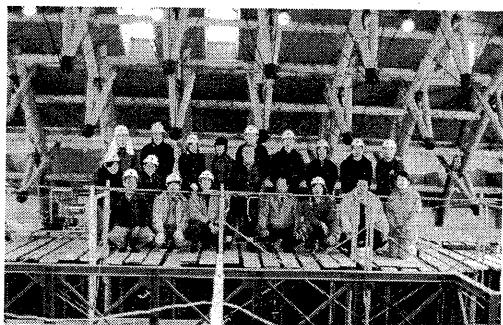
懇親会は蔵を改修した二階座敷。宮本組の社長をはじめ現場の方々や福井・金沢といった普段では懇親できない人たちと膝を突き合わせながら、例のごとく盛り上がり。近江牛などの郷土の素材を生かした御馳走をいただいた。



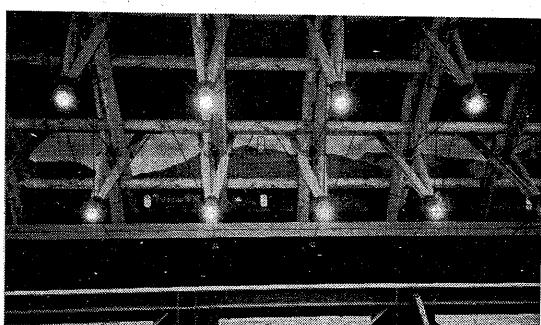
懇親会風景ー郷土料理ぶら坊の蔵座敷にて

二日目。

朝からの作業であったが、昨日の順調な作業によりのんびりとしたムードのなかで作業が行われた。ただ33mもの町並みを中心とした近景を描く吉田は大忙し。しかし、午前中にはほぼ完成し、それぞれの地名などのプレートを張り完成。午後はせっかく長浜まで来たのだからと町並み散策となった。



完成した壁画を背景に集合写真



完成した壁画

現場を後にするとき、宮本組社長自ら参加者に手みやげをと、一つ一つの袋を入念に包んでいる光景を忘れない。

今回の壁画の会によって、皆で創りあげる楽しさだけでなく現場の方々をはじめ、参加して下さった方々の心意気に出会い、人が濃密につきあうすばらしさを感じました。

私の近作・活動

南郷村民家の移築・再生

櫻 建築設計事務所 青島芳雄

99年4月8日早朝、桜花吹雪に見送られての奥会津行ドライブがこの計画の幕開きであった。まず目指すは那須の夢屋、その先遠くまだ観ぬ奥会津の予備知識はなにも無い。花の盛りを終えようかという東京、東北道をたどり館林・佐野の丘陵は満開の桜に飾られて早春の靄に包まれていた。那須の山間にかかるころ純白の粉雪に迎えられ、季節を逆戻る旅が始まろうとしていた。

この旅に先立つこと3週間程前、今回の主役である宮地さん、吉田桂二さん、加えて私の3人は、原宿のとあるイタリアレストランで建築やら町並みやら民家やら、はたまた料理やら、諸々談義に花を咲かせる楽しい時間を持った。イギリスのナショナルトラスト運動に心引かれ、願わくば“永く住み続けられた家”を棲み家にしたい、という宮地さんの夢が、吉田さんの記憶のヒダに刻まれたのはこの晩であった。十日ほどのち、奥会津に譲ってもらえる民家があるゾ見にいってみないか、と吉田さんからの電話。かくして早春のドライブ旅行が企てられたしだいである。

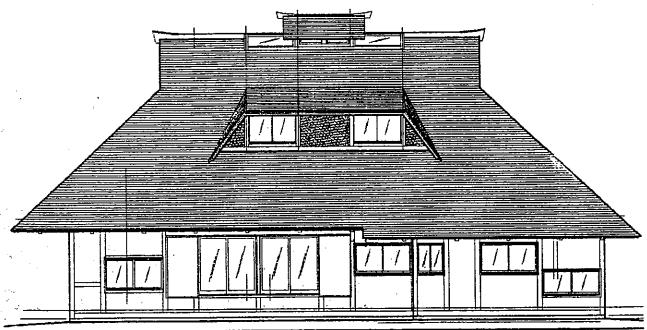
この情報の源は夢屋の野島さん。設計：吉田さん、工事：益子さん、ご存知の移築民家の主である。(住宅建築247号95年10月号) 移築前は会津南郷村の斎藤さんの旧家であった。今回譲って頂けるという民家は、斎藤さんの娘さんの嫁ぎ先である酒井さんのお住まいである。住建を観ての通り、廃屋同然(失

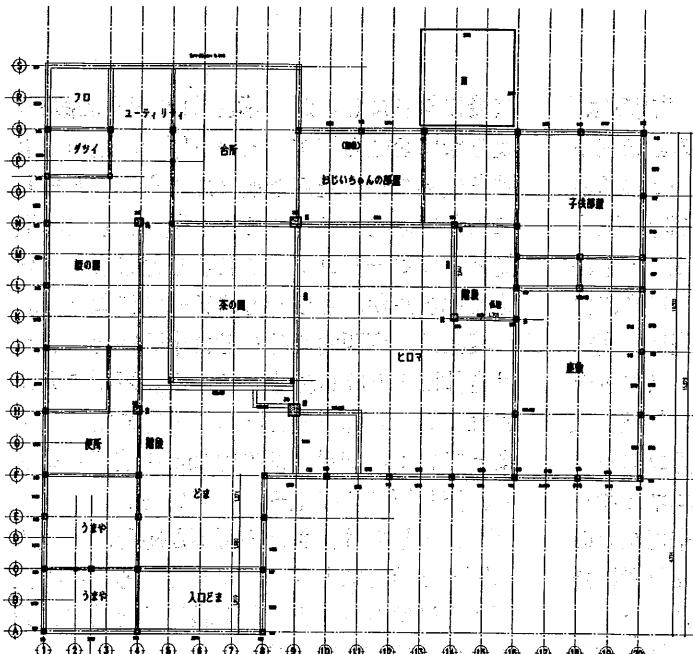
札！)の旧家が“夢屋”として新たな命を吹き込まれ蘇ったことを、斎藤さんは大変喜びに誇りに思い、その思いは酒井さん家族にも伝えられていたのである。明治30年築の民家、酒井さん宅の行く末いかに、との思いは酒井さんから斎藤さんへ、そして野島さんへと届けられた。

4月8日南郷村は冬景色、墨絵のような静けさを背景に酒井さん宅は圧倒的なスケール感で我々に迫ってきた。この後二度三度と足を運ぶことになり、部材の寸法、空間のスケールなどが確認されたが、第一印象の迫力は特別だった。薄く雪化粧した灰色に煙る背景の山と周囲の畠、この時、この空間、に魅了された。

築約100年、越後大工の手になると伝えられた中門造りの農家である。南郷村でも最も規模の大きな農家の一軒に数えられる。建坪約72坪、延べ床面積120坪余、ほぼ矩勾配の萱葺屋根(10年前に鉄板葺で覆う)、最高高さは約11m。台所他の水廻りに増改築がある以外、建具も建築当初のままで、土台(築後に加えられた：施工年不明)や柱裾に多少のいたみが在るもの、よく維持管理された建物である。

▼移築計画北立面図

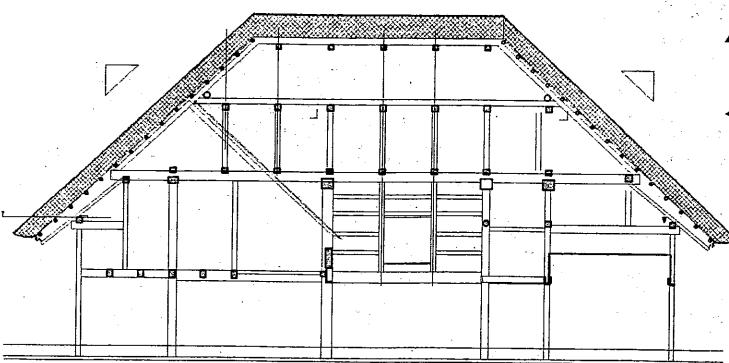
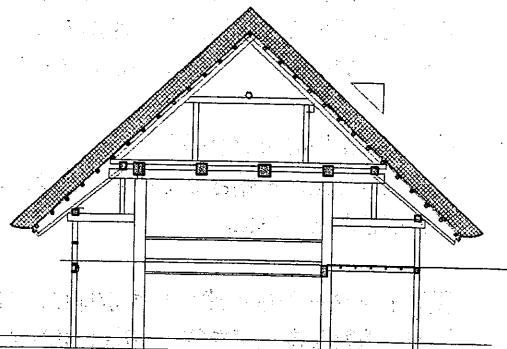




◀ 既存平面図

譲り受けることになった酒井家は築約 100 年の中門造り。南郷村でも最も規模の大きな農家の一軒に数えられる。

▼早春の雪に煙る酒井家



◀ 既存断面図

ほぼ矩勾配の葺葺屋根は鉄板で覆われていた。最高高さは約 11m。

私の近作・活動

とはいえ、宮地さんが求めている“棲み家”には、あまりにもデカすぎる。この家を生かしながら、どんな加工が可能なのか？ゆるされるのか？コストは？許容される時間は？…試行錯誤の嵐に突入した。なにはともあれ実測しなけりや始まらない。10日後には益子さんにも加わってもらい仲間集めて南郷村に集結。忍者もどきの活躍で採寸スケッチ1日で完了。その後10日で、資料整理、実測図作成、縮小案のスケッチ、概算コスト、と基礎データは多くの人の知恵とエネルギーで整えられた。移築先の敷地さえ未だないのだが、この家を生かし続けたい、譲り受けたい、宮地さんの勇気ある決断がくだった。連休明けには、益子工務店の手で、解体作業が始まられ、平行して、実測図面との照合と番付けが行われ、古材はひと先ず会津田島に保管された。ここまで4月8日の幕開けから、電光石火の40日。たくさんの人々の思いが、一束に収斂した、第一幕であった。

第二幕、敷地の選定と設計。

この報告では、省略させてもらいます。次の公演をお楽しみに。

那須インターから程遠からぬ敷地に、11月初旬、地盤改良工事を経て基礎工事がスタートした。年の暮れ、最終週に建て方にかかり、1月末現在、構造軸組が完了、これから屋根壁の下地工事という段階である。完成予定は5月末。7月には“レストランoooo”の開店が予定されている。ご紹介が遅ましたが、宮地さんは建築家。以前から好きで始めた料理の道に入れ込んで、1年ほど前イタリアンシェフ、橋さんに弟子入り。吉田桂二さんとの最初の出会いは師匠の店。那須の家は自宅、アトリエ、レストラン、の複合施設といったところ。

最後になりましたが、移築された民家の概要。既存架構を極力残す、という原則に立って計画を始めたが、先にも述べたように、あまりに大きい建物であったこと、農家としての機能とプロポーション、これらをどのように変えるべきかが、もう一方のテーマになった。最終案は、東西南北それぞれ半間締め、高さは全体に1,100mm縮小している。屋根の大きさは、梁間方向で元と同じ、桁行きで半間縮まっている。結果、軒の出2mを確保しながら、出し桁工法に組み直している。

プランとしては、もとの馬屋が厨房、中央の広間を多目的な土間に改造している。この土間上部にはトップライトを設けると共に、第3層に位置するアトリエのコーナーに採光と通風を意図した越屋根を突き出している。第2層、第3層では、もとの床を除いたり、新しいレベルに新設したり、梁組の原形を残しながら、手を加える計画となっている。

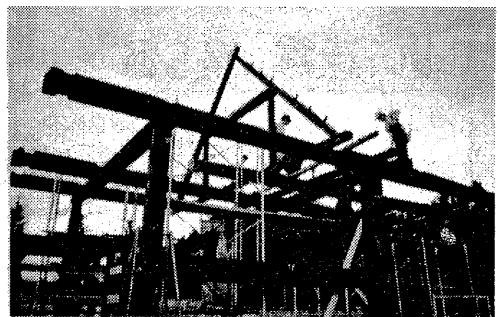
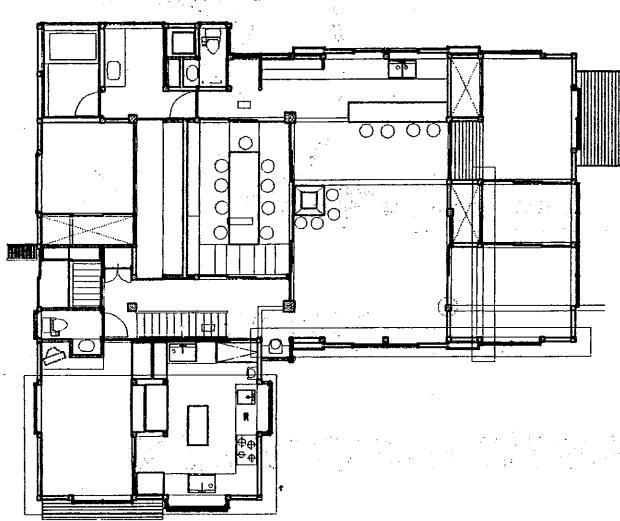
10ヶ月前の、季節を逆戻るような旅が、この計画の始まりを暗示するように、100年の時間を行きつ戻りつ、多くの人々の生活と手垢の染み込むものとして、生かし続ける作業の道半余、終わりのない演にはまり込んでしまった。

以上 中間報告

2000. 01. 31 青島芳雄

▼移築計画南立面図

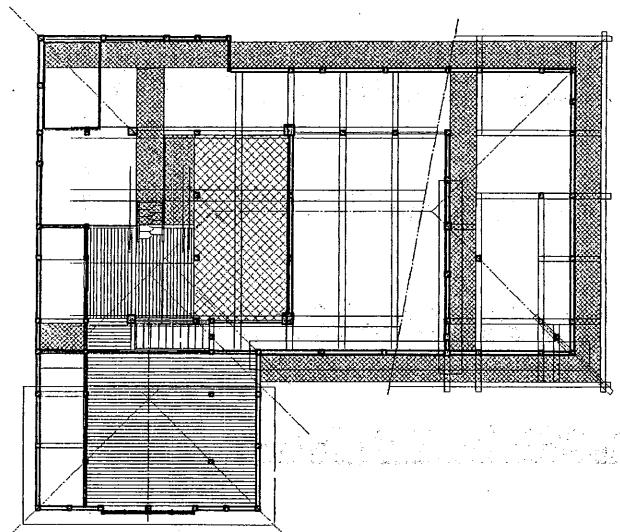




▲移築の建方が始まる

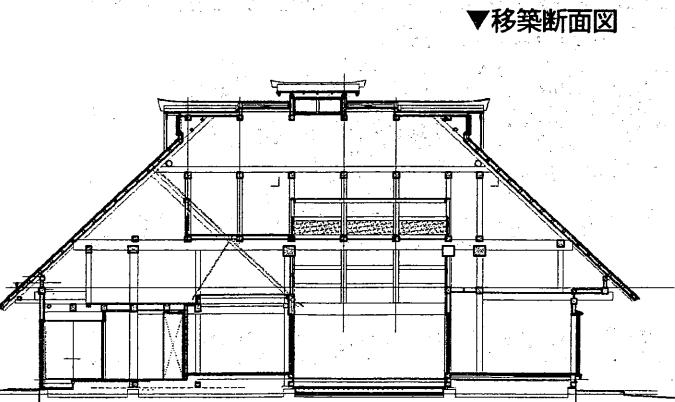
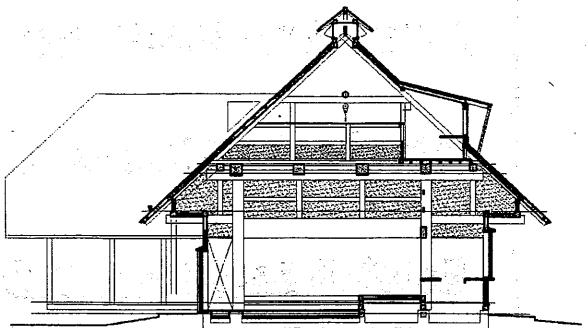
柱・梁の主メンバーは尺から尺2寸

◀ 移築1階平面図



◀ 移築2階平面図

▼移築断面図



▼移築断面図

▼萱が剥がされた小屋組



リ-連載 第5回

日本の季節 。。。一番いい時。。。

とのあかみほ

何だかんだと騒がれながらも2000年はやってきました。小さな頃から破壊的な

世紀末を想像してましたので2000年が迎えられるなんて想像もつかなかたし、生きてる

なって思いました。(すべてはSF映画の影響でしょう)そんな思いがありながらも

こうして2000年を何事もなく迎える事ができたのは、幸せ!! 得した気分です。単純ですが。

なんだか「ありがたさ」を感じてあります。そこで今年は人生の「ありがたさ」をあらためて感じる

年にしようと思ったのです。健康でいる事、色んな人に会える事…沢山ある「ありがたさ」は自分自身

の「ありがたさ」。そんな中でふと感じる「ありがたさ」は毎日あ日様が登り少しづつ季節が変わっていく事

でした。



最近、引っ越ししました。6年間住んでいた、マンションとは名ばかりの自分の部分が好きではなく

帰るのがしんどがた…。住んでる所が嫌いだと毎日がひとつも楽しくないものですね。唯一、窓の

すぐ外にある雑木林は大きさでした。季節の移り変わりを雑木林の姿が変わる様子で

TS

感じました。椎木林の向こうから聞こえる電車の音も…。それが好きだからとずつ引き戻して

先送りにしています。そんな思いを振り切り、昨年の秋新しい家に引っ越し車に乗りました。私を迎

えてくれたのは庭に咲いていた草花達でした。ホトチギス ^{ユキシタ} や鴨足草も誰かが来るのをひそりと待っているか

ホトチギス
杜鵑草

鴨足草

のようでした。そして今庭には椿が咲いています。1輪枝から頂まで茎の中にも季節を分けてしまい

ます。草花達の姿と共に感じる季節は一番いい時を教えてくれるのであります。

引っ越しの荷物は色々想い出と共に箱の中から引き出されました。その一つに「菜」という漫画が

ありました。ちふと色あせた紙を手にページをめくればやさしさがあふれてきました。今の気分にとても

小説

ぴたりの…。本の紹介に次のようなことが書かれています。（わせせじとう作画）

「『菜』は富田耕平菜夫婦を主人公に四季に彩られた日本らしい風物をちりばめながら

家族の折々の情景を鮮やかに描き出す物語。…」生活を通しての草花や動物との

ふれあい、旬の食物などが自然に描けてあります。

忙に忙と気忙い時世、気持ちの中にはこの日本のすてきな季節を感じながら

毎日を過いでいたいものです。

そう、雪明りの中、唯かと一縷に雪見酒とか…。

お6回の筆者は小林一元さんです。
お楽しみに!!



同人紹介

桂設計工房／豊崎洋子

それでも私はこの道を歩きつづけたい

昨今、人生70年とも言われているが、私が建築に興味を持ったのはその半ばを過ぎたころである。そもそもその興味は不登校や非行にはじって行き場を失った彼等の場所として喫茶店を計画したのが始まりだった。

見よう見まねではあったが店の什器のカタログ等を取りそろえ図面をひいた。素人図面であるからさぞや工務店の人も困ったに違いない。今思えば毎日工事現場に監理まがいの事をしていたのだから迷惑この上ない話である。

こうした無知な行いが寛大に許されたとして、私は人との繋がりの中で物を造り上げる喜びを知ったのである。

まりんばの小さな木片が叩かれて出す素朴な音が好きなこと也有ったが、訪れるであろう少年たちとの心の響き合いに期待をこめ、店の名を「まりんば」とした。思惑どおり彼らは毎日、私の小さな店に足を運ぶようになった。

記憶を辿ると、どの高校にも入れず友の入学式の日電信柱の影で泣いたと言う少年はバイクを盗みパトカーに追われ私の店に逃げ込んできた。

事のいきさつを知った私は彼の頬を思い切り平手打ちした。呆然としている彼をしつかり抱きボタボタ落ちる涙を止めることができなかった。

また、15歳という年齢で自殺した父の身元確認をしたという子は父の変わりはてた姿を心から消し去ることが出来ないと言って黄色に染めた頭をかきむしっていた。

家族から学校から、或いは地域からはじき出された子らと疑似親子関係で過ごす日々のなかで個々の異なる事情はあるにしても子を産み、育てる場所であり、家族の拠り所となる家庭すなわち家のありようを考える様になった。

こうして造る喜びと家づくりが結びついたのである。しかし、この道をと決心し学校に通ったとはいいうものの経験の乏しい私はひたすら歩みつづけるしかなかった。今、私はすまいに接して事務所を持った。地域の人とささやかではあるが町づくりに関わり始めた。町で「おばさん」と声がかかる、見ればあの頃の面影を残した顔にやさしい眼差しが宿っている。これが何よりも嬉しい。

建築をするなかで何の表彰状にも縁はないが、それでも私はこの道を歩みつづけたいと考える。しかも楽しく歩んでいきたいと考える。

「今こそ出発点」 人生とは毎日訓練である。

私自身の訓練の場である。（中略）

私自身の将来は、今この瞬間にある。

今ここで頑張らずに、いつ頑張る。

誰の本だったか忘れたが、私が弱気になると思いつ出す言葉である。

掲示板

アフリカ太鼓の響きⅡ

- アフリカの太鼓の持つ木のぬくもりの音にのせて!
わきたにじゅんじ 関本満成のアフリカバーカッショーンを縦糸にYUKIEの
イメージーションあふれる朗読を横糸に 今回も 熟く! 強く! そして、
さわやかな響きをお楽しみ下さい。

平成12年2月27日(日)

午後3時開演(14:30分開場)

春らしの工房 & ギャラリー

無垢里(むぐり)

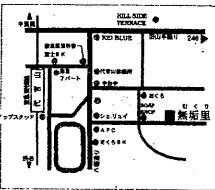
東横線・代官山駅徒歩5分

渋谷区代官山猿楽町20-4

八幡通りに出で赤いレンガの

郵便局よに入る

入場料 3,000円



わきたにじゅんじ

アフリカ太鼓・ジンベ奏者ママティ・ケイタに指導を仰ぎジャズドラム・バーカッショニ奏者として多くのミュージシャンと交流がある。

関本満成(せきもとみつなり)

13才でドラムをはじめる。JAZZやBluesで魅せられ1990年NYVJazzにわたり地元のメンバーと一緒に演奏を重ねる。1992年ジンペと出会い、後半で学ぶ。

YUKIE

感性豊かな即興的朗読を得意とする。今回はアーシュラルグイン(いつも愛路)とインディアの詩でパフォーマンスする。

チケットの予約お問い合わせは無垢里まで

TEL 03-5458-6991(11:00~19:00月曜定休)

■麦人さんの公演

- 日時 3月18日(土)
午後1時30分開演
- 会場 CSKホール
(京王・小田急永山駅)
- 演目 草野心平作

「ごびらつふの死」

- 申し込み先 多摩コミュニティーカレッジ
TEL 042-372-7028
担当 関さん
までお早めに

*麦人さんはてらだかずえさん(会員)のご主人です。また、右公演出演者の寺田路恵さんは麦人さんのお姉さんです。

無垢里を主催されている

金田正夫さんは
生活文化同人の世話人です。

二越劇場 二月舎・文子座・公演 池袋 1F/1F 池袋

デンティスト

—愛の隠れんぼ—

20世紀最後の年、2000年。その記念すべき一年の開幕を飾るのは、江守徹が作・演出・主演の三役をつとめる『デンティスト—愛の隠れんぼ』です。

俳優としてはもとより、創作・翻訳……と多才な活動をみせる江守徹。最近では、テレビのバラエティ番組にも引っ張りダコで「バラエティの江守」の面も開拓。その江守徹が自らの喜劇センスすべてを注いで書き下す、シチュエーション・コメディの決定版! 97年の「あ? それが問題だ」以来、待望の第8作目です。

—ここは歯科医・伊井薫の診療室。開院時間にはまだ大分早い朝、診療室では次々と事件が発生する。まずは、歯科助手・今野登紀子の伊井への突然の愛の告白。そして、国会議員夫人・藤島静香の急患騒動。さらには、伊井の妻・栄子と俳優の柴田千恵哉との不倫疑惑。そこへ、大正生まれの伊井の母・冬子までが登場し、何やら秘密をもつていてる模様。さて、複雑に絡めた愛の隠れんぼの行方やいかに……。



平成12年2月5日(土)~20日(日) 入場料6,200円(全席指定・税込)

日	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
曜	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	
星の部	1時	11時30分	1時													
夜の部								4時								

一般前売り開始日 三越劇場: 平成12年1月3日(月)・文学座: 平成12年1月6日(木) 団体予約受付中

お問合せ・電話予約: 三越劇場 03(3274)8675 (受付時間: 午前10時~午後6時)

文学座チケット専用 0120-481034 (レバテレミニ) 文学座 03(3351)7285

チケットぴあ 03(5237)9999-9988 CNプレイガイド 03(5802)9999

トピックス

生活文化同人の会員でもあります、
新建築家技術者集団の事務局長 山本厚生さんが
「赤旗」紙上にて紹介されましたので
ここに転載させていただきます。

2000年1月15日（土曜日）

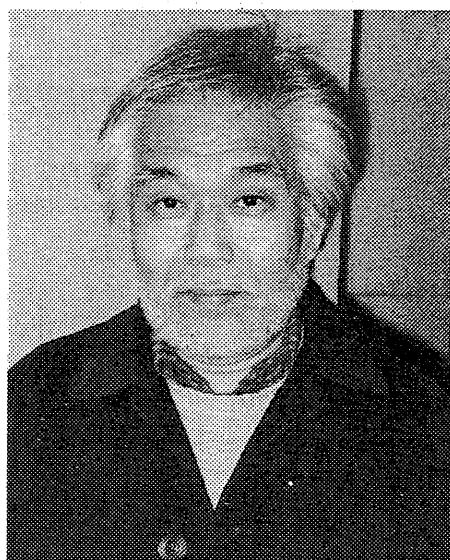
しんぶん 赤 旗

話題



結成30周年を迎える新建築家技術者集団の新事務局長

山本 厚生さん



生活の視点から建築設計をすすめよう。建築分野の運動に身を投じて三十年余。二〇〇〇年に三十周年をむかえる新建築家技術者集団（新建）の事務局長に昨年十一月に就任しました。

「トレーデマーク」は、きれいな白いひげ。

「住まいづくりは、建築家が『これがいいんだ』と押し付けることがない。生活の視点からの住宅を設計するには、どんな家族なのか、どんな悩みをかかえているのか、ということをつかむ」とか「始まるんですよ」。建築

生活建築研究所所長。千葉大学講師。東京芸大卒。『家族と住まい』などを執筆。東京都大田区在住。61歳

の基本は、「人間学」にあるというのが持論。新鮮な視点について語り込まれています。

建築を専攻したのは「オールマイティ」の兄に唯一勝てたのが絵だったから。趣味の「詰め将棋」は「もの造りにはあらゆる問題を解かなければならないから、そのための思考訓練になっています」。

「裁ち折り紙」という特技の持ち主。「結婚式でいつもいろいろな文字をつくりて披露しています」。見ていく前で折り紙を細工し一度に裁断。開くとマの文字のできあがりです。

「あたりまえのことですが、家族のきずなを強め、人と人との関係をよくする住宅建築が大事。家の『押し売り』はいけません。新建の運動と、保育所づくりや住宅つくりの経験から学んだんです」。新事務局長としての抱負は「夏(じろ)から新建の綱領の議論が巻き起こり、自分がどう生きるのかと結んで、若い人たちが運動に参加しはじめています。新建の運動を新しい段階に発展させ、受け継いでいきたい」。

(宇)

お詫びと訂正

前回の会報（No 40号）に掲載されました小町和義氏の講演記録中の6頁の19行目に関して、

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

東京建築事務所（平松建築設計事務所）

昭和二十四年、山口文象建築事務所ではいよいよ仕事がなくなり、山口先生の紹介で、後輩の平松さんの事務所、東京建築設計事務所に行く事になります。東京建築設計事務所は、木村得三郎、平松義彦、今泉善一、道明栄二の4人で共同経営という新しい形をとっていたそうです。そこはたいへん忙しかったようで、労働組合の全日本造船労働組合会館などの仕事をしていた。小町氏は、山口先生の家を出て住む所が無く工事中は、そこの飯場にいたそうです。職人が居るそんな所に入つてみたかったとおっしゃっていました。全造船は、今でも原宿にブティックとして姿を変えて残っているそうです。その頃建築家達は、立体最小限住宅を競つて建てていた時代でした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

が正しい講演内容でした。東京建築事務所は、主に労働組合関係の仕事をして忙しく、進駐軍の仕事はしておりませんでした。

お詫びして訂正させていただきます。

世話人 日影良孝

■2000年第1回「語る会」のお知らせ

日 時 3月1日(水) 午後6時30分から
場 所 代官山「無垢里」
講 師 松井郁夫
テー マ 木構法とデザイン

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います(当然、酒代などは自前、割り勘になります)。
- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。
- ・「語る会」担当者

桂設計工房 豊崎洋子
TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■99総会報告

(99.12.10 於: 東上野 檜)

1. 会計報告

収入の部

99年度 726,811円 繰越金 100,462円 合計 827,273円

支出の部 総計 767,745円

2000年度繰越金 59,528円

にて、了承されました。

2. 2000年度世話人

吉田桂二(代表) 岡部知子(事務局) 岸未希亞(会計)

松本昌義・内藤敬介(会報) 益子昇・日影良孝(機関誌)

斎藤彰(大平建築塾実行委員長) 江原幸壱・豊崎洋子(NPO準備)

新井聰・石引浩子・戎居連太・勝見紀子・金田正夫・小林一元

佐々伸子・佐々木貴章・鈴木久子・高松俊秀・飛山龍一

長谷川順持・八代茂子・吉塚幸雄

以上の方が選出されました。みなさんよろしくお願ひいたします。

3. 2000年度の年間テーマ

それぞれにおいて捉えられる「環境」ということを、これからの活動基盤にしていきたいという主旨から

「環境の分化」

と決まりました。

4. 第7回大平建築塾について

8月19日(土)から21日(月)までの開催が決定されました。

5. 2000年度の定例会について

いくつかのテーマおよび講師についての提案がありました。

ご意見・ご要望がありましたら事務局までお寄せください。

■2000年度第1回目世話人会報告 (00. 01. 21 於: 飯田橋 もてなし)

1. 第1回目の定例会が決まりました(表紙参照)
2. 大平建築塾 8月19(土)~21(月)について

基調講演 内山 節さん(決定)

分科会の候補

1. 大平の民家の保存と再生そして新築は
2. 唐松の伐採
3. 母性と建築

大平建築塾は今年も大勢の皆さんのご協力が必要となりますので、
よろしくお願ひいたします。

■次回世話人会のお知らせ

- 3月10日(金)午後6時30分から 場所 飯田橋「もてなし」

*生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■2000年度会費納入のお願い

- 今回、郵便局の振込用紙を同封しました。滞りのない会の運営のために2000年度の会費未納の方は急いでお振り込みください。振込先等、詳細は前回の会報に掲載されています。不明な点は事務局までお問い合わせください。

■会報編集局より

- 今年から会報担当が変わりました。原稿は下記編集局までお願いします。
- 会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。
- 同人会員の活動等、情報を寄せください。
- 掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- 会報を偶数月の初頭に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆編集後記

- 慣れない編集作業をおおせつかり、あたふたしています。寄稿、叱咤激励、その他もうろろ、みなさんよろしくお願ひいたします。おっと、もう2月か。今年はスキーに行けないかな。(まつもと)
- 民家芝居「風のレジエンド」が、1月7日にニューヨークで20分程の短縮版で上演されました。あらためて会報にて報告したいと思います。大平発NY行、うれしい限りです。(ないとう)

会報編集局 〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-2-201 松本昌義
TEL/FAX 047-332-4413 Eメール mmatumo@d1.dion.ne.jp

2000年度事務局: 〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢238
岡部材木店 岡部知子
TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491
Eメール tankoro@post.click.or.jp

生活文化

S·E·I·K·A·T·U·B·U·N·N·K·A

生活文化同人会報 2000年第2号 No.42

もくじ

・第2回目定例会	1
・第1回目定例会報告	2
・情報 民家再生と「住宅建築」	6
・私の裏技 おもちゃのいいわけ	10
・リレー連載 「日本の」里山	14
・お便り 上中町熊川宿から	16
・同人紹介	18
・掲示板	19
・「語る会」のお知らせ、事務局報告	20

2000年第2回
定例会

P歴史的環境へ
保存
~東西を結ぶ~

4月20日(木)
6:30~9:00PM

池袋藝術劇場中ホール

〈講師〉

陣内秀信氏
(法政大学工学部建築学科教授)



…陣内さんのおすすめ書籍の中でも、私はNHK出版世界・わが心の旅
シリーズの『ヴェネツィア 光と陰の迷宮(ラビリス)』がお気に入り
だ。地図イラストや写真が豊富で、長い間にわたる都市分析を経
た陣内さんのガイドでたのしく街歩きをしている雰囲気が十分に
味わえる。「あの地図イラストが特にいいですね」「あああれは
瀧田ゆうの娘さんが描いているんだよ」――

世説人 益子 昇

会費 2000円(年会員以外の方、学生は半額)

住宅と熱環境

講師 前田誠一氏／イゼナ代表

2月 18日（金）18:30～20:30

池袋藝術劇場小会議室 401

快適な熱環境は？

空つ風の吹く外から空調の効きすぎた室内に入ると、お肌の曲がり角をすぎた故ばかりではない居心地の悪さがあります。空気の乾燥です。

快適な熱環境も老若男女によって微妙に違いがあるようで、職場で空調をONするのが男性、OFFにするのが女性が多いと聞きます。帰宅しても『空調の効かせ過ぎ』を非難され、しょげている夫族 多いのではありませんか？

気候の厳しい北国は別として、古来から日本の建物は夏を旨とすべしとされ、室外も室内も変わらない生活が長く続いてきました。

近年になって、囲炉裏・火鉢・こたつで暖をとる暮らしがストーブに代わり、燃料も薪や炭から灯油・ガスになりました。

今では、ヒートポンプ・FFヒーター・床暖房が灯油・ガス・電気を熱源として使われ、暖房方式の地域差もあまり変わらなくなっています。

そして変わらないのが、如何に早く・高く熱を発生させるかを目指していることです。

室内が暖かくなるにつれて北国同様、室内外の温度差が生じ、結露や空気汚染等の問題も出てきました。

また燃料を消費することで石油の枯渇、ピーク時に会わせた電力需要を満たすための原子力発電所の建設、そして余ってしまう深夜電力等矛盾も生じてきています。

快適な熱環境とはどんなことなのか、エネルギーはどうするのか、将来をどう見据えて技術開発をしているのか、考えるきっかけは何だったのか等を語っていただきました。

提唱されているアクアレイヤーヒーティングシステムについては、

イゼナ床暖房システム 株イゼナ 0471-82-7437

住宅建築 1998.12月号

建築とまちづくり 1999.2月号

G A JAPAN 1999.3月号

住まいと電化 1999.1月号

等をご参考ください。

システムの概要

床下に水の層を設け、その一部を暖めることで水が対流し、床全体が暖まる床暖房システムです。

床暖房との出会い

商社に勤め床暖房を扱っていて、自宅に取り付けました。プレハブメーカーで建てた住宅で、ストーブを使うと床と天井の温度差が30度近くになり、発売されたばかりの床暖房のパネル6枚を敷いてみました。

木が好きなので木造在来工法で建て替えるとき、4種類の床暖房（電気の乾式・埋設、温水の乾式・埋設）を部屋ごとに分けて入れてみると、モルタルに埋設したものは、寝る前にスイッチを切っても翌朝寒くないことを体験しました。

熱容量が大きいから立ち上がりは遅いけれど冷めにくいいのです。
柔らかい暖かさでした。でもモルタルの堅さが難点で、木の床のしなりが好きでした。

熱容量の大きい材料を理科年表で探してみると、水がコンクリートの2倍有ることがわかりました。そして実験が始まりました。

床暖房への疑問

これまでの床暖房のシステムにはいろいろ疑問を抱いていました。
『床暖房をして床材に無垢の板を使いたい』というお客様の希望に添うことができない事とか、低温やけどの注意書きとか、家庭用のシステムとして大げさではないか等々
メーカーに「人にとつての快適さとは何か」という視点が欠けていることを感じていました。

床材は、広葉樹を扱っている会社と共同開発をして、独立と同時に栗材を床暖房用床材として商品化しました。

熱環境も躯体の一部

OMソーラーの理論にショックを受けました。建物の設計が出来上がった時点で、熱環境も一体に出来上がるのです。

それまでの、出来上がった家に部品として後から暖冷房機を着けるのとは違いました。
部品としての床暖房は無くなると思いました。

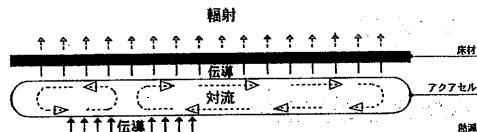
これからの熱環境

春や秋のように、空調を意識しなくても気持ちの良い季節のような穏やかで安定した熱環境を、建築主や設計者と作りたい、いすれば太陽エネルギーだけで成り立たせたいと語る前田誠一さんでした。

Aqua Layer Heating System (アクアレイヤーヒーティングシステム) の概要

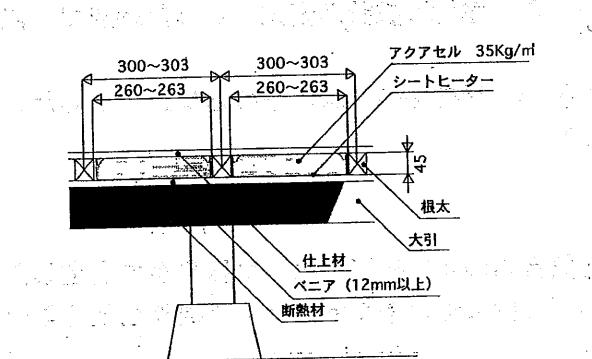
前田誠一

■基本原理図



このシステムは、部屋の全根太間に、袋（アクアセル）に入れた水で満たし、熱源によって水温を30°C前後の低温（温度の設定は自由に設計できる）に加熱するものである。標準タイプの水の層の厚さは根太の高さと同じ45mmである（ただし、熱源に深夜電力を使用する場合なるべく低い温度で熱をため込む必要があるため、水の層の厚さを90mm以上とする必要がある）。床暖房範囲は基本的に床全面であることが望ましいが、部分的に敷き込む設計も可能である。電気床暖房とした場合、敷き込み面積とワット数を独立して別々に決めることができる唯一のシステムである（従来の電気床暖房では不可能なことである）。水の層の中では、温度差により自然対流が起きる。その結果、循環ポンプなどの動力を必要とせず、温度の高いところから低いところへ熱を効率良く運ぶことができる。この対流機能があるため、

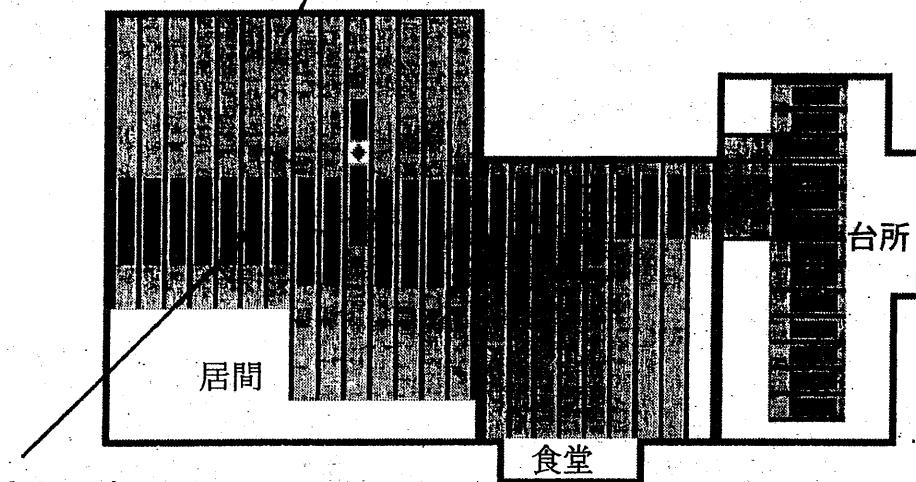
水の層の一部分に熱を与えるだけで床面は隅々までほとんど均一な温度になる（上図）。このことが例えば太陽熱と電気ヒーターなど複数の違った熱源を同時に組み込むことを可能にしている。このように対流機能を持っているため身体の密着によって水の層からの発熱が妨げられても、その部分だけに熱がこもらないので、低温火傷を起こすことはない。アクアセルは長さが自由な蓄熱材であり、同時に高速熱伝達材という特性を持った建築部材と言える。このように対流機能を備えているため、電気ヒーター、温風、温水などの熱源を、単独はもちろん、複合化して使うことが可能となる。またダイレクトゲインを利用する設計も可能で、パッシブソーラーハウスの部品として利用されることを最終的な目的としている。基本的な原理は図の通りである。



千葉県我孫子市W邸実例

アクアセル（水の入った袋）

- ・303ピッチの根太間に入れます。
- ・厚さは45mmです。
- ・長さは自由に決められます。
- ・どんな形の部屋にも全面に入れられます。
- ・袋は根太ごとに独立しています。



シートヒーター

- ・アクアセルの下の一部に入れます。
(自然対流で全面に熱が伝わります。)
- ・部屋の必要発熱量に合わせて長さは自由です。

W邸は各部屋ともヒーターの発熱量は $50W/m^2$ です。

台所は厨房セットや食器棚、冷蔵庫などがあるため床暖房面積が少なくなってしまいますが、部屋全体の面積に対して $50W/m^2$ のヒーターが入って有ります。そのため、他の部屋に比べるとアクアセルの長さに対してヒーターの割合が多くなっています。

この様に、床暖房の設置面積と発熱量は独立して自由に決めることができます。

コントローラー

- ・一般的の床暖房のように温度を設定することができます。
- ・1日に2度通電できるタイマー機能が有ります。

民家再生と「住宅建築」

日影良孝

一人立ちした僕の最初の仕事は、幸か不幸か民家の再生でした。若干25か26歳の時で、岩手の山育ちなのに民家の存在も知らず民家に対して興味もそれほどない年頃でした。

当時1987年頃は今のように民家再生ブームでもなく（と言っても、たった13年ほど前ですが）、民家再生の仕事を初めて行うにあたり、参考とした資料は、「住宅建築（建築資料研究者発行）」に掲載されたの降幡廣信氏や岡山の古民家再生工房の作品でした。民家再生を学ぶために他の建築雑誌も探しましたが民家の再生についての記事は乏しいように思いました。ちなみに建主は有名な作家で、その奥様は住宅建築は以前から読んでおりました。その奥様曰く、吉田桂二さんの文章は、建築家中でも素晴らしいと話していたのが印象的でした。

住宅建築が発行されたのは1975年です。

僕の本棚には全ての「住宅建築」がそろっていませんので、建築学会図書館で住宅建築を1号から読み返しました。民家の再生は、当初は「再生」ではなく「増改築」「改造」と、その手法を解説しています。

「住宅建築」は民家の改造を積極的に取り上げ、と同時に「日本の集落（高須賀晋+畠亮）」「住宅の生産と適応の技術（安藤邦廣+乾尚彦）」などの連載を企画実行し、失われつつある日本の風景や民家、伝統技術の継承に建築家と共に力を注ぎます。そして1983年9月号で民家を蘇らせることを初めて「再生」と定義し（降幡廣信氏の解説文「民家再生工事について」）、民家再生の作品を積極的に掲載し続け現在に至ります。掲載する作品の数は徐々に増え続け、民家だけではなく一般住宅の再生も多く紹介するようになりました。再生を手がける建築家も同時に増え、そしてまた再生の手法も建築家によって表現の手法が様々で、僕のような修行中の身にとって学ぶところが多くあります。

僕が「住宅建築」になぜこうもこだわるかと言うと、民家再生を育てたのは「住宅建築」であり、今でこそ民家再生を一般向けの雑誌が数多く特集するようになりましたが、その下地を（いや幹と言ったほうが適切かもしれない）造ったのは「住宅建築」ではないかと、しばしば思うからです。

そこで今回は、創刊号から「住宅建築」に掲載された民家再生の作品の全て（だと思いますが、力の許す限り調べたつもり！漏れがあったら申し訳けありません。今回は数寄屋建築や文化財的なものはできるだけ省きました。）を紹介します。この圧倒的な実績がわかると思います。

■建築雑誌「住宅建築」民家再生の作品リスト集（合計213事例）

（例えば7706は1977年の6月号を意味します。設計者は事務所名ではなく建築家名を記載します。敬称は略させていただきます）

7701 連載「日本の集落」（高須賀晋+畠亮）

7706 伊賀上野・加山又造邸（建畠嘉門+吉沢朋子）／伊賀上野の住まい（番浦史郎）

- 7902 山田邸、生野邸、福沢邸、草間邸（降幡廣信）／大林邸主屋増築（東京造形大学VD研究室）
- 7910 連載「住居の生産と適応の技術」（安藤邦廣+乾尚彦）
- 7911 大正建築の改造T氏邸（小西敏正）／古材再生-電柱砲-（星野厚雄）
- 8001 岐阜M邸（及川邦昭）
- 8107 松本邸（星野厚雄）／論文「民家再考」（降幡廣信）／三郷の家、三才の家、三ツ沢の家、穂高の家（降幡廣信）
- 8203 箱根H山荘、木曾駒・尚半荘（石野康男）／古都の家（高原一郎）／関口邸・土間改造（大江アソシエイツ）／M邸（降幡廣信）
- 8309 論文「民家再生工事について」（降幡廣信）／松本・草間邸、駒ヶ根・小平邸、安曇・武井邸、伊那・小林邸、岩間・小澤邸
- 8406 論文「民家再生考」（降幡廣信）／崎山の家（志水正弘）／塩尻の家、杉戸の家、岡部町の家（降幡廣信）／GALLERY-遊、いずみ野の家（高木敦子）／武芸川・武蔵邸、美濃閥・酒井邸（杉下均）
- 8411 中山邸（矢吹昭良）
- 8508 杉戸・藤城邸、大船・甘粕邸（降幡廣信）
- 8605 内尾の家（小銭賢一）
- 8607 犬山・宮田家住宅（小町和義）／堀金・和田邸、木曾平沢・手塚邸、辰野・中村邸、焼津の民家・曾根邸（降幡廣信）
- 8701 宇佐長州新町の家（星野厚雄）
- 8801 鮎える民家（矢吹昭良）／鮎える民家（樋村徹）／朝霞の家（鈴木喜一）／深坂の民家（小河原一郎）
- 8803 柳原・緑艸舎（宮本忠長）／岡山赤木邸（矢吹昭良）
- 8806 復元・会津田島の馬宿（鈴木喜一）
- 8809 白杵・小手川商店、白杵・小手川家住宅、甲府・鈴木家住宅、焼津・曾根家住宅、大分・得能家住宅、市川・薮崎家住宅（降幡廣信）
- 8810 アトリエ・土蔵改造（萬羽增雄）
- 9002 メゾン・ド・メール、メゾン・ド・ペール（木下龍一）
- 9005 白市の家（矢吹昭良）
- 9005 鎌倉の大屋根、山中湖の蔵座敷（日影良孝）／松本邸（吉井深+小林健二）／安曇野の家（萬羽增雄）
- 9106 東播州・山中荘（木下龍一）
- 9104 鎌田邸（安井妙子）／旧土岐邸洋館（時野谷茂）
- 9108 鷹美泉石記念館（松井郁夫+十川百合子）／篆刻美術館（松井郁夫）
- 9109 英田町の家、蒜山の家（樋村徹）／画家と写真家の家（日影良孝）／倚松庵（神戸市都市計画局再開発部再開発課）
- 9110 小下田の家（大川伊奈美）

- 9 1 1 1 真木建設の一連の仕事
- 9 2 0 2 府中市郷土の森 町家の移築復元・旧田中家住宅、旧府中郵便取扱所、旧島田家住宅（渡邊保忠）
- 9 2 0 4 M邸、飯田・吉沢・村島染色工房、栗の館（降幡廣信）
- 9 2 0 5 荻原邸復元増築設計（宮井昭隆）
- 9 2 0 7 桂樹舎（吉田桂介宅）／民族工芸館、和紙文庫（島崎英雄）／八尾の棟梁の仕事
- 9 3 0 1 大和の農家（増田明彦）／二上荘（日影良孝）／池本邸（畠谷克司）
- 9 3 0 3 阿波の里・民家の再生3棟（木下龍一）
- 9 3 0 6 都会の中の小さな家・アユミギャラリー（鈴木喜一）
- 9 3 1 0 半宝庵（二村和幸）／いかしの舎（岡山・古民家再生工房）／塩尻短歌館、旅館・後藤又兵衛（降幡廣信）
- 9 4 0 1 京都・若王子の家（横内敏人）／紫竹の家（藤岡新）
- 9 4 0 4 江戸・商家の保存再生・上花輪歴史館（水澤工務店）
- 9 4 0 5 大平宿の保存と再生（吉田桂二+大平宿設計会議）
- 9 4 1 0 高柳町かやぶきの里づくり、おやけ、いいもち、荻の家、島の家（日影良孝）・九三郎邸（今井茂和）／プーライエ、大子の民家（鯨井勇）
- 9 5 1 0 論文「建築創造の継続性としての民家再生」（吉田桂二）／坂本善三美術館、那須の家（吉田桂二）
- 9 6 0 1 霞中庵（中村昌生）
- 9 6 0 4 座談会「住み継ぎについて考える」（藤原恵洋+日影良孝+加藤雅久+高橋大助）／弓弦の家、幸手の家（長谷川敬）／加茂町の家（田代純）／西小山の家（前田光一）／谷中の家（野老正昭）／給水塔の家／西原の家／工場のある落柿舎（川口通正）／文の里の家（吉羽裕子）／突きあたりのない家、記憶を受け継ぐ家、二世帯の家、飛び立ちたい家（吉田晃）／昭和の洋館（日影良孝）／雑司ヶ谷の家、横寺の家（鈴木喜一）
- 9 6 0 8 論文「リニューアルの時代に向けて」（三木哲）／礫庵（川口通正）／SUPPINの家（小池秀夫）／目白の家（立岡陽）／豊中の家（坂本昭）／NG邸（玄・ベルトー・進来）／北新宿の家（黒川龍三郎）
- 9 6 1 1 町づくりと民家・石畳の家（吉田桂二）／内子の特性を生かした町屋づくり5題（永見進夫）
- 9 7 0 2 築300年の被災民家を再生・明石の家（神家昭雄）
- 9 7 0 3 龍野の町家（郡裕美）
- 9 7 0 4 越中五箇山・上平村合掌造り民家の再生・民宿 吾郎平（かたやま設計）、合掌コテージ（創建築事務所）
- 9 7 0 5 いりあい村の家（小町和義+関谷真一）

- 9709 御津の長屋門（矢吹昭良）／英田町の家（樋村徹）／黒谷の家（大角雄三）／谷万成の家（神谷昭雄）／「板屋」再生（佐藤隆）／煉瓦蔵のある家（秋葉謙介）／らいこう庵（村重保則+アルバロ・バレラ）／桔梗ヶ丘の家（畠谷克司）／小西別荘（松井郁夫）／犬飼邸、ラウンドエッジの家（椎名英三）／旧逸見勘兵衛家住宅（吉田桂二）／今宮の醤油屋（柴田純男）／論文「登録文化財で町おこしができる」（安井妙子）／論文「会津田島の山村道場」（鈴木喜一）／論文「文化財登録制度で多くの歴史的建造物の継承を」（後藤治）
- 9710 鎌倉・御成小学校の改築
- 9807 論文「建築家の死滅と再生」（三木哲）／論文「創造的行為としてのレストア口」（陣内秀信）／阿佐ヶ谷の家（堀部安嗣）／両国の家（大野正博）／対峠荘（三澤康彦）／幸町の家（田淵諭）／我孫子の家、柏の家（牧昌亮）／来光庵（P H STUDIO）／E邸（インテンショナリーズ）／関口の家・富喜庵（伊郷吉信）／多摩の家（北村淳）／千駄木3丁目の家（松塚昇）／佃の長屋（安田滋）／ずしてい（日影良孝）／桑原さんの家（菊地芳明）／西荻の家（三木哲）／鎌倉・御成小学校の改築・再生保存への道
- 9810 軽井沢K山荘、北軽井沢O山荘（建畠嘉門+吉沢朋子）
- 9901 農家のアトリエ（高砂正弘）
- 9902 消えゆく民家の残すもの・浜徳太郎邸（浜素紀）／土居邸実測記（日影良孝）
- 9903 猫の家改築工事（鈴木喜一）
- 9905 DEMODEL Project 6（郡裕美+遠藤敏也）／In The Sky（倉島和弥）／代官山の家、暮らしの工房&ぎゃらりー無垢里（金田正夫）／COMPOSITION（橋本健二）／鮚江陶房（酒井宣良）／螢雪居（田村芳夫）／矢掛の家（矢吹昭良）／大多羅の家（神家昭雄）／吉の農家（大角雄三）
- 9906 サンシティーの家（半田雅俊）／D.SOHO改装（鈴木利美）／T-HOUSE Re-newal（山崎雅雄）／青葉台のアトリエ（藤岡新+山崎雅雄）／青山の家+希須林青山（藤岡新）／田端の住まい、板橋の住まい（高橋昌巳）／K-room（長田直之）／Condominium Kura（細谷功）／千鳥庵（長町志穂）／Ku,ハウス（楠本菊實）／OMIYA・1・97（斎藤祐子）／仙川の家（松本直子+砂長裕子）／桜ハウス今泉（郡裕美）／もろみ蔵（谷重義行）／論文「転用から展用へ」（江原幸吾）
- 9910 縁際の囲い（東樋口護+河原佳明）／都市別荘（馬場徹+浅見俊幸+小松達太郎）／京都・寺田の家、伊丹・旧街道の家（山本良介）／櫻井邸（栗山裕子）／サロン・ド・ヴァンホー（樋村徹）／奥備中風土記館（丹羽秀善）／宇都宮の民家再生（松井郁夫）／笠間・南吉原の家、友部の家（中村昌平）／論文及びインタビュー「民家の解体を通して学ぶ」（小林政一）、「残すことはつくること」（鈴木久子）、「保存再生ネットワーク（鈴木喜一の紹介する人と組織）」、「民家再生新しい住まい造りの模索にあたって」（内田青蔵）

※上記した作品と重複するものがあるが住宅建築別冊「民家の再生-降幡廣信の仕事-」「民家再生-事例集・1-」（共に建築資料研究社発行）に民家再生の作品が多数掲載されている。

私の裏技

おもちゃのいいわけⅡ

92年夏、おもちゃの木彫りをはじめました。

知人が、切り出しでしやもじを削っているのを見たのがきっかけ。

拾ってきた木片で、新幹線とキリンをつくりました。

それ以来、焼却炉や道ばたの木片拾いがはじまりました。

木片が話しかけてくるのです。

わたしをみてもったいないとは思わないかい。

かわいそうだとは思わないかい。

それまで、ろくに刃物を研いだこともなく、

無茶な削り方で刃先を折ったり、

バンドエイドの箱はすぐに空っぽ。

ぞう、きりん、くま、くじら、いぬ、ねこ、らくだ、すべてござるす、
さい、かば、うま、やぎ、ひつじ、りす、ねずみ、ごりら、さる、いの
しし、とりげらとぶす、ぶた、うさぎ、らいおん、こあら、たぬき、ば
んだ、わに、かえる、かめ、とかげ、さかな、あざらし……

いろんなものができました。木も、
ひのき、さわら、こうやまき、すぎ、さくら、くり、けやき、べいひば、
あおもりひば、くほうのき、かつら、せん……

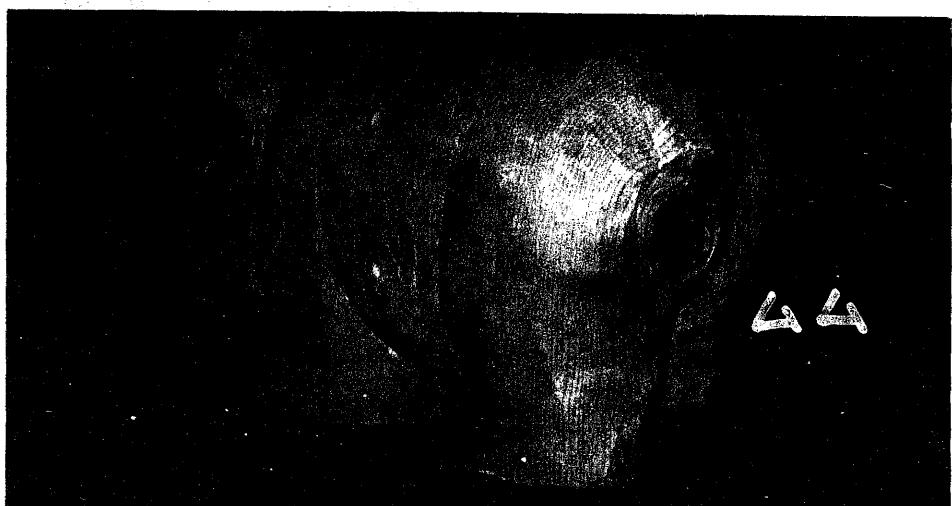
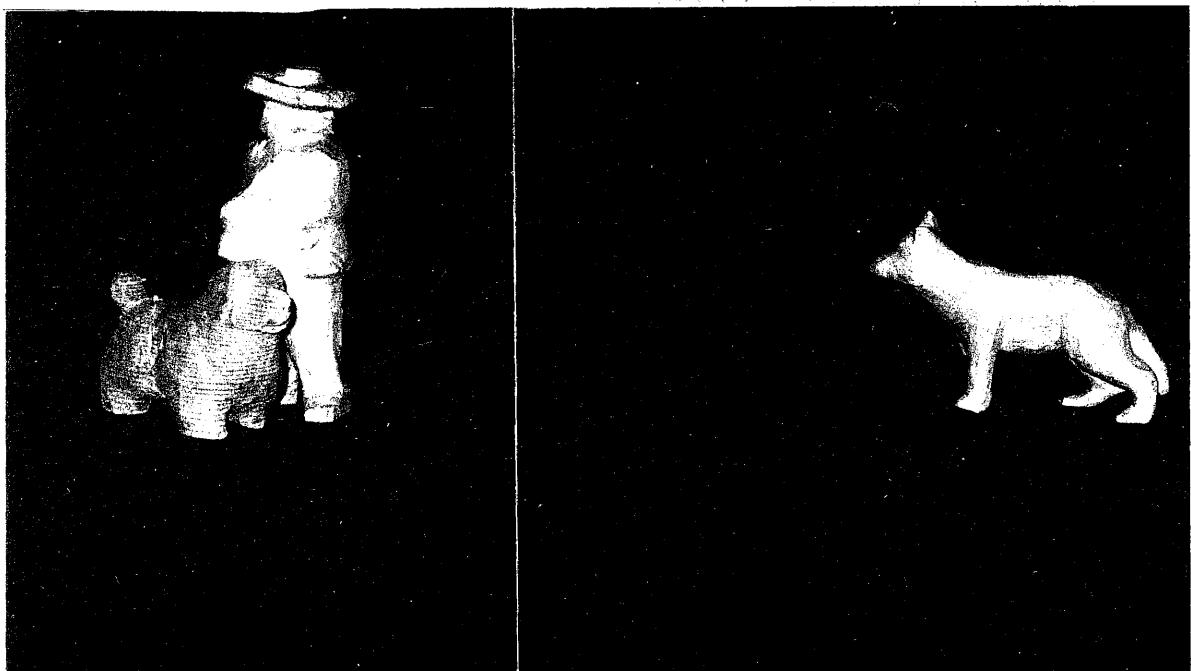
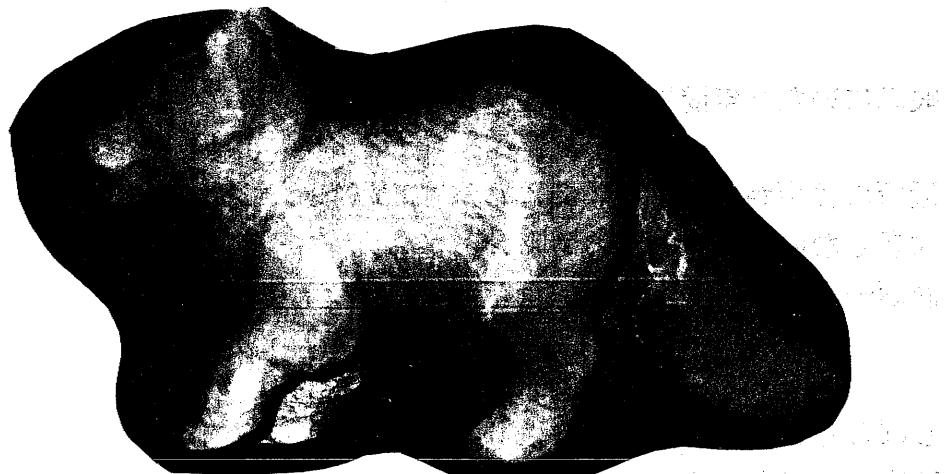
捨てられるくらいだから性格、姿もまちまち

歳を重ねた木は柔らかいけど腐れがあったり、若くてあてのある木は、
堅くて刃物をなかなかうけつけません。

半日でできるものもあれば一週間以上かかるものもあります。

長細い木片はきりん、正方形ならぞう、死に節はお尻の穴。

捨てられたまんまの形をなるべく活かして、気ままに、気ながに削ります。



岐阜にいた2年間に百数十匹以上できたかな。

近所に教会があって、牧師さんがほしいというので、遠慮しないでもっていってといったら、段ボールに詰めてほとんどさらっていました。

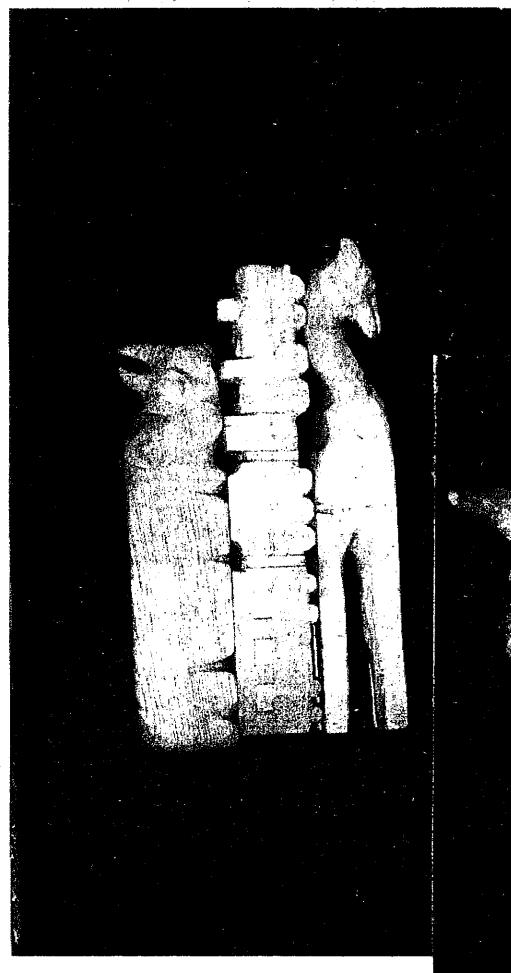
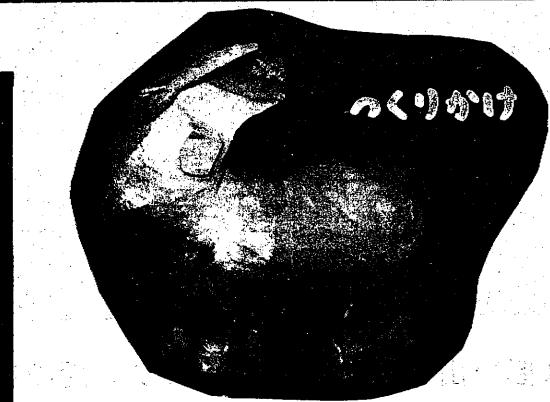
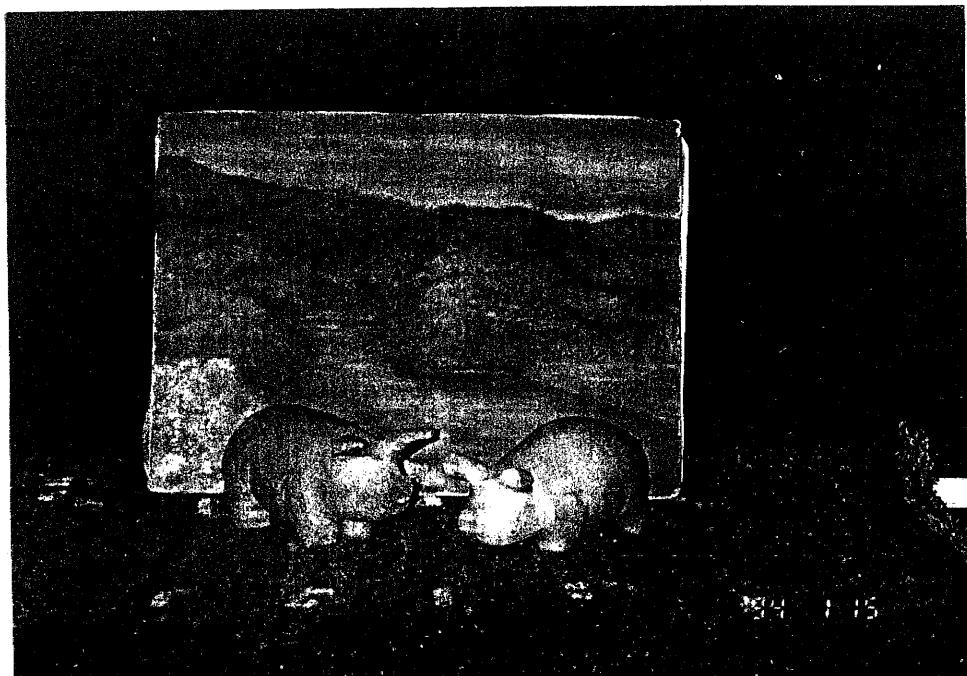
しばらくして、牧師さん家に遊びに行ったら、動物たちがまっくろ。手あかで。小さな子供や障害者のある子がにぎったままはなさないんだ。嬉しかったね。

東京にきて数年。全く作っていませんでした。なんとなく気ぜわしくて。

最近、また、はじめました。
すっごくいいことがあってね。

写真は、牧師さんがもっていった残りと最近つくったものです。

同人 飛山龍一



日本の里山

小林 一元

梅が盛りの里山の風景

人里近くの山

を里山といいます。

私の棲む田舎町は

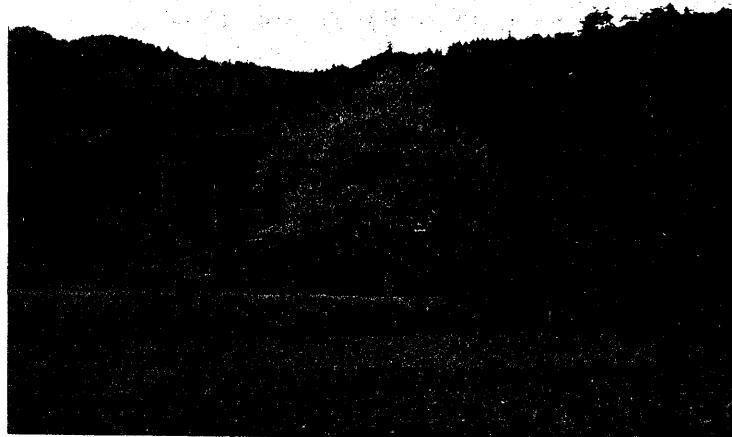
関東平野と秩父山

地のちょうど境目

に位置していて、

東を見れば広々と

した平野が見え、



西には低い山々が連なっています。街の中で生まれた私は、同じ町の山裾にあった茅葺きの母の生家が好きで、小さいころはよく泊まりに行つたものです。

近くには、山の湧き水がいつも流れている水量の多くない沢があり、夏はスイカを冷やして、水遊びをしたり沢蟹をとったり、時には大きな青大将に出くわしたこともあります。沢の水源近くの谷津田には、冬になると氷が張り、スケートも楽しめました。

谷津田（やつだ） 谷戸ともいい、里山の侵食谷に作られた水田のこと。また侵食谷のことを谷津といい、○○谷津など地名に用いられることがある。

家の裏には、山なりに傾斜した畠とその廻りに琵琶の木があり、
その先は赤松林と雑木林が広がっていました。午後になると、囲炉
里や竈の焚き付け用に、雑木や松の落ち葉と落ちている小枝を竹籠
に拾い集めるのは、子供たちの仕事でした。当時の里山の自然は、
生活のなかにあり、虫やその他の生き物も共存できる環境が存在し
ていたのです。のどかな昭和30年代のことでした。

しばらく前、あの
谷津田に行ったら荒
れ果てて、かろうじ
て畦の跡がわかるだ
けで、草だらけの田
んぼの中には木まで
生えていたのです。

里山の自然は、私
たちの生活の変化とともに、関わりが薄くなり日常の意識の中から
も遠ざかってしまいました。当たり前のように在ると思い込んでい
た、身の廻りのありふれた自然が、経済行為のなかに絡めとられ、
気が付くと、明日にでも無くなりそうな危うい状況にあります。
出来ることから行動しなければと思う、今日この頃です。

リレー連載第7回は宮越喜彦さんです。乞うご期待



いたるところに荒れた休耕田がある

雨戸も吹っ飛んだ。母のお嫁入り道具は傷だらけ。テーブルは僕らが乗つかって壊し、お蔵入り。そのテーブルが七年ぶりに復活した。何だかなつかしい。僕の新しい部屋に置く予定だ。今度は大切にするよ。

古い家だけど、母は掃除魔でいつも家の中はピカピカ。窓ふき係は僕と妹。トタンがさびれば、祖父がコールタールを塗る。えんとつ掃除は父の仕事。大雨が降ると土のうを積み、ナメクジが出たら除湿し、夏は防虫剤の動力散布。冬は屋根雪おろし。お客様は人間だけじゃない。サルも来る。イヌも来る。キジは来ないがツバメは来る。ネズミが出ればネコも出る。軒下はクマンバチの穴だらけ。窓にはヤモリが張りついて、クモはしつこく巣を張って、トンボが縦横に通り抜け、内庭はカエルとセミの大合唱。春はいい。用を足しながらウグイスの声。心のなごむ珍客は迷子のかわいいホタル君。

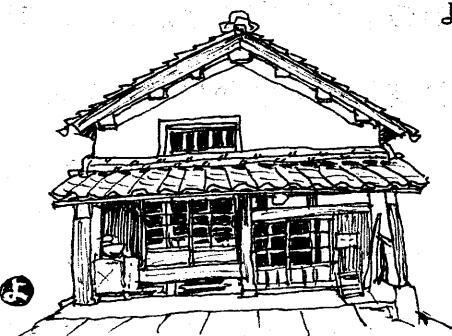
僕らはこうして、この家と四季折々の変化と数々の喜怒哀楽を共にしてきたのである。

店には塗料とノミの傷が残り、奥の部屋は柱につけた成長の記録が刻まれている。昔の家は木炭でくすぶらせているせいか、黒光りして虫にも強

く、たいへんに堅い。だから今までもったのかもしない。

店に一本、手触りのいい柱がある。上り口にあるので、毎日家族を出迎え、送り出してくれる。何かにつけてよりかかる柱もある。友達と話す時、くつを脱ぐ時、疲れて帰ってきた時。やさしく頼りがいのあるやつだ。この柱だけは残してほしいと思った。

僕達家族はこの家を守り、また家に守られてきた。今回の修復工事で、傾いた家は垂直になるけれどご老体にはちがいない。僕はもう五才の悪がきじやない。やさしく住もう。いたわりながら。これからも家族といっしょだよ。



註・この家は仏壇屋の杣長治郎さんの家です。

重伝建地区の熊川宿では、毎年、町並みの保存改修が進んでいますが、今年、工事が行われる家の子の中学生の作文が、上中町小中学校作文発表に掲載されました。素晴らしい内容なので、許しを得て、ここに転載いたします。ちなみに言えば、この工事の設計監理は柴田純男さんです。

古き新しき住まい

上中中 柚 洋太郎

いよいよ始まる「杣邸改装工事」。「杣邸」とは、悪くないな。

我が家が数年前からあたためてきたものが、とうとう形になる日が来た。僕は何度も図面を見た。自分の部屋を建ち上げながら、僕の胸は期待で破裂寸前だ。

熊川は重要伝統的建造物群保存地区に選定されていて、僕の家も観光ガイドにのっている。僕の家は築百五十年のご老体で、長い歳月風雨にたえて、積雪で柱も曲がり、基礎も腐り、もう限界である。今回の工事は、価値ある古材を残しながらの修復工事で、古いたたずまいをそのままに新し

くなる。古いのだけれど新しい、そんな「杣邸」に生まれ変わるものだ。熊川のキャッチコピーは「古き家に新しく住まう」だ。僕にはこのキャッチコピーが新鮮に聞こえる。この感覚が好きだ。みんな今風の新しい家に住みたがるけど、僕は古い家に住むことに全然抵抗がない。自分でも不思議に思う。妹などは、ジェニーちゃんハウスのごとく、洋風の宮殿に住みたがっている。どこかの王子と結婚するつもりらしい。そのせいたくな妹のために、この人の部屋はロフトベッド付きで、瓦はなんとガラスである。僕の部屋の利点は、トイレと台所に近いことだ。それもいいじゃないか。

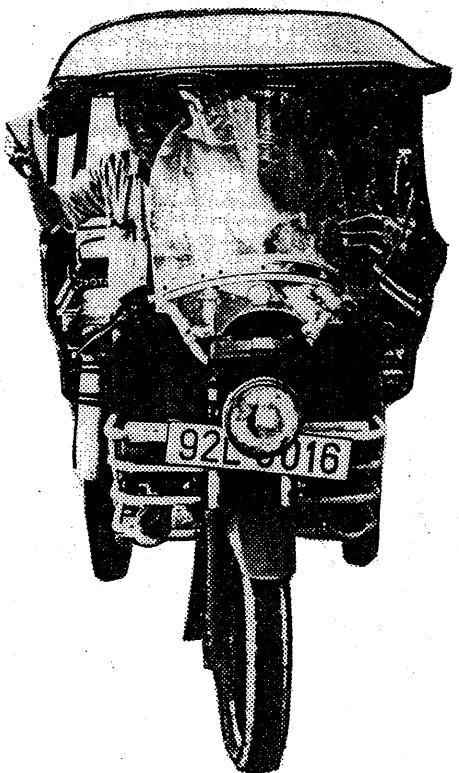
自分は十二年しか生きていなければいけれど、ここで育ったせいかこの家に愛着がある。トイレはおとし、風呂はゴエモン、ゴキブリホイホイにヘビのかかる家だ。暗くて狭くて湿けていて、おまけにかたむいているときている。家としては最悪だ。なのに捨て難いものがある。それはなぜだ。

現在、子供部屋は一つで妹と同じ部屋だ。赤ちゃんの時は、家族四人で寝ていた時もあった。うちちはオープンなのでたまり場になり、保育園の時は十人ぐらいで暴れて、建具をほとんどだめにした。母は全部アコードィオンカーテンに替えた。

現在、栃木県内の北部と西部で4つの現場が動いています。前号にレポートした山本青島氏設計による民家再生の仕事と、日影氏設計の伝統的な和洋・住戸にこだわりエコロジカルな住宅づくりをめざす仕事が那須高原の自然の中で進んでいます。先に日光男体山を望む山麓地帯で小さな別荘のリノバル工事と三世代同居をテーマとした新築住宅づくりが進行しています。毎日4つの現場を往復しながら馬車馬の下に往復するだけで一日が過ぎてゆきます。

現場に赴くのが思ひ入ります。依頼者や設計者の意図するところを十分に感じています。何より現場ではたらく職人たちと接することで抜けやけにからかう自分の気持ちを正直にいはげます。

それでも現場へ赴くには大阪で仕事をしてからをついで、先日1週間ほどベトナム並河保存センターに参加するツアーにエスケープしました。オーバンの町家の修復に取り組む当地の大工とスキッキを描いてデーターの納まりについて話していくうち、すごくうしろ味のいい気分になってしましました。



第7回大平建築塾開催決定

日時：8月19日（土）～8月21日（月）

テーマ：『環境の自分化』

19日 基調講演『環境における「時間」の問題』
講師：内山節

夜会公演：『胡弓演奏会』
演奏者：らこう

20日

全体会議：『大平の保存と再生、そして創造は・・・』

レホーター：吉田桂二 桜井善実 米山淳一 羽場崎清人

分科会

第1分科会：『保存と再生』

レホーター：吉田桂二 降幡廣信

第2分科会：『復元と技術』

レホーター：戸張公之助

第3分科会：『継承と創造』

レホーター：小林一元 日影良孝

第4分科会：『木こり体験』

レホーター：羽場崎清人 田中淳司 飛山龍一 他

詳細については追って記載致します

訂正

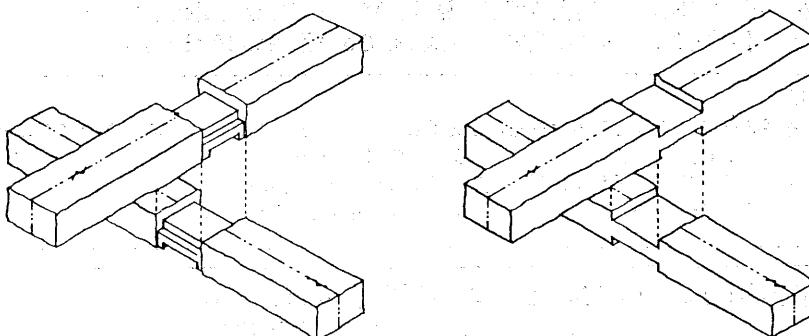
最新号の同人機関誌『生活文化 第4号』の下記の箇所で図とキャプションが入れ代わっていました。

読めば、内容から逆だらうことは想像がつくとは思うのですが、技術思想的にはとても重要なポイントと考えていますので、訂正のお知らせをさせて頂きます。

高橋俊和（高橋木造建築研究所）

「生闇学舎」文中の87、88両ページ

下記のように訂正します。



棟梁の提案で実際に施工された仕口「合

欠き渡りアゴ」

加工の手間はかかるが、「どうやって組み合わせたのかと思う程仕上がりが良く」、強度もあり、「水止めもいい。」

設計者の指示した仕口「合欠き」

はじめこの方法で作られたところもあつたが、隙間が多く、はさみ込んだ枕木の木片で作ったパッキンも「枕木の重量に押されて飛び出してしまった」ため、現実的ではなかった。

■2000年第2回「語る会」のお知らせ

日 時 5月 10日（水） 午後 6時 30分から
場 所 代官山「無垢里」 語る人 益子 昇
テー マ ベトナム視察旅行報告

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います（当然、酒代などは自前、割り勘になります）。
- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。

「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■夢屋5周年ありがとうパーティーのお知らせ

皆様のご協力のおかげでオープンした「夢屋」がめでたく5周年を迎えることになりました。感謝の気持ちをこめて、風薫る5月にささやかなパーティーを開きます。皆様、ふるってご参加ください。

日 時 5月 27日（土）午後 2:00～（遅いお昼ごはん）

同時開催 吉田桂二「夢屋ものがたり」原画展

*たくさん飲む人はお酒を持ってきてください。

*泊まる人は寝袋持参でお願いします。

*飲食物・企画持ち込み大歓迎です。

参加申し込み
「夢屋」野島まで
Tel 0287-78-3272

■2000年度第2回目世話人会報告（00. 03. 10 於：飯田橋 もてなし）

1. 第2回目の定例会が決まりました（表紙参照）
2. 大平建築塾 8月 19（土）～21（月）について
全体スケジュールおよび分科会の内容などについて話し合われました。（19ページ参照）
大平建築塾は今年も大勢の皆さんのご協力が必要となりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

■2000年度会費納入のお願い

- ・今回、2000年度の会員証を会費納入済みの方にお送りしました。会費未納の方は急いでお振り込みをお願いします。振込先等、詳細は前々回の会報に掲載されています。不明な点は事務局までお問い合わせください。

■会報編集局より

- ・会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局までお送りください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初頭に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆編集後記

- ・ある事情があって、このところお酒をひかえめにしています。だから、たまに外で飲むことになると、うれしくって、ついはしゃいでしまいます。先日も………

（まつもと）

会報編集局 〒273-0031 千葉県船橋市西船 5-7-2-201 松本昌義

TEL/FAX 047-332-4413 Eメール mmatumo@d1.dion.ne.jp

2000年度事務局：〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp

生活文化

S·E·I·K·A·T·U·B·U·N·N·K·A

生活文化同人会報 2000年第3号 No.43

もくじ

・第3回目定例会	1
・第2回目定例会報告	2
・海外研修員講習会報告 その3	6
・座敷童子 New Yorkへ	10
・リレー連載 日本の「木造住宅」の私の憂鬱	12
・同人紹介	14
・大平建築塾の続報	15
・「語る会」のお知らせ、事務局報告	16
・付録 掲示板番外編	

2000年第3回定例会

伝統を活かした最先端技術による 木造建築の試み

林野庁森林技術総合研究所・林業機械化センターの建築を通じて

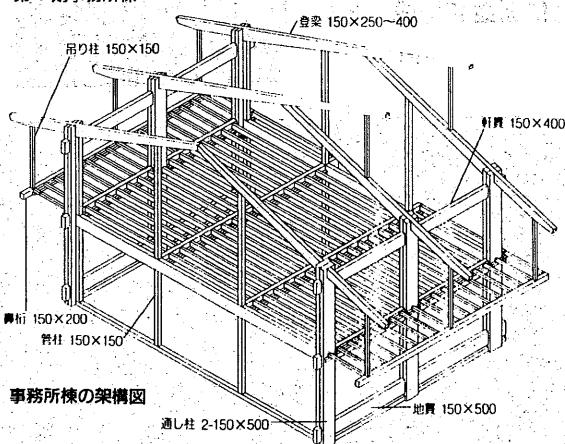
- ・日時 6月22日(木) 6:30~9:00PM
- ・場所 池袋芸術劇場 5階小会議室 1

講師 三井所清典 氏

アルセッド建築研究所代表
芝浦工業大学教授



第1期事務所棟



*会費2000円(年会員以外の方、学生は半額)

*参加者は必ず連絡してください。

申し込みは事務局(裏表紙参照)までお願いします。

この15年程の間の大断面集成材による建築技術の進展には驚くべきものがあるが、接合部の金物一式あるいは湾曲集成材による剛接合など、従来の我が国での木の扱いとは全く違ったものであった。

表題の建築における我々の試みは

- ①通直集成材を用いること
- ②プレートやボルトなどの金物を極力使わないこと
- ③伝統的な継手・仕口を応用すること
- ④地域の工務店や大工・棟梁を仕事に参加させること

今日、日本の森林には幅150mmのラミナを探る材は豊富に成長しており、これらをたっぷりと用いて、伝統的技能を活かせば、各地の大工・棟梁の誇りも回復し、後継者の生まれる途も開けると思えるようになってきた。

(「建築技術」2000年1月号より転載)

世話人 松本昌義 岡部知子



歴史的環境の保存～東と西を結んで

アマルフィ

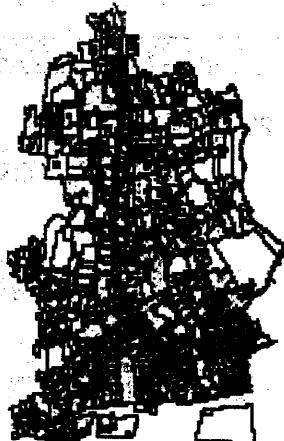
講師 陣内秀信(法政大学工学部建築学科教授)

4月20日(木) 18:30~20:30

池袋芸術劇場中会議室にて

■歴史

中世、彼らは異民族侵入防御のために、背後に険しい崖が迫る渓谷の限られた土地という普通じゃ住まないようなところに住みはじめました。住みはじめると彼らは船の技術をもっている。10Cには港町として発展したという歴史があり、今も世界で一番古い11Cの造船所が残されています。暴風雨で波にさらわれる以前までは、たくさんの施設が残っていたようです。そして、海面下に沈んだ失われたアマルフィが今、水中考古学で探られています。



■斜面都市の空間構造

街区という単位が近代都市計画には抽出しにくいんですね。上から線を引いたような空間ではない。地形をうまく利用した有機的なまちになっています。13C末、本来は川が流れている上に蓋をするという大土木工事があり、メインストリートがつくられています。そして、迷宮を抜けて上り詰めていくと、パっと視界が開け海洋都市の美しいパノラマが目の前に広がります。



断面図を見ても、いろんな時代のものが集まって重層化している。バラバラではあるが見事な一つのコンテクストの中でみごとに断面を形成しています。

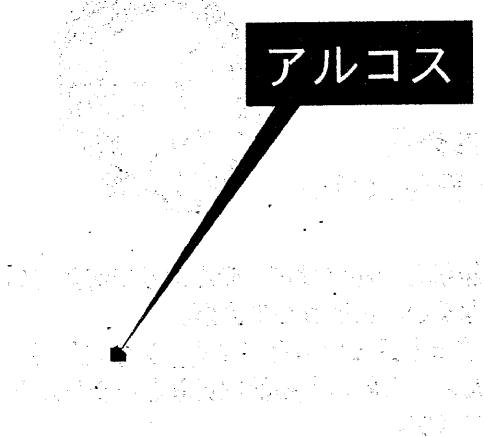
■公私の仕分け

住宅の入口は全て横の坂道からになっています。住宅があるのにみんな気づかない。入口をトンネルにして連続性、一体感をつくり、街の華やかさを保っています。だから、よそものにとっては境界になり、中は静寂に包まれる。このよう公共セクターとプライバシーセクターを上手に使い分けています。このへんは、イスラム、アラブの都市づくりのノウハウと重なるのですが。



現在多目的スペースとして使われている元造船所。巨大な基地としてのアルセナーレ（造船所の入口）があり、ぬけていくと聖なる広場がある。▶

造景 N.O.21/1999.06 参照



■何故、アルコスか

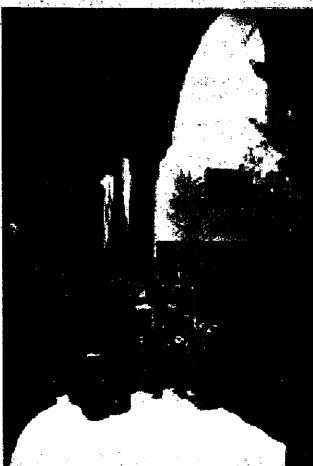
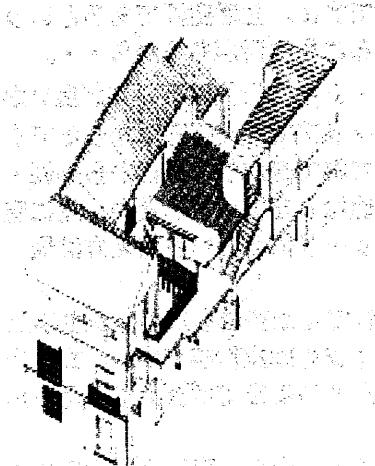
今まで調査を行ってきたアラブ・イスラーム世界、モロッコ、チュニジアと比べる上で、パティオをもっているところを調査したかったのですが、アルコスは9割5分がパティオをもっているという願ってもない町でした。その意味で、アラブの中庭文化が色濃く受け継がれている。イスラム、アラブに占領されイスラム化したアルコス。その後、キリスト教が奪還したという歴史が重層し、それが、空間の形式、様式に興味深い形で表れている。サンタマリア教会が、元の大モスクだったり、サンペプロ教会は、アラブ時代の砦を使っています。

■パティオ

スペインのパティオは中をちらっと見せるんですね。アラブのパティオは完全にプライベートとして外から隠す。アルコスでは、イスラムからキリスト教になり、そしてヨーロッパ的へと変化したオープンなパティオで、むしろ誇らし気に見せるという方法がとられています。アルコスの場合、今も井戸を植木に水をやるために使っている家も多いんです。しかし、飲料水としては歴史的に使わなかった。下の貯水槽から口バが運んできたそうです。アマルフィも同じです。

■現在のアルコス

今のアルコスは、旧市街は丘の上、新市街は丘の下に大きく広がっています。若い世代は車の通れない歴史的な地区よりも、利便性の高い下の方に住まいを求める傾向が強い。かつて古い街に住んでいた街のリーダー達も次々にアルコスを出ていきました。不動産が放置されて、メンテナンスが不十分な家も少なくありません。アルコスの場合は歴史的価値も認められてきて勝手に壊しちゃいけないとプロテクトされていますが。古い建物が好きで、いつかは修復してやろうというこだわりをもって住んでいるカップルに会ったりもしました。しかし、スペインに売っているガイドにも、アルコスは1ページもさいていません。知る人ぞ知るというぐらいで。



とはいって、パティオを中心とした人々の暮らしは、今なお魅力的に展開しています。アルコスには、都市再生に向けた大きな可能性が秘められていると感じました。

SD 2000/04号参照



対談

吉田桂二×陣内秀信

イタリアの保存・再生より

◆イタリアと日本◆

- 吉) 南イタリア、今のアルコスなんかも、空家が結構あるんだけど、そんな事で考えていくと、日本の街づくり・保存とどのように重なるか、と思うんですが。
- 陣) 南イタリアとつきあって30年近いですが、ずっと見ていると南イタリアの位置付け、社会のあり方、価値観等変わってきましたよ。それはある程度日本とパラレルだけれども、日本より変わり方は早いと思っています。

◆大都市と地方都市◆

- 陣) ヨーロッパには大都市圏に人が集中するということがないですね。大都市に行ってもろくなことがなく、その様な中で、70年代半ばから地方分権が進んだんです。もう一方で、何処にでもある南北問題がイタリアには極端に表れていて、北（ミラノやトリノ等）に行くと夢のある生活があるという幻想があったんですけど、そのうちできなくなって、Uターン・リタイヤ組が戻ってきたんです。さらに、イタリア人は3Kの仕事が嫌いで、わざわざその仕事をしに北に行くより、地元に残るという若者も増えてきました。それと同時に、都市計画の考えが、古い物を活かそうとする考えに変わって行つたんです。現在では古い物を活かす建築が50%位です。その様な事があって南イタリアも豊かになってきていると思います。そういう意味では、日本の地方都市に比べて、イタリアの地方都市は元気が戻ってきてますね。

- 吉) 日本も早く大都市に絶望すれば良いのだ！今度の不況がそう言う事になるか・・・。
- 陣) それと、イタリアの近代の郊外住宅は魅力がないです。だから魅力のある古い街に戻って修復・再生するんですよ。逆に、日本は、郊外住宅の作り方がそれなりに上手で、人が皆郊外に出て行つてしまつて、都心は空になつてしまつているんですね。

- 吉) 田舎まで戻ってくれない。田舎まで戻ってくれるといいんですけど・・・。

◆イタリアの保存・日本の保存◆

- 陣) イタリアの保存・再生は、文化財保存・都市計画・街づくり・行政等、皆クロスオーバーして70年頃からずっとやっているんですよ。
- 吉) それが良い！日本は行政的なものはバラバラ。文化庁は『昔のようにせい！』ばかりでしょ。それじゃ建物をうまく使う事はできませんよ。生活空間であるという問題から考えた方がいい。イタリアに行くとホッとするのも生活があるから・・・。
- 陣) そして、外観はパブリックな道路に面してるから・・・、中は近代建築の方が良いから・・・と、便宜的に使い分けるファサード保存はイタリアでは流行らなかつたですね。何故なら、昔から歴史が重なつて面白さが認識されてきたり、最初から外観・景観とかに行かず、生活を持続させる事とか、歴史の重なりを継続するとか、先に空間の構成を見る方を研究したんですよ。だから、ファサード保存という考え方は最初っからなかつたんですね。
- 吉) さっきの外観のない建築という意味で、歴史的に創られてきた空間自身の豊かさみたいな物、それが重要だと思うんですよ。フランスもドイツも薄皮保存が多い。文化庁の言う日本の保存も外観保存で、その思想だと人の住んでいる街ではダメだと思うんです。
- 陣) そうですね、特殊な物、部分的な物にしか応用できなくて、大きい建築や、住みこなしていく論理に保存を結びつけていく脈略ができませんからね。

吉) 日本の保存は内部の問題が重要だと思うんですよ。街に来た人は外も見るけど、中を見て喜んでるでしょ。だから、内部空間を保存しながら、どう住みこなしていくかがテーマなのではないでしょうか。

陣) あと、保存の考え方、手法とか色々違って、その違いを学習し紹介すると面白い。

吉) それはやらなきゃダメですよ。保存とはどういう物・どうゆう事があるのか、一つであるはずがない。色々な対象によってやり方がある。それを整理していかないとね。

陣) それと、近代化と言うと、機能と対応するという形と言う事で、スッキリしている方が良い、あるいは修復する場合も一つに戻すというのがあったけど、イタリアは色んな時代・様式・価値が混在していて、それらはバラバラではなく、それぞれの時代に前の物を意識して、新しい物も加えてうまく積み上げながらインテグレートしていく、その重なりをエンジョイして暮らしているですよね。

吉) そのへんは見事！それに比べてドイツは汚い物がなくて息詰まる気がします。逆説的になるかもしれません、大平で満寿屋の保存・再生を行って、建物が綺麗になったのですが、保存している人たちが『なんか変わったなー』と言うんですよ。これはある意味深い所に及んでいて、人間の感性と、歴史性を繋いだ時、日本の家という物は大変難しいなーと思ったんです。

◆生活と商業の活性化◆

吉) 街並みゼミなどが始めた頃に比べて、最近は街並み保存が市民権を得てきたというのがあります。それは、街並み保存が商業を活性化させる手段として非常に便利な物になってしまっているからだと思うんですよ。人が集まり保存が成功した所は観光化するでしょ。それは我々が考えていた街並み保存ではなくなってくるのではないのでしょうか。私が関わっている熊川は観光化反対ですよ。けれど、食えない街である事も事実です。綺麗になると人が来てしまう。人がくるようになると、今まで黙っていた観光化反対じゃない人たちが商売をはじめ、住みたい人が住めなくなる。さらに、商売をやる人も家中商売に使いたいため住まなくなる。すなわち、全町あげての日光江戸村になる可能性があるんですよ。

陣) 本当そうですね。白川郷も世界遺産になってとんでもなく大変らしいですね。

吉) そういう現象っていうのは、イタリアにはあるのかっていうこと。

陣) 観光化と商業活性化の中間に色々な物があるはずなんですね。そもそも、都市の成立する基盤には、広域の地域の中心っていうのが一番重要だと思う。求心力があって、人が来て、買い物や交流や文化的な刺激を受けたりする。その機能が歴史的にずっとあったわけで。それが近代化で薄れていって、丘の上の街のような産業も育てられない、経済の基盤がない街はイメージがだめになったんですね。だけど、新しいタイプの経済基盤が出てきたんですよ。例えば、今はグルメの時代だから、おいしいワイン・サラミ・チーズ等を作り、周りに生産地、街にアンテナショップを作る。そうすると、外国人はそういうのが好きだから集まる。それよりむしろ、地域の人たちが集まるんですよ。クオリティー高いですから、若者が、郊外の街より歴史的な街をすきになって人が集まるようになったんですね。そうしたら、店が成り立って、歩行者空間化する。そういう相乗効果で地域の活性化ができてきているんですよ。壊して近代化するのではなく、緩やかな観光化、住み続けながら少しづつ中身が変わり・・・。

吉) やっぱりそこに残る事の魅力。街には求められない魅力。その土地にしかない物とかね。売る物の作った人の顔が見える商業ですよ。ぜひ人が住み続ける事の魅力によって人がくるという観光をして欲しい。そういう所に観光の原点が有る気がします。

他、都市のコンベンション機能について、エセ街並み、等々色々な話を頂きました。

海外研修員講習会報告 その3 (有)景観模型工房 盛口尚子

大阪から、今回も海外研修員講習会の報告を発信させていただきます。平成11年度は、

- [中国：ヤン] 陝西国立歴史博物館 製作テーマ 万里の長城（八達嶺附近）
- [ラオス：スーリヤ] ラオス情報文化省 製作テーマ タット・マック・モー（寺院）周辺
- [ネパール：ラワット] ツァウニ国立博物館 製作テーマ サッタレ・ダーバー（宮殿）の丘
- [パプアニューギニア：キンソンボー] PNG国立美術博物館 製作テーマ 山地の住居と生活 以上、4名の研修を行いました。

4回目ということもあり、身ぶり手ぶり、片言の英語をまじえ、この研修もかなり慣れてきたようです。

私はPNGのキンソンボーさんを担当したので、そのことをお話しします。PNGは、今年で独立25周年を迎えます。この国は熱帯雨林最後の楽園といわれる程、緑豊かな国です。彼はこの国の中でも特に奥地の村で育ちました。研修前にPNGの資料を探しましたが、ほとんどが環境問題と、昔の未開地の部族の生活ばかりでした。そこで、彼から育った村の話を聞き、私なりにその景観を思いうかべました。

極楽鳥、クスクス、ワラビー、オウム、豚、そして、ココナッツツリー、バンブー、バナナ、シュガーコーンなど、豊かな自然の中で彼は育ちました。彼と話をしていて、さわやかな風、清らかなせせらぎ、なぜかとてもなつかしい気持ちになりました。しかし、PNGの大地を日本の企業が森林伐採をして環境破壊をしたことに対しては、返す言葉がみつかりませんでした。

彼のテーマである故郷の風景を製作しながら、景観・風土という重い課題を考えるヒントをもらったような気がしました。

私の子供が幼い頃読んであげた、福音館書店【子どものとも】の本でPNGの昔話「まじょのひ」を彼に見せました。私には不思議な話として印象に残っていた本でしたが、そこにでてくる豚、クスクス、オウムなどは、かれの幼い頃の生活の一部でした。そして、描かれている絵・文は、すべてPNGそのものでした。

模型製作をしながらの彼等との語らいは、私達のテーマでもある景観を考える良い機会でもあり、この研修は、私にとっては年に一度、自分の勉強したことを振り返るチャンスであると考えています。

最後に、研修員達と語り合い、読み合わせを行った、オギュスタン・ベルクの言葉を付け加えておきます。

「今日の都市と田園の風景の有様を前にして、時にいたたまれなさを感じることのない人が、あるいはこの地球の生態学的な荒廃に不安を覚えることのない人が、果たしているだろうか。

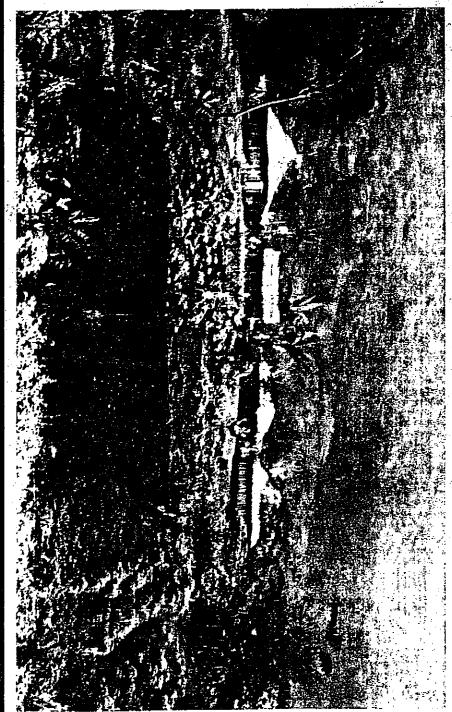
環境に劣らず風景に対しても、保護なり改良なりをめざして効果のある行動の様々が近年試みられてはいる。それらの方策のなかには、何世紀も前か

万里の長城（八達嶺）

中国



山地の住居と生活
パープラニエギヤ (PRNG)



らの古い先例をもつものもある（例えば、伐採地への再植林の方法）。我々がその気にさえなれば環境の状態をよりよくすることができるということは疑問の余地がない。風景に関しては、事態はもっと複雑だが、それでも我々の力のおよばない話などではまったくないのである。

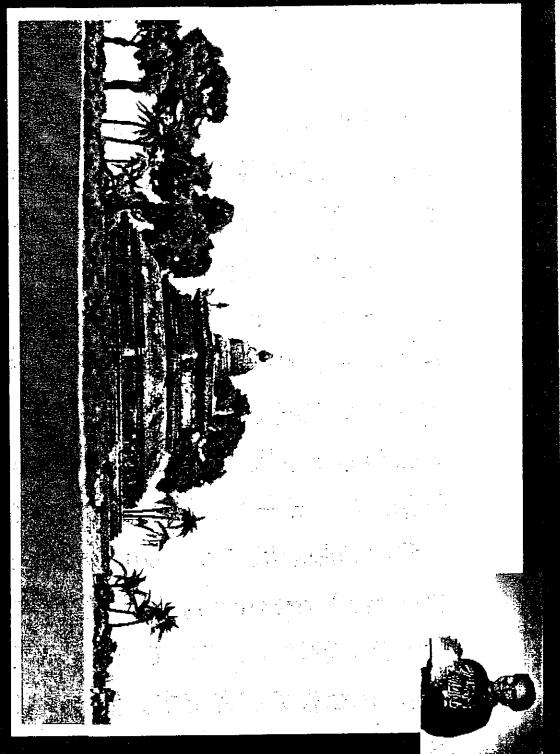
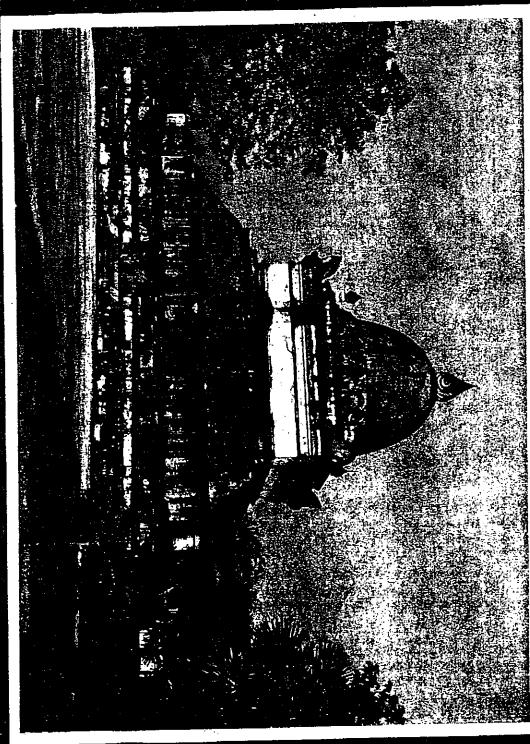
しかしながら、より根本的な問題が解決されないままになっている。つまり、これほど自然と空間に影響をおよぼす力をそなえた我々の文明が、その作用のおもむき（意味=方向）をほとんど掌握できていないのは、どういうわけなのであろうか。その結果としてあるのが、醜く不可解な外観から我々をいたたまれない思いにさせる風景なのであり、不条理で犯罪的にみえるものの実は我々のふだんの活動の産物に他ならない環境悪化なのである。何らかの措置を講じればこういった諸問題のいくつかは解決することができるだろうが、それとてその原因に対しては無力である。なぜなら、このような風景と環境の荒廃を非常手段に訴えずに済むやり方でおしとどめてくれるような、社会に関わる万人に通じる常識がもう存在しなくなっているのだから。

その点に関しては、ありとあらゆる種類の理由があげられる。加速する進歩の、“世界の脱魔術化”、個人主義、教育システムの欠陥、階級的な利害関係、等々。要するに、現代社会の進化そのものがそこに関与しているのだ。こういった諸事情は、その多様性ゆえに問題の本質を見失わせる恐れがある。問われているのはまさに、我々の社会の、空間および自然に対する関係のおもむきなのである。我々が掌握していないのはまさにこのおもむきであり、そのために文明はおもむきに欠ける風景を生じさせ、生態学的にみて無分別というべき行動を産みだしているのである。

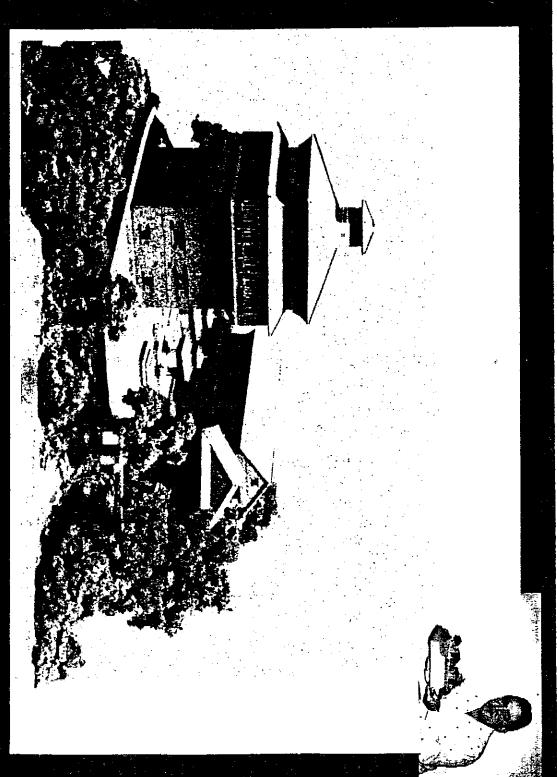
社会の、空間と自然に対する関係のおもむきそれ自体を研究すること、それはこのおもむきの掌握へ向けての第一歩となりうるものだ。」



タット・マック・モー周辺 ラオス



サッタレ・ダーバーの丘 ネパール



座敷童子 New York へ

劇団 風の街 江良 潤

今回のニューヨーク行きは、A P A P (associatin of performing art present) 芸術見本市に参加するのが目的でした。1月8日から11日までの4日間、会場はヒルトンホテルの2、3、4Fフロアを使って、バレエ・音楽・演劇・人形劇・サーカスなど、団体から個人までのブースが立ち並び、その数は数えきれない程。連日バイヤーが押しかけ、あちらこちらで即日、交渉を行っている様子。今年で43回目だそうですが、アメリカの底知れぬパワーを感じました。また、デモンストレーションの公演も到る処で行われ、日本からも芝居（我々だけ）、モダンダンス、舞踏、パフォーマンスの8団体が2ヶ所に別れて上演しました。

我々の劇場はダウンタウンのチャルシー街に近い、D T W (Dance Theater Workshop)。通常はダンスの公演が行われている所で、客席は6段のひな段になっていて100人程の収容数ですが、舞台は間口、奥行きとも10m程の広さです。他にロビーと稽古場があり、日本の小劇場では考えられない設備の整い様です。

本番は超満員。黒一色の舞台に照明でエリアを造ったなにもない空間。しかも日本語での芝居でしたから、アメリカ人にはどう伝わったか？！とにかく、やってしましました……。



だが、やはり言葉の問題をクリア一しなければ外国での公演はむずかしいようです。それと、これも当初からの計画でしたが、写真家の荒川健一さんに同行していただき、座敷童子の扮装でブロードウェイや劇場周辺などニューヨークの街頭で写真を撮ってきました。寒くてあまり長い時間は費やせなかつたのですが、とてもユニークなものが出来ました。なぜか座敷童子がニューヨークの街に溶け込んでいたんですね!!……。



今回の成果は舞台装置

が無くても十分にこの芝居が成立することが確認できましたこと。

これからは古民家の空間だけにこだわらず、例えばガン治療のホスピスなどでも演ってみたいと思っております。お心当たりの所がございましたら、是非ご一報ください。

では、今回のご報告はこれまでと致しどうござ在います。

江良 潤

TEL/FAX 03-3377-9711

日本の「これから木造住宅」の私の憂鬱

宮越喜彦

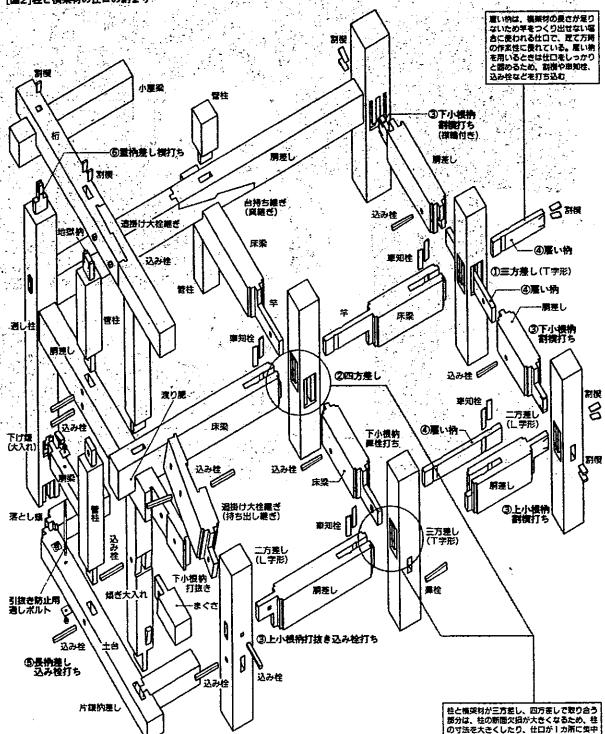
世紀末、ミレニアムなどとスタートして今年もはや半分近くが過ぎた。2000年もIT関連以外にはまだまだ世の中全体に閉塞感が漂っている。さらに、いやな事件も多くますます滅入ってしまう今日この頃。日本の○○のテーマからははずれるかもしれないが、最近の私の憂鬱を書いてみたい。

「これから木造住宅」と大上段に構えてみても始まらないが、棟梁達に受け継がれてきた木造住宅を理解し、今に生かしていきたいと思って日々設計活動をしているつもりでいる。公庫の仕様書は最低の基準で現場では何とでも対応できると高を括っていたし、実際現場対応でゲリラ的には問題なくクリアー(?)してきた。今までの建築基準法では木造住宅に関する内容はある程度粗いざるの目状態であり、それこそが最も重要で、応用性の高い木造の可能性を生かせたものと思っていた。また、その中で泳いでいたとも思っている。

すでにご存じのように

現在、基準法施行令・告示等の法改正作業が進められていて、建設省ではホームページでパブリックコメントとして改正案を公開し、広く意見募集も行なっていた。6月中には施行(?)されるのではないかと思われるが、木造住宅に関連する仕様規定は、ざるの目を一氣

[図2] 仕事候補材の仕口の納まり



木のデザイン図鑑（建築知識）より

に細かくする内容とされている。接合部の項目では、単純には公庫の仕様がそのまま告示化されている。防火構造や土塗り壁の内容も変な規定になってしまいそうと読める。これからは法レベルで細かな規制が加えられる状況になってしまふ。そのため伝統的な技術で木造住宅をつくろうとする場合にやっかいなことが起きそうだ。気になる方も多いと思うがいかがか。

一方で性能をさえ証明できればむしろ自由度を増した法体系とも言われている。しかし、町場レベルでは混乱を生じるのではないか。最終の内容が出るまではまだ予測でしかないが、今回の法改正で有利になるのは多くの場合、資本型のメーカーであることに間違いない。

「おまえ、そんなのマイナス思考だよ。暗いな。」といった声も聞こえてくるけれど、すでに気分は梅雨状態の私にとっては、より閉塞感が増している。

とはいえる道がないわけではない。使命感ある研究者や実践者が伝統的な技術の性能や有効性の研究を積み上げ、現場に反映させられるように活動している。まさにITを活用した情報ネットワークも手段として「これから木造住宅」の憂鬱を解消し、早いところの梅雨明けに向けて一歩踏み出したいとは考えている。同人の皆さんにもお知恵をお貸しいただきたい。

リレー連載第8回は衣袋和子さんです。乞うご期待。

同人紹介

藤谷智史

毎年石川県金沢市から大平宿に参加しております藤谷です。久しぶりの投稿です。私は三重県のまん中あたり、牛で有名な松阪市から少し山に入った勢和村という人口5500人の（大字のつく）村で生まれました。又、生家は浄土真宗のお寺であり、長男の私は将来住職を継ぐ身でもあります。寺は大きく2つのタイプがあります。寺だけを専業にするタイプと、住職が何か仕事を持しながら寺も兼業するというタイプです。ちなみに、わが寺は田舎の弱小寺の為後者にあたり、父は教職についておりました。

私においては寺との兼業の可否はともかく、どうしても建築の仕事に就きたくて、大学進学で金沢工業大学建築学科を選びました。そして大学院2年の6月、かねてから建築作品、著書等に興味を持ち、ひかれていた吉田桂二氏を訪ね連合設計社の門を叩きました。今からちょうど9年前のことですが、これが私の桂二さん（連合設計社のスタッフは吉田先生をこう呼びます）との出会いになりました。その後、連合設計社に4年半の勤務、地方都市金沢のシグマデザイン建築設計事務所に今年の3月まで3年半の勤務を経て今に至ります。そして今『藤谷の2000年計画』と名づけて、三重県松阪市で事務所の旗揚げをする準備をしております。

私の中で建築と同様に重要なものの、それが寺の存在です。なにしろ檀家さんがおります。これを放ってはおけません。檀家さんを東京や金沢に持ってくるわけにもいけません。やはり、私が三重県に動くしかありません。

建築家の中には『歌って踊れる建築家』はたくさんいます（文化同人の中にもたくさんいます）そこで、私は『お経をあげる建築家』と独自性を出し、三重県という“地方”からモノづくりを通しての発信をしていこうと考えております。

今、改めて文化同人を見渡せばたくさんの先輩が目に入ります。どうかこれからもご指導、ご助言の程よろしくお願ひします。そして、今年も大平宿で皆さんにお会い出来ることを楽しみにしております。



2000年4月アンコールワットにて

第7回大平建築塾参加申込書

この参加申込書に必要事項を記入の上事務局まで郵便又はFAXにて送付ください。

参加費用は、下記郵便口座への振り込みをお願いします。8月初旬にパンフレットを郵送致します。

振込先：郵便貯金総合口座 10120 69271761 生活文化同人事務局 代表 石引浩子

参加申込締切り 7月10日（振込は参加申込み後一週間以内にお願いします）

お振込後のキャンセルは、原則致しかねますのでご了承ください

開催日時：8月19日（土）～8月21日（月）

参加日程及び参加費用 (いずれかに●をし参加人数を記入してください。)

A日程：8月19日～21日(3日間)

大人···・費用 15,000円()人

子供(小中学生) 費用 6,000円()人

B日程：8月19日～20日(2日間)

大人···・費用 10,000円()人

子供(小中学生) 費用 4,000円()人

C日程：8月20日～21日(2日間)

大人···・費用 10,000円()人

子供(小中学生) 費用 4,000円()人

日程

19日 PM 1:00～基調講演：『環境における「時間」の問題』 講師：内山節

PM 7:00～夜会公演：『中国民族音楽二胡と揚琴の音色』 演奏者：ラコウ チャン・ウェイウェイ

20日 AM 全体会議：『大平の保存と再生、そして創造は・・・』：吉田桂二 桜井善実 米山淳一 羽場崎清人
司会：高橋俊和 益子昇

PM 分科会（同時開催のため、参加希望分科会に●して下さい）

第1分科会：『保存と再生』レポーター：吉田桂二 降幡廣信

第2分科会：『復元と技術』レポーター：戸張公之助

第3分科会：『継承と創造』レポーター：小林一元 日影良孝

第4分科会：『木こり体験』レポーター：羽場崎清人 田中淳司 飛山龍一

PM 7:00～：『懇親会』 司会：長谷川順持 佐々伸子

21日 AM みんなで障子はりなど（使用した民家をきれいにしていきましょう）

フリガナ

参加者	氏名	年令	性別	<input type="radio"/> 男 / <input type="radio"/> 女
-----	----	----	----	---

パンフ	<input type="checkbox"/> 住所〒
レット	連絡先TEL
送付先	勤務先/学校名
希望に	<input type="checkbox"/> 住所〒
●してください	連絡先TEL

FAX

FAX

家族参加者 氏名/年令/性別（幼稚園児以下は無料です）

寝袋

レンタルします（1泊1000円/2泊2000円）支払いは現地でお願いします。

持参します（）

交通手段※飯田市内よりマイクロバスの手配がありますので必ずご記入ください。

電車利用（飯田駅からマイクロバスを希望します。）

高速バス利用（飯田市役所からマイクロバスを希望します。）飯田バスターミナルから飯田市役所までは各自移動お願いします。

自家用車利用（席に余裕があり誰かを便乗できます。）（席に余裕はありません）

申請書の送付先	事務局 長谷川順持建築デザインオフィス（株）	担当：齊藤 石引
---------	------------------------	----------

住所	〒103-0016 中央区日本橋小網町1-5-706	TEL03 3662-6338	FAX03 3662-6477
----	----------------------------	-----------------	-----------------

■2000年第3回「語る会」のお知らせ

日 時 7月5日（水） 午後6時30分から
場 所 代官山「無垢里」 語る人 高松俊秀
内 容 韓国伝統民家実測調査報告

- 「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になることなどを酒を飲みながら話します。（当然、酒代などは自前、割り勘になります。）

- 発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。

「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■次回世話人会のお知らせ

日 時 7月7日（金） 午後6時30分から
場 所 飯田橋 もてなし

- 今回の世話人会は大平建築塾実行委員会を兼ねますので世話人以外の実行委員の方も出席してください。

第7回大平建築塾・実行委員（敬称略）

吉田桂二（代表）、斎藤彰、石引浩子（事務局・会計）、江原幸壱（広報）

飛山龍一、高橋俊和、益子昇、岸末希亜、藤谷智史、赤桐雅子（基調講演・分科会）

長谷川順持、佐々伸子（夜の公演・懇親会）、内藤敬介、岡部知子（食事）

戎居連太（交通）、伊藤秀夫（写真）、外岡生帆、桧山文江（パンフ）、高松俊秀（機材備品）

■2000年度第3回目世話人会報告（00.05.19 於：飯田橋 もてなし）

- 第3回定例会の内容が決まりました（表紙参照）。
- 大平建築塾 8月19（土）～21（月）の準備状況が報告され、内容や運営方法などの詳細について話し合われました。15ページにその概要および参加申し込み書が記載されています。みなさん、お誘い合わせの上、ご参加ください。

■同人活動

- 出版 「木ごころ通わせ 家づくり」 岡部知子編著、（住宅新報社）
「家造りのコトバ」 内藤敬介、新井聰、綾部孝司、藤間秀夫、松本昌義 他共著
(エクスナレッジ、旧社名建築知識)

■会報編集局より

- 次号は大平特集号になります。大平建築塾での思い出、今年の大平に寄せる期待などをお寄せください。
- 会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- 同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- 掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- 会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆編集後記

- 町づくりについての話をしながら、自分のねぐら廻りの事情については何も知らない私。

先日、東京の知人から、地元船橋で持ち上がっている民家保存の動きの情報をもらい、何か役に立てばと、はずかしながら、見に行ってきました。（まつもと）

会報編集局 〒273-0031 千葉県船橋市西船 5-7-2-201 松本昌義

TEL/FAX 047-332-4413 Eメール mmatsumo@d1.dion.ne.jp

2000年度事務局：〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp

生活文化

S·E·I·K·A·T·U·B·U·N·N·K·A

生活文化同人会報 2000年第4号 No.44

もくじ

・第7回大平建築塾へのお誘い	1
・第3回目定例会報告	2
・ふらっと出雲	6
・讃岐の古民家を残したい	8
・リレー連載 「日本の○○」をつらつら考えて	10
・第7回大平建築塾の内容	12
・同人紹介	14
・掲示板	15
・「語る会」のお知らせ、事務局報告	16

第7回大平建築塾 へのお誘い

20世紀最後の年だからといって、別段変わりなく今年も「第7回大平建築塾」がひらかれます。しかし、やはりこのあたりで、未来への展望をひらく時期ではないかと考えます。

少しカッコウをつけるようですが、21世紀をにらんで、大平の未来を切り拓くために、20世紀を総括する意味を込めて、今年の「大平建築塾」は、大真面目な内容にしたいと思い、企画内容を盛り込んでいます。会員多数の参加を希望します。

吉田桂二



■元来の集成材の建築

集成材で大きな建築をつくるということになると普通、集成材メーカーが構造設計をしてくれます。ですから特に考えないでできてしまいます。

見てみると、接合部には金物がたくさん使われます。建物2つ分というくらいです。

金物の配列がデザインされているものもあります。しかし、それを「美しい」とは思わないようにしよう、とわたくしは思いました。例えば素足で上がった場所のインテリアとしてもおかしいかなと思います。

こうして見ると結局、部材に鉄骨の代わりに木を使ったにすぎないとと思うようになりました。

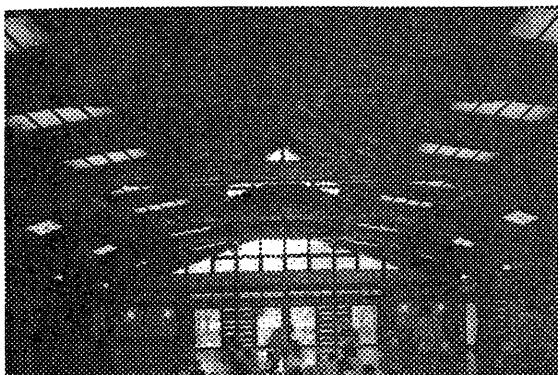
こういうものを一方に見ながら、別のことやろうと思っています。

■日本的な大断面集成材による建築 -アルセッド建築研究所-

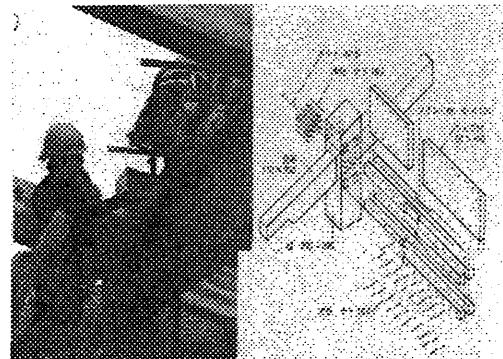
これらはかつて内田祥哉東京大学名誉教授が「豆腐を針金で吊る」ようなせん断形のボルト接合をやめ、木の特性であるめり込みと復元力を活かした接合ができるいかという問題提起で始めたものです。

□飛鳥学院保育所 遊戯室棟・子育て支援センター1(1997年、奈良県桜井市)

飛鳥学院保育所は1953年に東京大学の吉武泰水先生の設計(担当は鈴木成文氏)によります。当時の先進的な試みを随所にみることができる優れた木造の保育所です。この施設の増設計画を、既存の施設との調和、近在の大和棟や近隣になじむことに留意して設計が行われました。(図1、図2)



▲図1 遊戯室 妻面の高窓からの採光で明るい空間につくられている



▲図2 ラーメン接合部

□林業機械化センター

群馬県の沼田市から東へ車で1時間程行ったあたりに、利根川の源流のひとつである片品川に沿うようにして、利根村という村があります。

東京・高尾にある林野庁森林技術総合研修所に付属する、林業機械化センターはその利根村の中にあり、片品川のさらに支流である利根川沿いの山の中に位置します。

この施設は名前のとおり、林業に関わるさまざまな機械の操縦や林業に関わる技術の実地研修を行うことを目的としています。広大な演習林の入口にあたる谷間の平地に、施設の中心となる事務所棟、寄宿舎棟、研修棟、展示棟の4つの建物があります。

阪神大震災の年から、約40年前に建てられ、老朽化した木造施設全体の建替計画が実施されました。それぞれ単年度のプロジェクトとして、1995年度の第1期が事務所棟(図3)、1996年度の第2期が寄宿舎棟(図4)、1997年度の第3期が研修棟(図5)、1998年度の第4期が展示棟(図6)という順に、毎年1棟ずつ建て替えられてきました。

● 2000 年第 3 回定例会報告 ●

伝統を活かした最先端技術による木造建築の試み

講師 三井所清典氏 アルセッド建築研究所代表
芝浦工業大学建築学科教授

6月22日(木) 18:30~21:00

池袋芸術劇場小会議室にて

■はじめに

三井所先生は芝浦工大で建築生産という名前の研究室を始めました。

つくり方と設計の関係、構法の世界からみると気になることがたくさんあるとおっしゃいます。

■大断面集成材に至るまで

大断面集成材は、実際の大きさよりも燃え代ぶん（木が燃えても大丈夫な15mm）大きくつくって、耐火的に鉄骨より性能のよい木構造をつくることができます。これは木の使い方を変えるということに繋がります。わたくしは、それをやってみようと思いました。

元来の集成材を用いた建築の曲線の空間というのは日本人の感性に合わないと思いました。

わたくしは、日本の建築の特性である垂直材で建築をつくる、ということを試みました。

そうなると、接合部というのがむずかしくなるので、その接合部に挑戦してみようと思いました。

日本が独自の文化として持っている感性にあう建築をつくらないことには、集成材は普及しないであろうと考えました。

垂直材による日本での「普通の建築」を集成材で見せたいと思いました。これが最初です。

■そしてテーマとなること

そのうち金物が目立たないようにするということが重要であると思いました。金物が見えても平気である、というのは木を鋼材と同じように扱う欧米の集成材の建築ということになります。

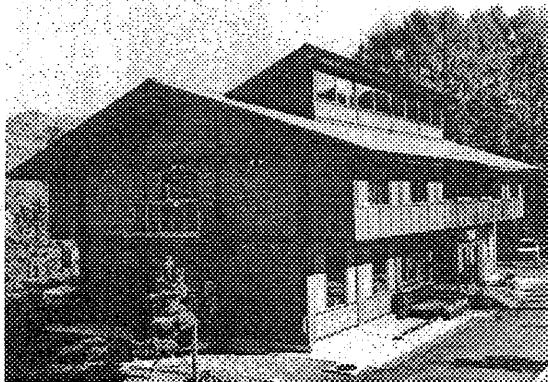
日本の建築は欧米のものとは違うのですから日本人の感性に合うようにします。

もちろん山の問題や間伐材の問題もあります。例えば10年とか分かりいい間だけでなく、50年、100年、200年・・・とか育てていくことを考えますと間伐材の活用というのは重要です。間伐材と集成材が結び付き、そうすると集成材と山の問題が結び付いてきます。

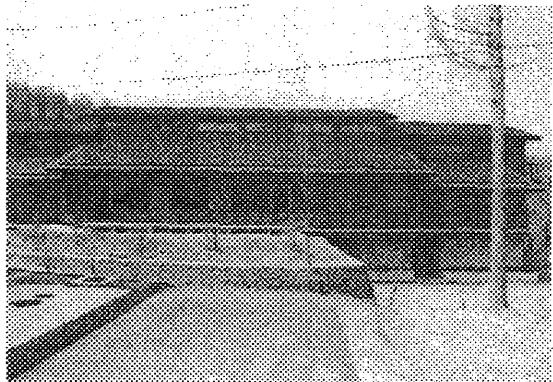
そうすると職人のことが気になりました。そして「生業の生態系」という言葉をつくりだしました。建築の中で、「手仕事の人たちの生業を活かしていこう」ということを忘れていたんじゃないか、と思ったのです。職人を残していくことは技術を残していくことであり、つまり建築を残していくことです。そして、建築を残していくことは技術を残していくことであり、つまり職人を残していくことです。「自分たちの設計とは生業の生態系を残すような仕事であるか?」ということをもう一度考えました。

それから、技能を持っている人たちに登場してもらうことを意識して設計し、図面をかくようになりました。「ぬき」「わたりあご」など図面の中でかいていくと大工・棟梁たちが自然と参加していくようになります。かれらの技能を発揮してもらえたらしい、ということを思います。

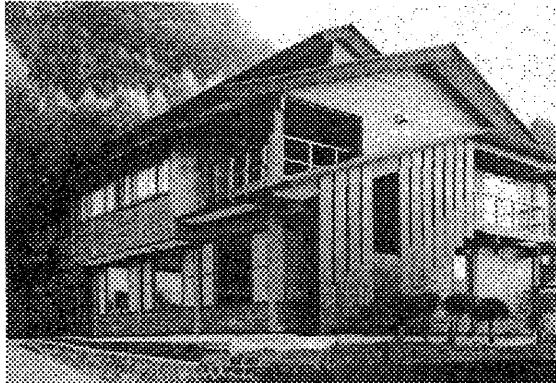
それが結局は、手づくりということになるのではないでしょうか。



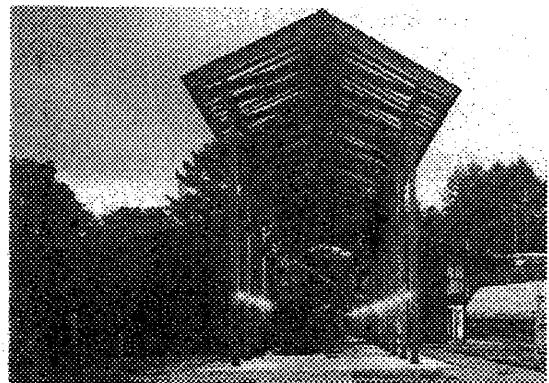
▲図3 第1期事務所棟



▲図4 第2期寄宿舎棟「愛機荘」



▲図5 第3期研修棟



▲図6 第4期展示棟「親機館」

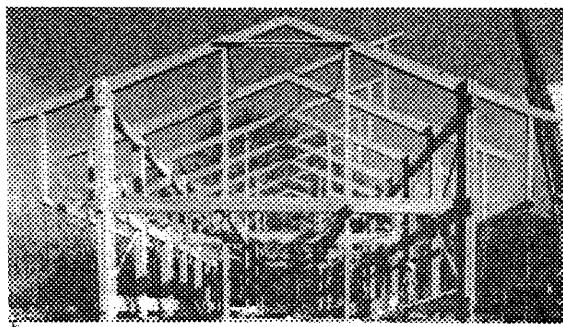
■大断面木造における木組み構法の流れ

□林業機械化センター事務所棟（図7）

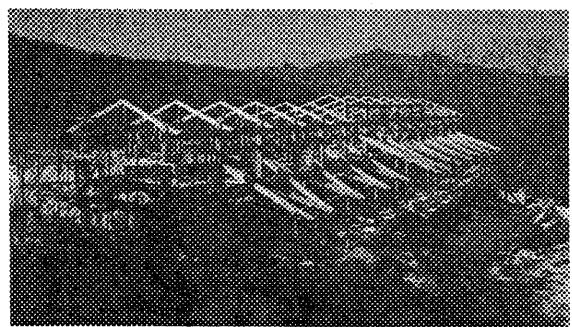
日本の伝統木造技法に最新の耐震構造研究の成果を取り入れた耐震性能の高い木造の建物です。「桁行方向ラーメン+梁間方向耐震壁」の構造架構を採用して、桁行方向をすべて開口部とし、一般建築にも応用できるモデル性の高い建物としています。ラーメン接合部には金物を極力使わず、柱に通し貫を通して木栓で接合する構法を採用しています。2階張り出し部は屋根登り梁をはね木として利用し、屋根の荷重でつり上げる伝統的・合理的な構法としています。

□林業機械化センター寄宿舎棟（図8）

「桁行方向ラーメン+梁間方向筋違い」の構造架構を採用しています。柱脚はシース管利用のアンカーボルトによるモーメント抵抗接合としています。食堂の屋根はトラス構造とし、水平力を効率よく本体に伝えて、外壁部分の柱を極力細くし、解放的な連続ガラス開口を実現しています。



▲図7 事務所棟



▲図8 寄宿舎棟

対談

吉田桂二 × 三井所清典

集成材の接着剤

吉：集成材の接着剤ですが、耐久性などで問題がでてくるということはないのですか。

三：今はそう心配されてはいないですね。かつてはすごく心配されていましたが、「屋根下の合板が痛んでいるんじゃないか」とかね。構造用合板は、コンパネの糊とは違うものを使っているから心配がないんです。

伝統構法を使う

吉：スライドで見せていただいた格納庫での構造のお話ですが、実は私も今、似たようなものを考えています。
(写真)まだ未公開なんですけどね。

三：結局、金物を使うと大工が余計なものを買ってこなければならない。木栓などを使うと、田舎でやる時に、その辺で買ってくることができますよね。

公共建築を木で造る

三：税金を使った公共建築をつくるとき、価格についてはいろいろ問題がでてきますが、「地元の業者で地元の職人さんが建物をつくるので、結局は地元にお金が返ってくるんですよ」と言うと納得してくれます。

生業の保全

吉：「伝建」を利用した活性化の中で、観光化を掲げた商売を始める人がふえている地域もありますね。そこを気に入っている観光反対の人達は出て いってしまう。

三：そうですね。観光客目当てだけではなく、住もうために行われる商売として、建物をつくるとか修理するという行為が活発になってほしい。そして、町に人を残すという意味で、モノをつくってきた人達の“生業”が保全されるサイクルが建築界にも育ってほしいですね。住んでいる人の生態系を保って・・・

吉：住み続けることが、第一です！

瓦の工夫

三：「ふるさとの館」では、作意をなくすために瓦をタテシマに2種類の瓦を交互に並べました。同じ瓦を並べてしまうよりも、いい表情がですね。

吉：そう、ランダムに並べようとすると、おかしな模様ができることがあるんですね。

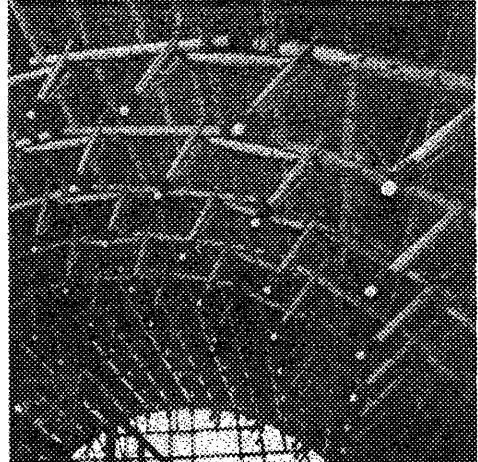
三：乱数表を使うと割とうまくいったこともありますよ。8%位がいいですね。

集成材の利点

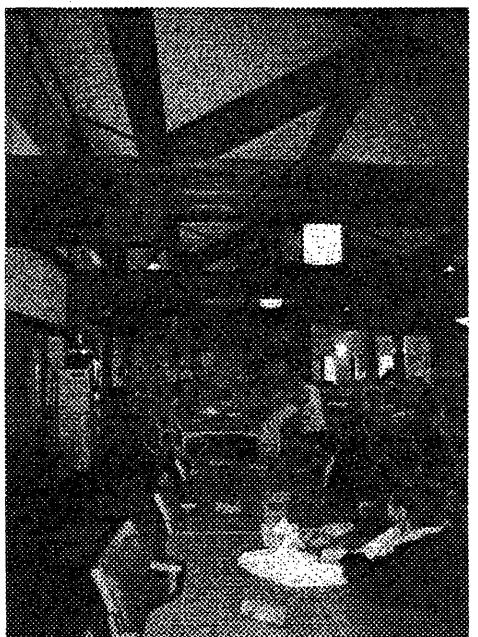
三：集成材は、15%に乾燥させるのが容易ですよね。150mmの山の間伐材を使うと、5寸角がとれるんです。集成材は竣工後の変化も少ないし使いやすいんです。

吉：木はどこのものを使っているんですか。

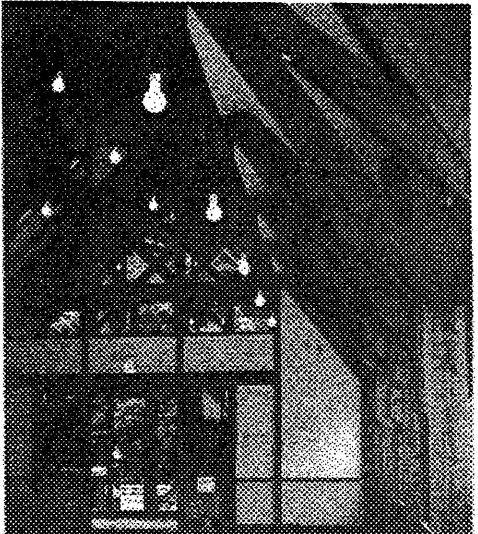
三：林業機械化センターの場合、第1期には長野の唐松、第2期に秋田杉、第3期目に地元の木材を使うことができました。何にしろ、山の木を有効に使うことが重要です。



長浜鉄道文化館



小国老健



古河文学館 (写真×3:桂二先生より)

ふらっと出雲

岸 未希亞

昨秋に播州の民家・町並みを紹介させていただきましたが、今回は旅行会社との太いパイプを持つ知人の計らいで格安の旅をして参りました。

東京をはじめ、全国的に梅雨の長雨に見舞われた6月下旬の週末でした。早朝6時台の便で羽田を発った私（正確には私たち）は、幸運にも雨の上がった出雲空港に降り立ちました。島根県を代表し、日本全国を見渡しても屈指の建築物といえば皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？

初めに、神社建築の最古の形式の一つである大社造り、その代表格といえる出雲大社が挙げられます。縁結びの神としても有名で、ガイドには拝殿に掛かる太いしめ縄のことや賽銭に45円（始終ご縁）を入れると縁が結ばれるなどとあります。

国宝に指定された

2間の切妻造り妻

方に偏っている特異

ます。神社の起源と

ては『建築様式の歴

国社』の中で次のよ

「豊富な古代遺構を

建築には古い遺構が

の起源について考え

<自由>な参加が必

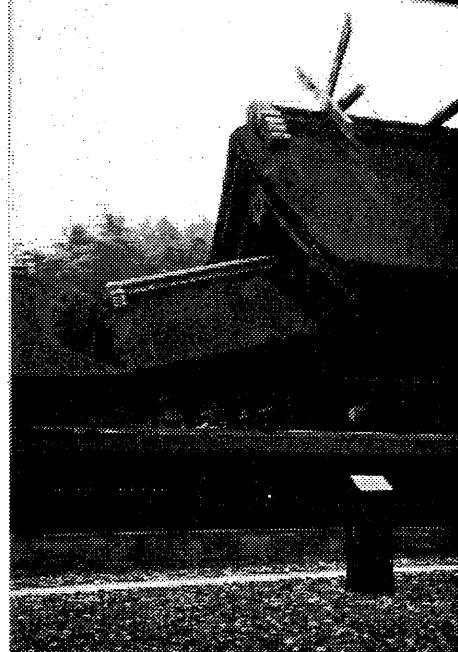
雲大社本殿も延享元

『記紀』『風土記』の

社伝などから推定さ

丈（48m）もの巨大

復元）であったと言



本殿は、桁行2間、梁間

入りの建物で、入口が一

な平面形式に特徴があり

いう興味深い問題につい

史と表現』（中川武著、彰

うに述べられています。

誇る寺院と比べて、神社

現存していないため、そ

るには否応なく想像力の

要である」と。現在の出

年（1744）の造替になり、

説話や平安時代の記録、

れる創建当初の姿は、16

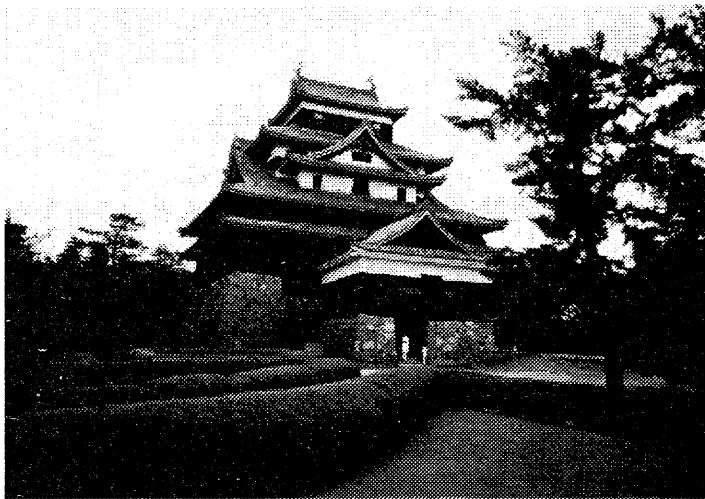
かつ異様な姿（福山敏男

われています。日本海を

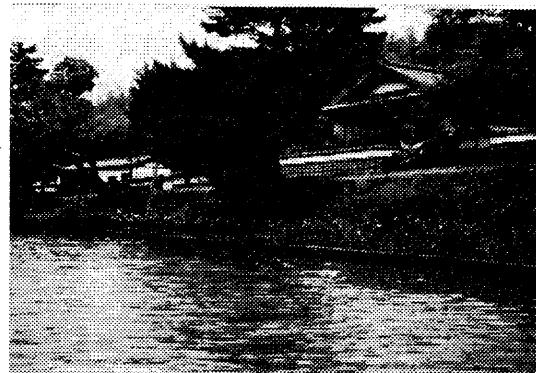
背に、深い森に囲まれた出雲大社、その参道でふと足を止めると、悠久の時の流れに飲み込まれそうな感覚に包まれました。

次に、国内に残る12の現存天守閣の一つ、松江城があります。天守閣の大きさ（平面規模）では2番目、高さ（約30m）では3番目、そしてこれは桂二さんとも意見が合ったのですが、姿の美しさでは1番！と言って差し支えないお城です。

前回紹介した姫路城と異なり、城内の櫓・堀などは全て取り壊されてしまったのですが、内濠に囲まれた本丸・二の丸・北の丸は小高い山（亀田山）を切り崩して形成されており、宍道湖を望む天守閣からの眺望はとても素晴らしいです。



と松江堀川めぐり」が就航しています。川面を渡る風も心地よく、船上からの眺め（特に小泉八雲旧居の辺り）も風情がありますが、特に印象に残ったのは 16 もの個性的な橋を潜り抜ける場面です。なぜなら、それらの橋の中には川面からの高さが 1m 程度しかないものがあり、乗客が船に這いつくばらなければならないからです。その際に日（雨）除けの屋根が電動で倒れるのを見たときには、呆気に取られてしまいましたが…



最後に、有沢山荘菅田庵・向月亭について簡単に触れます。今回の旅で最も楽しみにしていたのは松平不昧（松江藩 7 代藩主）好みと伝えるこの重要文化財茶室を拝むことでした。雨がひどい時には公開できません（雨戸を開けられない）と事前に言われていたので正直などろ諦めていたのですが、普段の行いがあまりに良いため、全国的に雨が降るなか松江は晴れてくれたようです。

菅田庵には御風呂屋と呼ぶ待合があります。実際に蒸風呂（サウナ）があって、鷹狩や弓の稽古で汗をかいた不昧公が、一風呂あびて清々しい気持ちで茶に臨んだようです。茶席は 1 番台目中板付き隅炉という構えで、中板に炉を切らず隅切りとしているため、客と亭主との間に空間的な余裕を生み出しています。ただ残念ながら、ここも待庵（利休好み：京都）同様に屋外から覗きこむしかなかったので、その空間体験を実感するまでには至りませんでした。また柱など材も相当に傷んでいるので修復工事が望まれます。

その晩は玉造温泉に泊まり、翌朝には帰京するという短い滞在でしたが、旅好きにはお薦めです。宍道湖に突き出す出雲空港からの離陸もまたドラマチックでした。

また、堅牢な城の構築と城下町の整備にあたり、宍道湖から水を引いて水路を縦横にめぐらしたことから、松江は水の都としての風情を今日に伝えています。往時から濠の要所には船着き場がありましたが、3 年ほど前から、これらの水運を利用して和風遊覧船「ぐるつ

讃岐の古民家を残したい

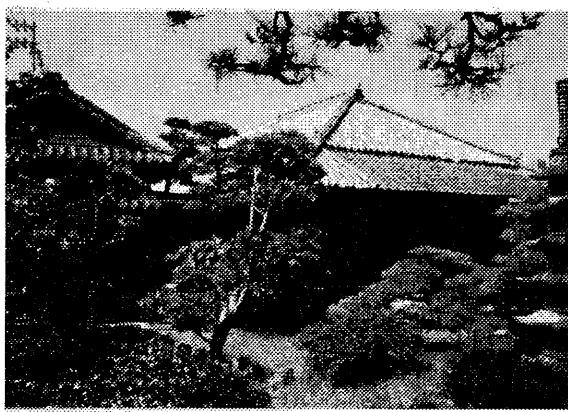
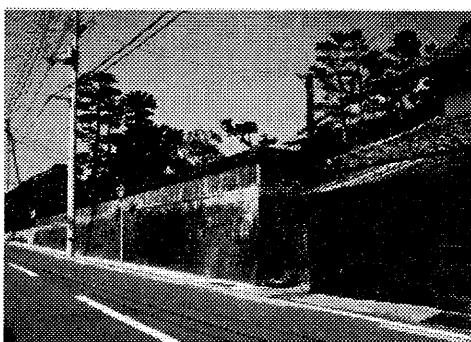
吉田桂二

今年の1月の末頃、突然、世田谷区奥沢にお住まいの、松岡さんという方からお手紙をいただいた。香川県三豊郡山本町の辻というところに、お父様の生家があり、14年前までお祖母様が1人住まいしておられたが、亡くなられて以後、空家となり、時たま1週間ほど行って雨戸をあけたり、法事をしたりする程度使っているが、残してゆきたい。しかし、会社を退職し、子供達も散つていった夫婦にとっては、それに注ぎこめる貯えはなく、相談した不動産屋や建築会社の人は、壊してミニ開発することしか言わない。行政の対応もいまいちだ。どうしたものか。ともかくもお会いしたい、ということでした。

私の著書を読んで、この人なら相談相手になってくれるのではないか、とお考えになったようである。2月初の頃、事務所でお会いした。お持ちになった図は全くの素人図なのでよく分らないが、屋敷は630坪強、建物は主屋・離れ・土蔵・長屋門などあり、建坪180坪ほどと書かれている。写真数枚で見ると、庭も広く本格的にできている。道路が輪に切石積の高い石垣がある。山本町は道路拡幅でこれを削るといっているとのことであった。

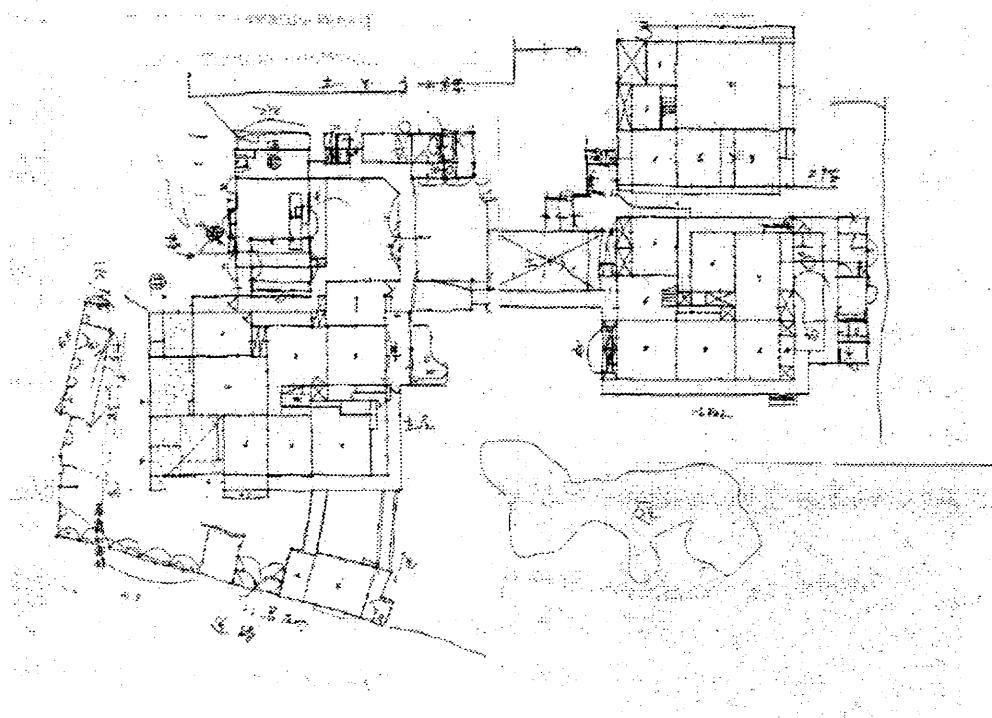
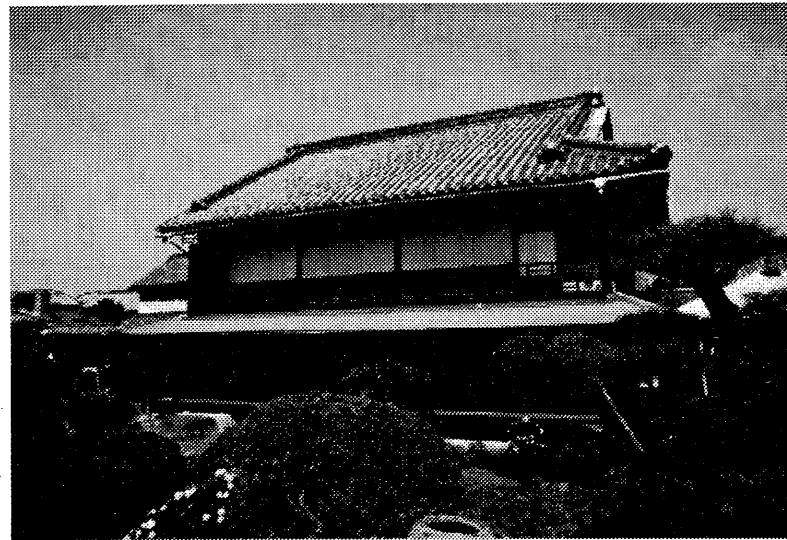
四国の内子や大洲に行く機会があるので、早い機会に拝見することにしたが、年度末、年度始めで公共事業が動かない時期なので、行ったのは7月4日になった。行く前に山本町のことを調べてみた。行政の目下の取り組みはOA化であるとあった。要するに何にもしていない行政であった。

内子から行ったので、内子の岡田文淑さんと、街並み対策課の久保さんと一緒に行った。岡田さんが、現地で保存などに努力しておられる建築家の多田善昭さんを呼んでおいてくれたので、多田さんとアシスタントの女性を加えて、多彩な顔触れでの見聞となった。松岡さん夫妻はそれ以前からお出でになっていて、内子などの見学もされていた。



見ると聞くとは大違いとはこのことであった。想像以上の大邸宅である。早速、写真を撮りながら間取りを描いてみる。まだ正しく図を起こしていないので、掲載した図は、その時の走り書きである。その晩はカヤを吊った座敷に泊めていただき、翌5日帰京した。

松岡さんは、何らかの公共的な使用法で、保存再生すること、あるいは寄贈ということもお考えになっている。何はともあれ、調査が先ず必要だ。ボランティアでやる以外にない。生活文化の学生達に期待する。



「日本の〇〇」をつらつら考えて

衣袋 和子

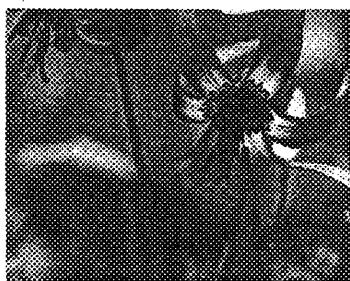
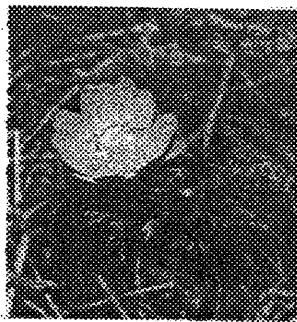
「日本の色」、「日本の〇〇」と聞いて最初に頭に浮かんだタイトルです。私が色について考えるとき、先ず「黄色」が頭に浮かびます。それは形として頭に浮かんできます。「福寿草の黄色」と限定されるからです。

私は山形の田舎で育ちました。家のうしろはすぐ山で、冬の間は真っ白に染まります。山だけでなく、田んぼも道もほんと真っ白です。子どもの頃、朝の通学路は道なき道をまっしぐら。上を歩いても平気なほど固く降り積もった雪の上を、歩いて学校まで通いました。

そんな冬も終わり、春が訪れる時期には、雪融け水で小川があふれ、長靴でないと学校に行けないほどでした。そんな時です。春を待ちきれずに、雪を押し分けて福寿草が顔を出してきます。そして、土の色もまだ現れないうちに、黄色い花が、ポツン、ポツンと開き始めます。「ああ、春が来たー！」と実感する瞬間です。田舎にいるときは気づかなかつたのに、今すごくその黄色が印象的です。最近よく花屋さんで鉢植えの福寿草を見かけたりしますが、あの黄色ではだめなのです。雪を押し分けて咲いたあの力強い黄色、それが私の中の本当の福寿草の黄色です。

福寿草を思い浮かべたら、「片栗の花の紫」を連想しました。

同じ山に咲いていた花です。といつても、私が勝手に「片栗の花」と思い込んでいるのですが。いま、片栗の花はほとんどないと聞いたことがあります。あの花たちが本当に片栗の花だったのか、それを証明する事はできなくなりました。強風で山の樹が家の屋根に倒ってきて、山の持ち主が斜面を削ってしまったからです。



ただ、小さな花たちが群れになって咲く様は、今でもはっきり覚えて
います。ひっそりと、そしてしっかりと咲いていました。その小さな
花たちは、ちょっとした幻想の世界へ私を誘ってくれました。

特に雨上がりのときなど、花びらのうしろ
から、葉っぱの隙間から、コロボックルが
顔を出してこないかなあと、少し本気で思
つたりしたものです。

あの静かな紫は、とてもやさしい色でした。

そして最後に「桜の花」です。うしろの山に1本だけ大きな枝垂れ桜
の老木がありました。小学校の頃まではきれいな花が春を知らせてく
れていたのですが、何せ相当の老木らしく、中学の頃からだんだん花
が咲かなくなってしまいました。時々リスがその桜の樹に登っている
のを見ては、「今日は会えた。良い日になるぞ！」と密かな朝の樂し
みになっていました。

その枝垂れ桜が「復活した」というニュースを田舎から貰ったのは、
去年です。町指定の桜（の1本）に選ばれたとのこと。えっ、花がまた
咲くようになったの？と、ちょっと合点が行かないのですが（まだ御対面していないので）、兎に角良かった良かった。またみんなに春
を知らせる使者になったのですね。「ガンバッテ！」と応援したくな
ります。

こんな風に「日本の〇〇」をつらつら考えていたら、田舎のいろんな
風景を思い出してしまいました。庭なんて呼べるようなものはほとんど
ない小さな家でしたが、その代わりに柵もなく、垣根もなく、おまけに鍵もなく、ほんとのどかで大らかなところだったなあと、改めて
感心しました。「借景」なんていう言葉は、こちらに来て覚えた言葉
ですが、私はその借景を思う存分満喫して、日本の四季折々の風景を、
目で、耳で、手で、舌で、いっぱいいっぱい味わっていたのですね。
そんな田舎も、昔のままあるわけではありません。子供たちはテレビ
ゲームに夢中になり、携帯電話の普及もこちら並みのこと。何だか複雑な気持ちです。だからこそ、そんな子どもの頃を過ごせたことに
ちょっと感謝したくなる一瞬でした。

今晚当たり、田舎に電話してみようかな。



リレー連載第9回は江原幸壱さんです。乞うご期待。

第7回大平建築塾

テーマ：『環境の自分化』

開催日時：8月19日（土）～8月21日（月）

19日（土）

会場：紙屋

現地到着次第受付 塾をしつらえる（清掃、薪の用意）

PM 1:00～

開塾式（紙屋集合）



PM 3:00～

会場：紙屋

基調講演：『環境における「時間」の問題』

講師：内山節

世話役：飛山龍一



PM 5:00～

夕食

PM 7:30～

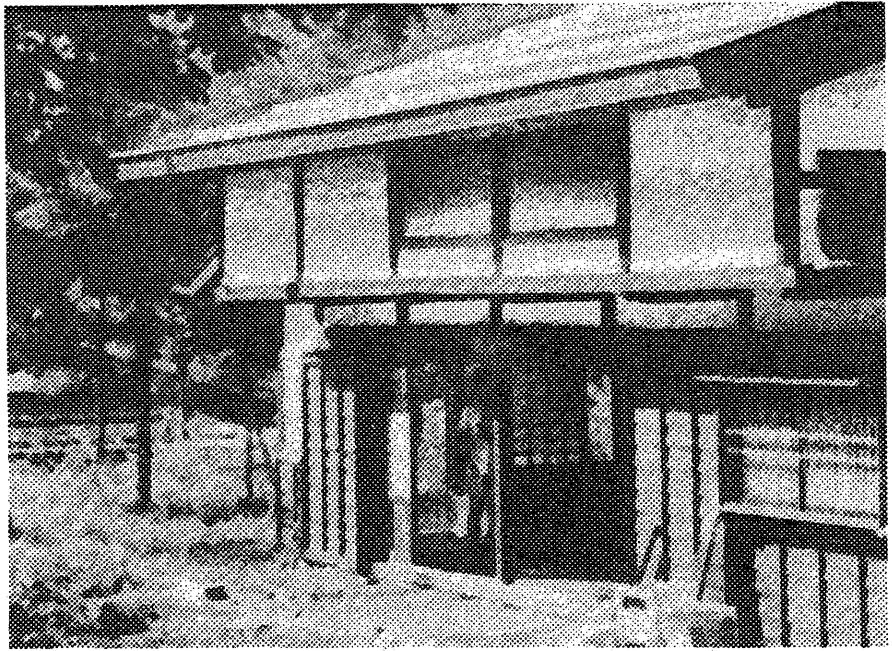


会場：紙屋

夜会公演：『中国民族音楽 二胡と揚琴の音色』

演奏者：ラコウ,チャンウェイウェイ

司会：佐々伸子



20日（日）

AM9:00～11:00 会場：紙屋

全体会議：『大平の保存と再生、そして創造は・・・』

レポーター：吉田桂二 桜井善実 米山淳一 羽場崎清人

司会：高橋俊和 益子昇

PM 12:00～昼食

PM 1:00～分科会

第1分科会：『保存と再生』

レポーター：吉田桂二 降幡廣信 世話役：岸未希亞

第2分科会：『復元と技術』

レポーター：戸張公之助 世話役：藤谷智史

第3分科会：『継承と創造』

レポーター：小林一元 日影良

PM 7:30～『懇親会』 司会：長谷川順持 佐々伸子

21日（月）

AM9:00～11:00

大平宿をしつらえる（各宿改修、清掃、etc…）各宿にて計画

AM 11:00～閉塾式 会場：紙屋

PM 12:00～解散

同人紹介

鈴木 久子

お茶のおけいこを始めてから愉しみが広がった。お茶そのものの魅力・おもしろさはもちろん、それ以外にまず着物である。おけいこは雨が降らない限り和服で受けることにしていて。（当然と言えば当然なのだが）唯、棒のようにつつ立って着付けをしていただいていた私にとっては晴天の霹靂。結局私の中で何らかの機が熟したのだと思う。

私の母は元々、和服が好きな女性だった。50代からお茶を習い始め、折々、和服で過ごす時間も増えていったようである。お茶のおけいこを始めた旨を伝え、「着ていない着物は頂戴ネ」とたのんだ。骨董市で小振りの桐のたんすを手に入れた。それからは、つれあいの母から袴の着物が届き・・・踊りを習っている幼な友達から名古屋帯一本・・・等々。極、自然な感じで着物達が集まってきた。正に着物が着物をよぶ感じである。たんすは半年もたたないうちにいっぱいになった。

ひとつ基本的に接配の悪い事に気がついた。体型の差である。私の母は小柄でやせている。身丈は10センチ以上の差がある。おまけにいろいろな所作の中で最も目につき易い手元、すなわち桁が短い。これは致命的だった。和服の場合、正に「大は小を兼ねる」であり、逆の場合は全部ほどいて縫い直すしか手がない。新しいものを買いそろえるのではなく古い着物を着継いでゆく・・・このまま進むと和服の仕立にまで手を染めてしまうのではないかしら？

この段階で持っている着物のデータ化が始まった。知り合いの整理法にヒントを得て一枚一枚写真を取る。身丈、前幅、後幅、袴、袖丈の寸法をはかり、ファイルに入れ、通し番号を打つ。畳当にもその番号を入れる。帯も同様である。自分にあつらえた着物ばかりではない場合、これは画期的で、便利な方法である。一冊のファイルだけで着物と帯の配色組み合せから帯揚げ、帯締めの選択まで自在である。

2点目は、街を歩く時の視線の変化。新宿駅の階段ですれ違ったキリッと泥大島を着こなす女性、新幹線のホームに佇む涼しげな夏帯姿・・こちらの知識がふえる程、布の表情と色の豊かさを心得て自在に装う女性に感動する。思わず振りむいて感心して見送ったりする。何と新鮮なときめき。街にはまだこんなに和服をいとおしむ日本の女性がいる。

建築をみる視線もチョッピリ低くなった分人間らしくふくらみができるのでは、と思うこの頃である。

【建築家・吉田桂二グループについて】

まず初めに、このグループは個人新聞“たじみより”編集・発行人の横田文孝がeグループのシステムを利用して製作・公開する、プライベート・サイトである事をお断りしておきます。

吉田桂二さんご自身によるオフィシャル・サイトは、下記URLにあります。是非皆さんもご覧ください。

【<http://www2.odn.ne.jp/~ccp63010/>】

プライベート・サイトであるが故に、ここに収録した内容は、横田の視点と感じ方で纏めたものです。その多くは、横田が発行する個人新聞“たじみより”に掲載した内容と重複しますが、今回は特に昨年私家版で製作したCD-ROM『“たじみより”大平建築宿’99』に収録した内容から厳選し、レイアウト等の再編集を行って掲載して行く予定です。

昨年『“たじみより”大平建築宿’99』を編集・製作するにあたっては、吉田桂二さんを始め、生活文化同人の皆さん等に資料提供などのご協力を頂いております。

ここに改めて、お礼を申し上げます。

『“たじみより”大平建築宿’99』は私家版・非売品であるがゆえ、昨年の大平建築宿で入手された方以外には、その内容をお届けすることが出来ません。

今回この“YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI”で少しでもその内容をお届けし、皆さんに吉田桂二さんの作品と思想をお伝えできれば、と思います。

現在“YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI”グループは、どなたでもその内容をご覧いただける“公開”形式を探っており、“メッセージレイアウト等の再編集を行って掲載して行く予定です。

是非とも“YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI”グループへの参加登録をお願いします。

2000年6月15日

個人新聞“たじみより”編集・発行人

“たじみより”ドット・コム 横田 文孝

建築家・吉田桂二グループ（YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI）のアドレス

投稿アドレス：YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI@egroups.co.jp

参加(自動処理)：YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI-subscribe@egroups.co.jp

退会(自動処理)：YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI-unsubscribe@egroups.co.jp

グループオーナー：YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI-owner@egroups.co.jp

グループページのURL：http://www.egroups.co.jp/group/YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI

現在公開中の内容：<対談・町並み歩きは魅力がいっぱい>

http://www.egroups.co.jp/files/YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI/taidan/index.html

建築家・吉田桂二グループ（YoshidaKeiji_in_TAjimiYORI）に関する一切の問い合わせは、上記グループオーナーアドレスへお願いします。

■2000年第4回「語る会」のお知らせ

日 時 9月6日(水) 午後6時30分から
場 所 代官山「無垢里」語る人 伊藤秀夫
テマ 品川の近代建築と自作

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います(当然、酒代などは自前、割り勘になります)。
- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。
「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■ テマ「金」写真展のお知らせ

日 時 8月4日(金)~8月26日(土) am11:00~pm19:00 木曜休み
場 所 アユミギャラリー(神楽坂) tel 03-0369-1577

- ・精銳プロカメラマンによる毎年恒例真夏のイベント。皆さんよくご存知の木寺さん、畠さんファミリー、大橋さんも出品されています。

■次回世話人会のお知らせ

日 時 8月25日(金) 午後6時30分から
場 所 飯田橋 もてなし

- ・生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■2000年度第4回目世話人会報告(00.07.7 於:飯田橋 もてなし)

1. 大平建築塾 8月19(土)~21(月)の準備について、実行委員の参加のもとに、最終的な調整が行われました。今年の大平も盛りだくさんの内容でお待ちしています。みなさん、お誘い合わせの上、ご参加ください。
2. 今後の定例会の候補がいくつか挙がりました。第4回目については現在交渉中です。
3. 吉田桂二さんから、古民家ボランティア調査の呼びかけがありました(P8、9参照)。

■会報編集局より

- ・会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報を寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆編集後記

- ・前回の定例会は、お忙しい三井所先生に時間を割いていただき、予想以上の有意義なお話を伺うことができて幸いだった。ただ、木造建築に問題意識を持つ会員が多いはずとの思いもあってお膳立てをした私としては、案外に参加者が少なかったことが残念だったし、もったいないと思った。もっとアンテナを張っていた方がいいんじゃないのかな。

(まつもと)

会報編集局 〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-2-201 松本昌義

TEL/FAX 047-332-4413 Eメール mmatuno@d1.dion.ne.jp

2000年度事務局: 〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp

生活文化

S·E·I·K·A·T·U·B·U·N·N·K·A

生活文化同人会報 2000年第5号 No.45

もくじ

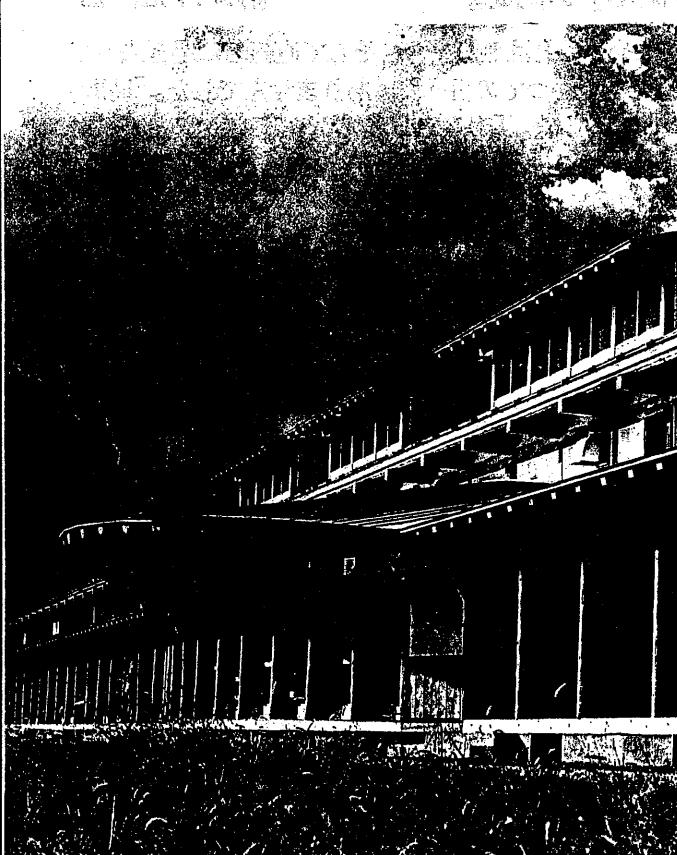
・第4回目定例会	1
・第7回大平建築宿の記録	2
・南郷村民家の移築再生 PART2	8
・杉並区西荻地区に残る昭和初期の建物	10
・全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会からのご案内	12
・急告 大平宿の火災	13
・大平宿の保存再生に関する「要望書」	15
・リレー連載 日本の中の外国	16
・同人紹介	18
・掲示板	19
・「語る会」のお知らせ、事務局報告	20
・付録 掲示板番外編	

2000年第4回定例会

「横手市立栄小学校について」

・日時 10月23日(月) 6:30~9:00PM
・場所 池袋芸術劇場 小会議室 1

講師 安藤邦廣 氏 設計工房 黒
筑波大学教授



最近ようやく日本でも世界的にも、いわゆるポストモダンの考え方とは平行しながら、地域の風土に根差したものをという動きが強くなっています。それに見合う建築上の作品がなかなか現れてこない。この小学校のデザインを見て、これを新風土主義と名付けたいと思いました。

安藤さんは、それまでの研究者とは違い、民家が形づくられていくその地域の生活、慣習、物のつくり方、材料、構法などと風土との関係を中心で研究されています。そういう安藤さんが住宅の設計を始め、それをなかなかいいないと共感しながら見ていると、今度は学校建築に進出してきたわけです。日本の建築界では住宅ばかりやっていると大きな仕事はなかなかこないので、大変運のよいきっかけがあつてできたのだなというのがわかりました。まさに安藤さんらしい建物を建てたなという感じがあります。民家の研究とつながっていますし、戸建て住宅の延長線上にある。つまり民家風であり、住宅風でもある、必ずしも伝統的な雰囲気を出しているだけなくモダンなデザインでもある。そういういろんなことが複合した素晴らしい建物になっているという意味で、新しい風土主義の手本になるのでは、という印象を受けました。

(平良敬一、住宅建築1995年1月号より転載)

*会費2000円(年会員以外の方、学生は半額)

*参加者は必ず連絡してください。

申し込みは事務局(裏表紙参照)までお願いします。

世話人 佐々伸子

第7回大平建築塾の記録

今年の大平建築塾は8月19日から21日までの3日間「環境の自分化」をメインテーマに、総勢約130名の参加を得て、盛大に開催されました。以下、その概要をプログラム順に報告いたします。

(敬称略)



開塾式における集合写真

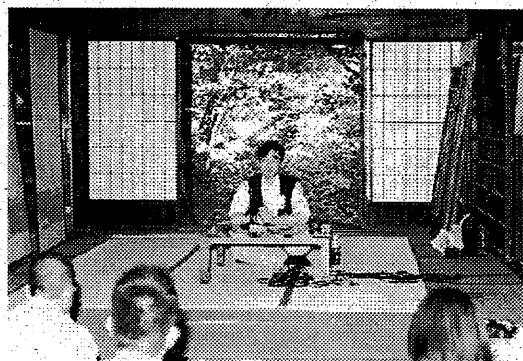
基調講演

『環境における「時間」の問題』

講師：内山 節

私達が普段感じている「時間」は、生活や自然とは無関係に、そして直線的に過ぎ去ってしまいます。しかし、そのような時間感覚は、かつての日本にはありませんでした。「時間」ではなく、「時」の感覚の中で生活が営まれていた。「春の時」「朝の時」「種蒔のとき」「祭の時」、そのような「時」は、自然によってつくりだされるだけでなく、人と自然との関係の中でつくりだされるものです。そして、この「時」は、直線的に過ぎ去ってしまうものではなく、再び帰ってくるものとしてとらえられていました。

環境問題について、現代社会は、「時間」で自然を計ろうとしています。しかし、自然の時間と人間の時間が調和するとなったらどのような瞬間なのか、そのことを考えることによって風土に適した自然と人間のあり方も考えることができます。大平に参加している人達に、大平とかかわることによりどのように「時」をつくりだしていくか、時間を蓄積させていくか、そのような問題を提起されました。(報告者：飛山龍一)



夜会公演

『胡弓演奏会』

演奏者：羅紅・張薇薇

どんなに素晴らしい録音もLIVEにはかなわない。演奏者が登場した瞬間、その場の空気は一変する。演奏者の気迫、情熱その他もろもろ鋭い何物かが、オーディエンスの毛穴という毛穴を刺激する。そして同じ演奏者によるLIVEも、演奏する「空間」によって、まったく違ったものになる。まさしく「空間」もまた楽器の一つなのであり、演奏者と共に演して一つのハーモニーを奏でる。二胡／揚琴という中国の古い楽器と、大平の民家の枯れた木の空間とは、どんなにか素晴らしい音を奏でるのだろう。そんな期待をもって臨んだ夜会公演だったが、期待に違わず素晴らしい演奏会となった。

二胡演奏家の羅紅(ラ・コウ)さんと揚琴演奏家の張薇薇(チャン・ウェイウェイ)さんの登場。その美しさに一同息を飲み、もう

「やられて」しまう。やがて流れてくる、織細で優いような、それでいて芯の強い、艶やかで不思議な音色。たった2本の弦でこんなにも深遠な世界を作り上げてしまうなんて驚いた。揚琴の華やかな音色もまたいい。13-5本の弦を自在に操る演奏者のハチさばき。

その気迫に圧倒される。「紙屋」の柱や梁、床も確かに共振して、それが背骨に伝わってくる。時折寒氣すら感じる。やはり弦楽器には木の空間がいい(と私は心の中でひとり納得する)。中国の古典、日本の名曲等々織り交ぜながら、夢見心地のまま公演は軽快に進行していく。羅紅さんの旦那さんである雷さんの司会もまた絶妙で、素晴らしい夫婦漫才を披露してくれた。もうちょっと聴きたいなと思うところで公演終了。

いいLIVEだった。心の底から満足満足。羅紅さん御一家、張薇薇さん、本当にありがとう。

(報告者:佐々伸子)



全体会議 テーマ『大平の保存と再生、そして創造は・・・』

レポーター:吉田桂二 桜井善実 米山淳一 羽場崎清人 松村茂利



第1分科会 テーマ『保存と再生』 レポーター：降幡 廣信 × 吉田 桂二

第一分科会は「今、何を保存して何を再生していくのか」を中心テーマに降幡氏、吉田氏の少年時代の体験を織り交ぜながら、話は進められた……。

「民家再生」は、今の生活を入れる器とするだけではなく、新築では味わうことのできない快適な暮らしの場をつくり出していく、「再生」だけれども非常に創造的仕事。新築にみられる、機能的側面からの生活改善で得られた家の中には、
<便利・無駄がない・どこに行っても明るい>といった環境は得られたが、
<おちつき・やすらぎ・奥ゆかしさ>といった精神的なものが足りない。
<不便ではあるが、なんとなく惜しい>とか、
<親父・家長中心につくられた家づくり>、
<不気味なものが漂っていた民家>から、何でもできる、怖いもの知らずの家へ変化した。新しい住宅

の中では、生活・礼儀の問題と深く関わった家のつくり、いわば教育の場がない。このことが子供の非行と関係があるのではないかとさえ思ってしまう。

20世紀は新築の方向に振り子が振れた時代だと思う。そして、地球環境問題の反省からも保存再生が新築にかわり、主導になる時代が21世紀であろう。(報告者：中村文美)



第2分科会 テーマ『保存・修復・復元』 レポーター：戸張公之助

1. 復元とは何かを考える。

桜町遺跡、三内丸山遺跡、朱雀門の復元の例を通して「復元」を考える。

「復元」の根拠。問われる真実性。

2. 木造建築に見られる保存修理のサイクルについて

古来より、建物は小修理、中修理、大修理を繰り返してきた。差し茅、塗装の塗り替えなどの「日常的な維持修理」、部分的な破損修理による機能の回復—「部分解体(半解体)修理」、耐用年限を超えた破損の「根本修理(全解体修理)」。

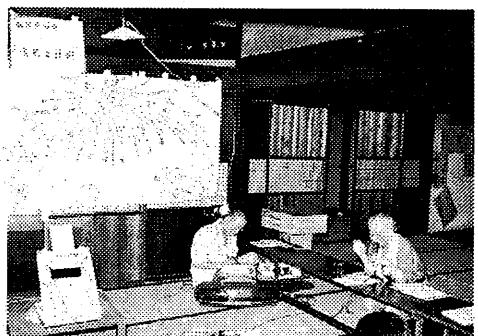
2. 財団法人文化財建造物保存技術協会(文建協)の仕事

文建協のスタンスは地方文化財においても学んでよいのではないか。そして、これからは専門家だけで進めるのではなく、もっとオープンにして修理方針を公開していく必要があるのではないか。

4. 神戸華僑総会の修復(戸張講師これまでの仕事の中から)

80枚のスライドを通しての紹介。

(報告者：藤谷智史)



第3分科会 テーマ『継承と創造』

レポーター：小林一元・日影良孝

戦後50年、住宅は他のモノと同じ「商品」として作り手（売り手）側の論理でつくられるようになってしまった。地域天然資源の活用とサイクル、技術の伝達、増改築や間仕切りの移動の容易さ…日本の伝統的な住宅の備えていた「商品」にならない「価値」は、どこかに置き去りにされてしまったようだが、廃棄物問題、健康住宅、家族の心の問題、国内林業（森林環境）、等々への関心の高まりから、上記のような伝統的な住宅の持つ「価値」は見直されるべきと思われる。

第3分科会では、小林・日影を中心に、そのような問題意識から集まった約20人で意見交換がなされ、環境保全産業としての林業を支える木材業者や自治体の取り組み、プレカットと伝統構法をうまくつないでいく必要性、健康住宅とは何か、住み継いでいく仕組みと中古住宅の評価制度の必要性、「耐久性」の高い住宅と変化の多い現代での「耐用性」の高い住宅とは何かなど、それぞれの疑問があがり、取り組みが紹介された。（報告者：赤桐雅子）



第4分科会 テーマ『木こり体験』

指導 田中淳司ほか

大平の民家のまわりのカラマツ等は離村当時に植林されたもので、今では、落ち葉が屋根や土台近くに積もり、民家を朽ちさせています。民家やカラマツ林のことを考えると、周辺のカラマツはある程度伐採して、風通しを良くする必要があります。



今回は、林業技術者の田中淳司さんたちの指導の下に、参加者が実際に手鋸で伐採作業を行いました。伐採するときの受け口、追い口の切り方やスギの皮むきの方法などを教えていただきました。
また、屋根方向に大きく傾いたモミの大木を、枝を払って木の重心を移動させ、チルホールで引っ張りながら屋根と反対方向に倒す、そんなプロの技も拝見させていただきました。（報告者：飛山龍一）

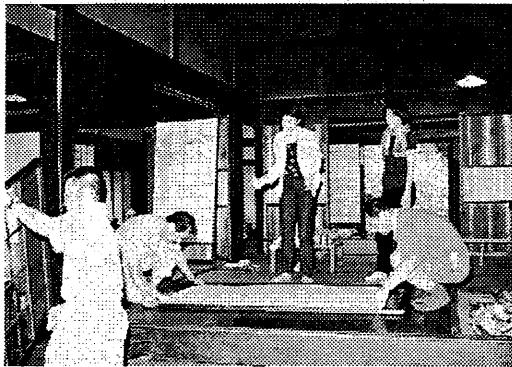
懇親会 大平の夜

大平建築宿は「はじめ」に勉強する集いとして定評があります。テーマを設定してお互いの問題意識を持って対話する、その真摯な姿は、大平に「盆休みの息抜き」で遊びに来た方々には「美しく」も「辛く」感じられるのではないかでしょうか。そんなプログラムのなかにおきまして「夜の懇親会」は疲れた頭を溶かす（アルコールで）場として機能してくれます。司会者として終止冷静に酔いを抑えていた私も、皆の卓越した「素人芸」のパワーに圧倒され、また、同じく司会の「佐々/サッサと読む」さんの浴衣姿の色気も影響してか、途中より司会業放棄し「飲んで、歌って、語る」プログラムのない世界へと没入してしまいます。そう、「夜の懇親会」とは昨日まで見知らぬ人が何故か旧知の友になってしまふ、寝る宿も違う方々とも仲良くなってしまう（酔つて、違う宿で寝ていた人は行き過ぎ）、何の道具にも頼らないボディとソウルと大平という空間がつくる祭典。写真コンテストで優秀な成績を納め「ちよんまげのカツラ」を記念品としてゲットした人も居ました。終止「猥ソング、猥ダンス」を披露した人も居ました。そんな『至芸』をよそ目に、真剣に建築や教育を語り合う方々も居ました。翌日朝の頭痛やけだるさと共に、いろんな「映像」やいろんな「ことば」として参加した方の記憶に残る懇親会であったのではないでしょうか。

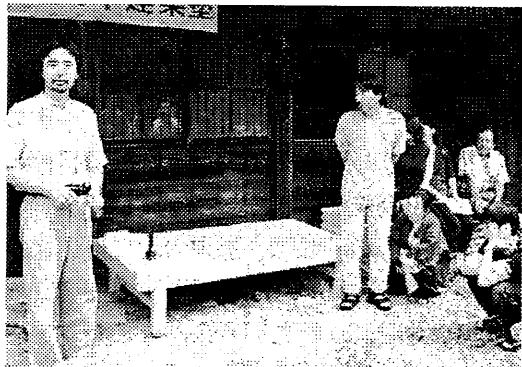
(報告者：司会兼歌芸担当 長谷川順持)



（写真）大平宿の宿場町の様子



最終日に各棟において行われた障子紙
張替えの様子



閉塾式の前に縁台とすのこ製作を担当した高橋
さんからその材料や構法についての説明がなさ
れ、これらは大平宿に寄贈された

大平と私

大平というのは長野県の飯田市から妻ごの間の山の中に入り、昔は宿場町でした。町からは車で40分もかかるので、今は人が住んでいません。その民家を使って、母の仕事仲間が毎年合宿のようなことをしています。私も今年で7回目の参加をしました。その古い民家にあるのは水道と電気、そしてカマドと囲炉裏だけです。ご飯を作るのもお茶を飲むのも、そのカマドや囲炉裏を使います。そこで昔は当たり前だったけれども、今は忘れてしまった生活を二泊三日間私達はするのです。

外国から輸入されている石油などに頼っていない生活ですから、スイッチ一つでお風呂にも入ることもできません。とても面倒くさい生活です。ゴミも市の人気が集めに来てくれませんから生ゴミをコンポストに入れて、紙はカマドの火付けにして燃やしました。ビニールやハッポウスチロールの皿などは燃せないので袋に入れて家に持ち帰りました。今はビニールなど当たり前に使っていますが、燃して灰にできないものを使うことは良い事ではないと思いました。

その宿場町の中を流れている小川はとても冷たかったです。そこで私達は冷蔵庫の代わりにジュースや果物を冷しました。顔を洗ったり汗を拭いたタオルを濯ぎました。でも私の家の前を流れている川では、そんなことする氣にもなれません。川がきれいなのは、人が住んでいないからだと思いますが、今は洗濯の水やお風呂の水があまりにも川を汚しすぎていると思います。

小学校の前に住んでいるおじさんが、日曜の朝はどこの家も一せいに洗濯するらしく、洗剤の泡が柱になることがあるといっていました。昔は便利なものがなかっただけで、環境や自然を考えてシャンプーや洗剤を使わなかつたわけではないと思います。しかし、便利な時代に自然なものではない色々なものが出来てきている今こそ、私達はしっかり良い物と悪いものを考えて生きていかなくてはいけないと思いました。（参加しての感想文というわけではないのですが、夏休みの宿題の「自然と環境」をテーマにした娘の作文に大平の事が書いてありましたので、出させていただきました。）

岡部祐子

南郷村民家の移築再生 PART2

櫻建築設計事務所 青島芳雄

中間報告の1月末から約7ヶ月、予定の工期を延長したものの、宮地邸は目標の建築の姿に無事竣工した。そして南郷村の民家、酒井邸は、那須の地に再生され「G&S 宮地」として新たな時間を刻み始めた。100年というスパンの時間をバックボーンとして次のスパンに突入することが叶った、と、まずは報告します。

（この記事は、元の建物の解体と移築再生の道のりの険しさ、反省も含め振り返って見たい。）

元の建物と移築再生された建物を大まかに比較すると、建築面積が72坪から54坪に、延べ床面積が120坪から82坪に、高さも1.1m縮小している。規模の縮小はこの計画の必然とも言えるもの、大型農家を今の生活に適合する建築にするためのハードルと考えていた。

中門のファサードは切妻からはっぽう造り風の屋根型に、大屋根は寄せ棟から入り母屋に、加えて、トップライトあり、越屋根あり、ハイサイドあり、等々。屋根の形態はこの建物の外観イメージを決定する最大の要素として、プロポーションとともに検討を重ねたものであった。豪快で無骨ともいえる元の民家を、イタリアンレストランとギャラリー、アトリエを併せ持つ住宅として、豪快なイメージを崩さないまま柔軟さや優しさを加味したいと考えていた。この屋根の造形は結果論であるが第二のハードルとなった。



（写真 木寺安彦）

新築の建物にも共通することだが、建て方からできる限り短時間に屋根葺を完了し、木造骨組みを保護し、シェルター内での作業性を計る、このセオリーが為し得ないジレンマが延々と続くことになってしまった。

第一のハードルは、覚悟もしていたが、それを超えたという実感。100年前の越後大工達が考えた道筋と技術、それを一度崩し再組み立てを計画した設計者、解体された無数の古材と設計図とを前にして全体像の把握が求められた現代の棟梁達、これに“規模縮小”という宿題がからんで、時間と手間の読み切れなさが大きかった。三者それぞれに合理性と筋道が在ると互いに認識できるのだが、くいちがいは少なくない。例を挙げれば、屋根下地。葺葺を前提にした又首の天端はフラットである必要が無い、金属板屋根

の下地はフラットでなくてはならない。屋根の面剛性を高めながら施工性と施工手順はどうすればよいか、案は2転、3転といったたぐい。これは材料と技術のマッチングの問題、100年の時間差を考えれば予測可能のことであった。建て方のスタートでも、同様の問題が続出した。今回の移築計画では、施工性に必要なアンカーボルト以外設置しないこととした。地盤改良のうえに地中梁と耐圧盤による必要にして充分な基礎を計画し、100年の時間に耐えてきた建物を“静かに置く”ものと考えた。余計な力を負担させない、という合理的な構造計画であると信じていた。しかし、軸組の垂直 水平を調整する「ゆがみつき」の作業がままならない。ワイヤーを掛けテンションを加えると土台は浮きあがってしまう。昔の職人たちはどうやったのだろうか？引つ張るのではなく、押したのではないか？100年を経てもケヤキの柱は暴れるものと目の当たりにした。etc. etc.

設計では読み切れなかった事柄が、現場で顕在化するのは、いうならば、建築の常、更にいうならば、それが建築という行為のダイナミックさであり面白さでもある。新築にあって、移築に無いわけがない。さらに増幅されたこのダイナリズムはぜひ多くの人々に味わってもらいたいもの。設計者にも、施工者にも。いわんや施主も、と限りなくゼロに近い夢を抱かせもする。

8月半ば、「G&S宮地」のオープニングパーティには200人を超える夢を抱く仲間たちが訪れました。

陶芸、ガラス、木工など、地域に根づいた作品のギャラリーとして、さらに、この場に集う人のサロンとして、そして、野趣あふれるイタリア料理を楽しむ場として。勿論、最初に語られた宮地さんの言葉通り、永く住み続けられる棲み家として、南郷村での100年を超えて、那須の地にさらなる時間を刻み始めました。



那須の家(春)

illustrated by Keiji Yoshida

杉並区西荻南地区に残る昭和初期の建物

金田 正夫

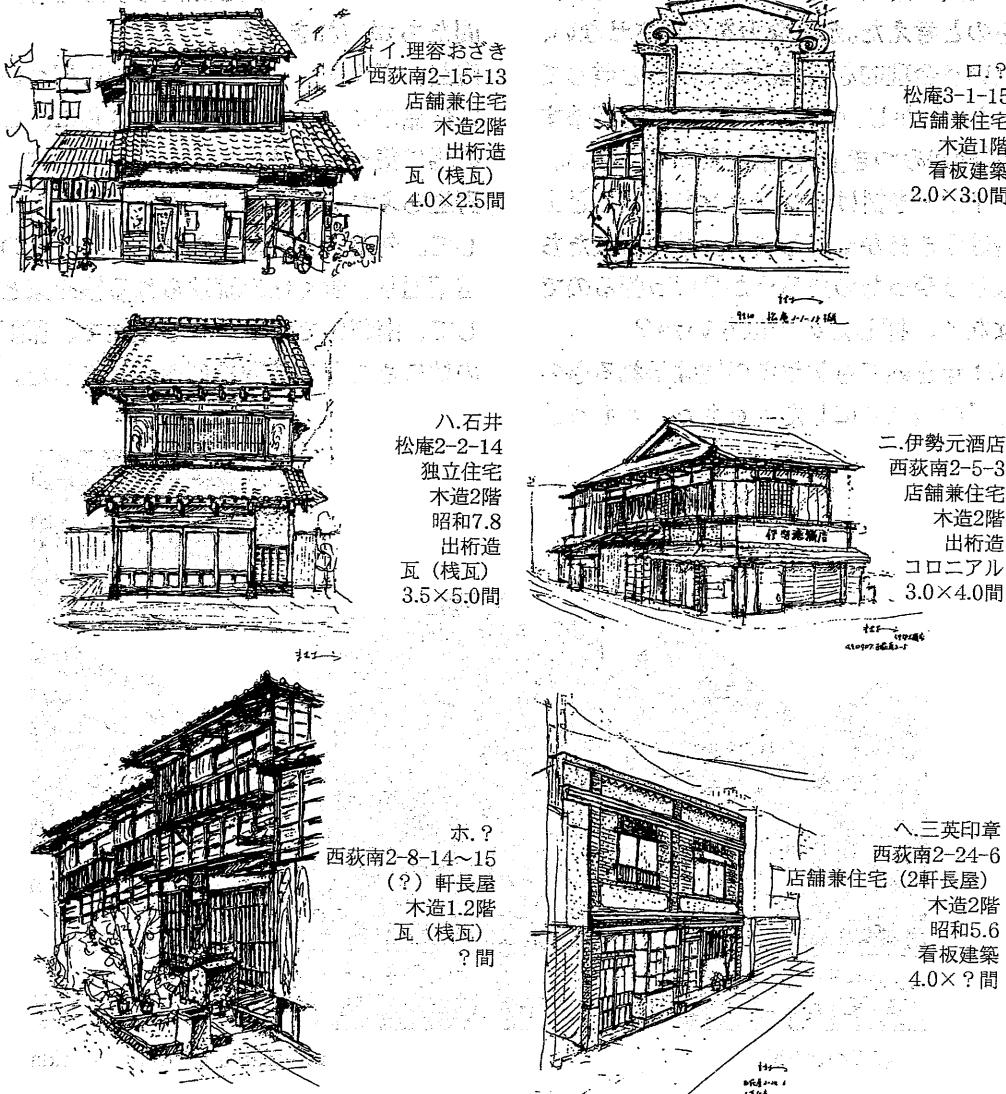
§ 1 地域の特性

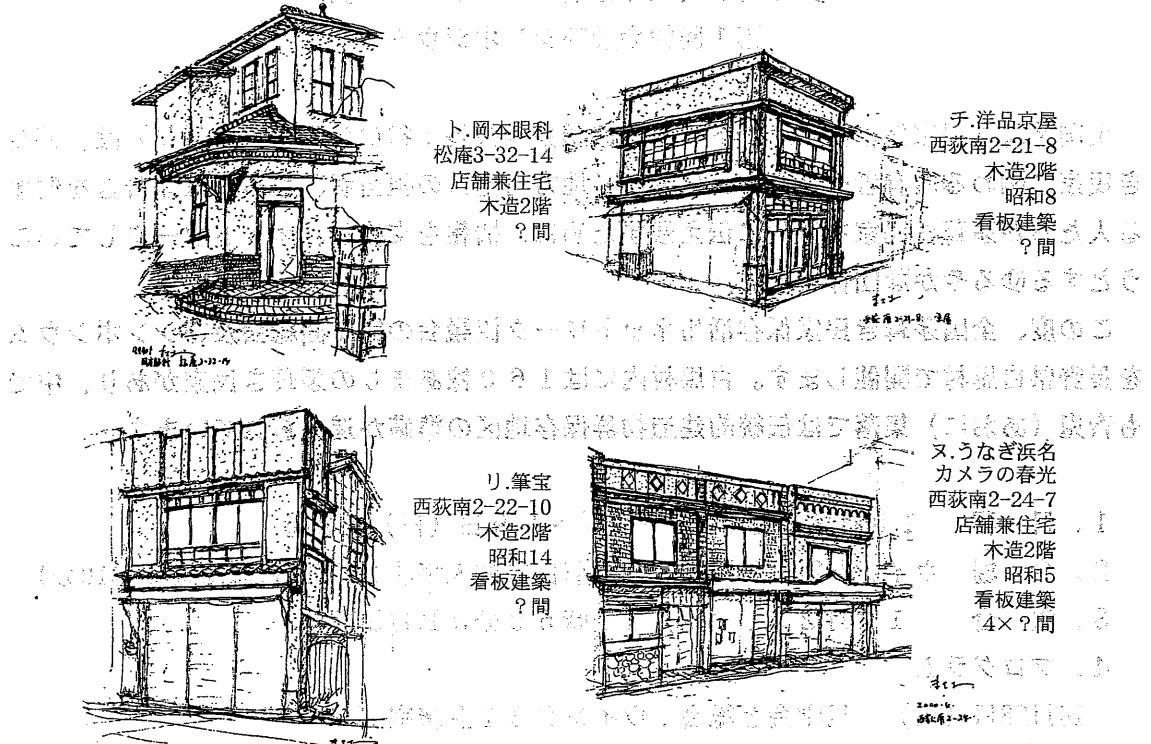
関東大震災以前は畑作を中心とする農耕地か荒れ野であったが震災を契機に状況が急変する。既に開設されていた中央線西荻窪駅の利便性が手伝って人口が急速に増加し始め、それに伴って商店が立ち並んで来たと見られる。このことは調査した商店の建築年代と符合することからも裏付けられる。とりわけ建築年代が昭和2年から10年位に集中しているのは昭和2年の区画整理が深く関係していると見られる。

商店の形状は出桁建築と看板建築の2種類になる。看板建築の外壁材は銅板と左官洗い出しの2種類がある。左官洗い出しに独特の意匠が施されているのも特徴である。

全般的に震災後区画整理が行われ、それに伴って看板建築や出桁建築が造られていく経緯とこの地区も同様と見られる。

§ 2 以下に地図と合わせて戸別に紹介します





出桁建築

商家に見受けられる。

軒先廻りに特徴がある。

慶長年間(1596~1615、江戸時代)

に京都の商家で流行し始めたといわれている。

(伊藤・じい「商家は生ききた」)

がんばん

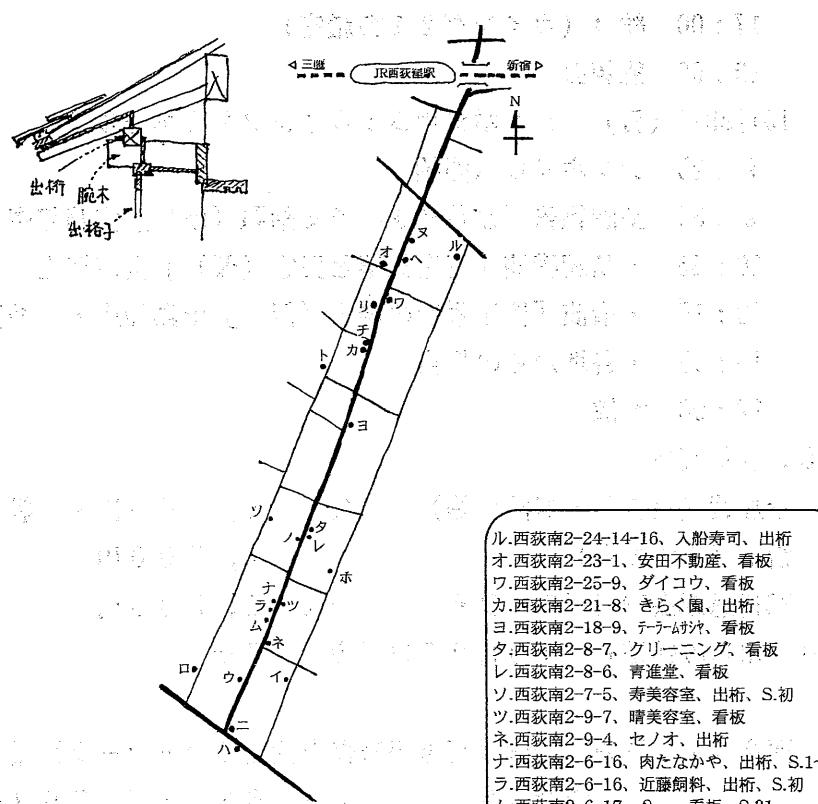
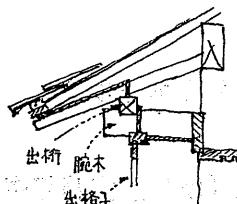
看板建築

商家に見受けられる。正面の梁に特徴がある。出桁建築と異なり軒先にはほとんど出していない。

関東大震災(大正12年)の後

つくられて、昭和初め頃まで

全盛となる。



- ル.西荻南2-24-14-16、入船寿司、出桁
- オ.西荻南2-23-1、安田不動産、看板
- ワ.西荻南2-25-9、ダイコウ、看板
- カ.西荻南2-21-8、きらく園、出桁
- ヨ.西荻南2-18-9、テラモジ、看板
- タ.西荻南2-8-7、クリーニング、看板
- レ.西荻南2-8-6、青進堂、看板
- ソ.西荻南2-7-5、寿美容室、出桁、S.初
- ツ.西荻南2-9-7、晴美容室、看板
- ネ.西荻南2-9-4、セノオ、出桁
- ナ.西荻南2-6-16、肉たなかや、出桁、S.ナ
- ラ.西荻南2-6-16、近藤飼料、出桁、S.初
- ム.西荻南2-6-17、？、看板、S.31
- ウ.西荻南2-6-20、？、出桁、S.7~8
- ノ.西荻南2-7-12、まつばや、看板

全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会

第1回総会及びシンポジウム

全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会（会長：谷口尚・白川村村長）は、茅葺き民家に関わる所有者や技術者、研究者、地方自治体の担当者、さらには茅葺きを愛する人たちが茅葺き民家を次代に伝え残すために、情報を交換し、ネットワークしていくこうとするゆるやかな団体です。

この度、全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会の第1回総会及びシンポジウムを長野県白馬村で開催します。白馬村内には160棟あまりの茅葺き民家があり、中でも青鬼（あおに）集落では伝統的建造物群保存地区の準備が進められています。

1. 日 程 10月28日（土）14時～29日（日）12時

2. 会 場 ウイング21（長野県北安曇郡白馬村大字北城2066/白馬駅より歩10分）

3. 集 合 10月28日（土）13時50分JR白馬駅前

4. プログラム

10月28日（土） 見学会と総会：ウイング21会議室

14:00 バスで見学会へ出発（青鬼集落、茅葺き民家、神明社等を見学）

17:00 総会（ウイング21会議室）

19:00 懇親会

10月29日（日） シンポジウム：ウイング21ホール

9:20 シンポジウム開始

9:30 基調報告「茅葺きをめぐる話題（仮）」安藤邦廣・筑波大学教授

10:45 ・基調講演「青鬼集落と民家（仮）」宮澤智士・長岡造形大学教授

10:15 ・講演「棚田景観の魅力（仮）」中島峰広・早稲田大学教授

10:45 ・各地からの報告

12:00 解散

5. 参加費等

参加費（資料代・保険代等） 会員 1,000円・一般 2,000円

宿泊（1泊朝食） 4,500円

28日懇親会費（料理・飲物） 一人 4,500円

6. 申込み締切り 10月20日（金）17時

問合せ・申込み 全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会事務局

電話03-3214-2631・FAX03-3214-2633

(財)日本ナショナルトラスト内〔担当：米山・山本・平賀〕

*申込み用紙をご請求下さい

急告！

8月19日から21日までの第7回大平建築塾の後、23日の早晩、下紙屋から出火、深見荘、土蔵、前沢荘の4棟が全焼した。出火の原因は不明。

23日の朝4時半頃、釣りに来ていた夫婦が火災を発見し、ケイタイで通報しようとしたが掛からず、からまつ屋の公衆電話で消防に通報、1時間後に消防隊が到着したが、既に4棟は全焼していた。発見時は深見荘はまだ類焼していなかったという。急遽、羽場崎さん、桜井さんが駆け付けた。火元は下紙屋の南側、風呂釜と諸説あったが、火元・出火の原因は不明と消防が発表した。

その後、24日に学校関係団体の使用を10月に予定した下見のグループが下紙屋を使用したことが判明した。

建築塾の全体会議で、大平の保存再生を永続的軌道に乗せるため、久しく開催されていない「大平保存再生協議会」を再開する要望書を飯田市長宛に提出することになっていたが、この火災で事態は緊迫した。

よって、31日の夕刻、吉田と斎藤は飯田に赴き、翌9月1日、午前中に火災現場を見聞し、桜井さんと意見交換し、午後2時、市役所で松村部長、山下課長の立会いで田中市長に「要望書」を提出し、管理態勢を強化して、永続的な保存再生の道を拓くためには、NPOを造るべきではないか、という提案を口頭で行なった。生活文化同人でも、これに関する論議をまとめたい。吉田記





要望書

大平宿は、平成二年から三年度にわたり、飯田市の「ふるさとづくり特別対策事業」の実施によって、相当多数の民家の保存改修が行われた。このことは大平の住民が集団移住して以来、その歴史的集落を保存し、生活原体験の場として公開してきた、大平保存再生運動にとって、まさに喜びます。

しかし、その後は「事終れり」といふ如き状態あります。

のまゝ、現在に至つてあります。「大平保存再生協議会」は全く開催されることはなく、沿河、状況も永続的な管理運用を図ることなく、従前のままで推移してきています。前記協議会の開催をおよそ再三の要望も無視されてきています。

一か月に、去る八月二三日早朝、原因不明の大火が発生し、四棟の建物が焼失（内三棟はふるさとづくり特別対策事業実施のもの）するに至りました。まさに痛惜の極みであります。事件は運きに失ったというふうにありますから、

緊急に「大平保存再生協議会」を開催し、今後より管理運用体制を根本的に強化することを議すべきであると考えます。

右につき、要望を行ひます。

平成十三年九月一日

大平保存再生協議会
理事 吉田桂二

廿七回大平建築希望参加者一回



飯田市長
田中秀典様

撮影：斎藤彰



日本の中の外国

江原 幸壹

皆さん、最近、東京の大久保に来たことはありますか？

どのような印象を受けましたでしょうか？

現在わたしの住んでいる大久保では外国人を多く見かけます。区別はつきませんが、旅行者と生活者の両方がいます。特にリトル・コリアと言われるほど韓国人が多くなってきました。彼らは日本の入口として大久保に来て、しばらく滞在し、生活の手段と旅先の情報を得ます。

また、雑誌に紹介されるほど、この地域にエスニック・レストランが集中しています。アジアのみならず北アフリカや南米のレストランもあり、70店舗以上がひしめいています。

このようなまちで8年ほど前に「外国人とともに住む新宿区まちづくり懇談会（共住懇）」が立ち上りました。土地柄のせいもあり、外国人の人権問題に関心のあった人達が、外国人の権利保護と、新宿区民と外国人との間の問題解決のために、動向調査や会合を開いたりしています。

私が大久保に引越して来たのは5年前ですが、しばらくの間、まちづくりに参加するきっかけがつかめずにいました。たまたま、阪神・淡路大震災のときに現地に印刷機を担いで乗り込み、『テイリーニーズ』を毎日発行していたという元気なおばちゃんに誘われ、『おおくぼ』という情報紙の取材・編集を手伝うことになりました。この情報紙は前出の「共住懇」のメンバーが中心となって発行していますが、その趣旨は、大久保・百人町の歴史や文化を掘り起こし、自分たちが暮らすまちを見直すことと、このまちにどんな人が生活しているかを紹介し、ニューカマーと長年暮らしている住民との間の橋渡しをすることです。

私はまちの職人の聞き取りを記事にしていますが、少し前に廃業したとか、旅立たれたとかいうことが多く、ご多聞に漏れず、厳しい現実を垣間見ます。

また、取材や商店街の会合を通して、住民の悲喜交の思いを知ることができます。商店街では、古くからの商店が減って、代わりにチェーン店とエスニック・レストランが多くなり、組合の加入者が減少し、商店街としての活動がしにくくなっています。しかも、不動産屋や家具屋ではお客様の7割が外国人というところも多く、痛し痒しの状態です。そこで、この商店街の若手は、土地柄を活かし、エスニック・フェスティバルを開催しようという構想があるのですが、長老や町内会などの反発もあり、実現には至っていません。最近は、韓国人との会合をもち、文化の違いを述べ合い、お互いに理解していくこうという努力をしています。韓国はこんなに近い存在ですが、商習慣の違いが顕著で、かつては相手の態度に憤慨することがしばしばあったそうです。

先日、このまちを舞台（新宿区）に「多文化探検隊」というイベントがありました。ある知事の「三人囃子」発言に反発し、多文化の共生を訴えての企画で、まち探検や交流会が行われました。「共住懇」では大久保のエスニック・レストランを紹介した『おいしい“まち”ガイド』を発行していますが、そのイベントの一行事として、このガイドを片手に散策するツアーに参加しました。このまちがもつ、矛盾・混沌・卑猥さ・醜態・猥雑さなどの楽しい底力を再認識しました。この多様性が新たなエネルギーを創出しています。

「多文化探検隊」では、防災訓練というまじめな行事もありました。非常時に外国人がどこで情報を入手できるか、外国語が通じる医療機関があるのかなどの問題があります。非常時は日本人も外国人も区別はないのですが、平常時から外国人が騒擾を起こす恐れがあると触れ込み、自衛隊の出動を検討するより、災害弱者に対して日頃から住民と協力し、準備しておく方が先決です。特に新宿区の場合、昼間人口が多く、医療機関や消防関係の不足、情報の混乱が予想されるので、なおさらNPOとの連携が不可欠です。「共住懇」でも今後防災のまちづくりがテーマになってきます。

以上つらつらと書いてきましたが、「日本の中の外国」に触れられる大久保に興味を持たれた方は以下のURLにアクセスしてみて下さい。

<http://www.root.or.jp/kyojukon/>

共住懇

<http://www.sanpal.co.jp/arabaki/cont/okubo/okubo3.html>

情報紙『おおくぼ』

<http://www.root.or.jp/kyojukon/map-lead.html>

『おいしい“まち”ガイド』

<http://www.geocities.co.jp/WallStreet/2963/syoutengai.html>

大久保商店街

新刊連絡



多文化コミュニケーション情報紙『おおくぼ』

『おいしい“まち”ガイド』

リレー連載第10回は勝見紀子さんです。乞うご期待。

同人紹介 赤桐雅子

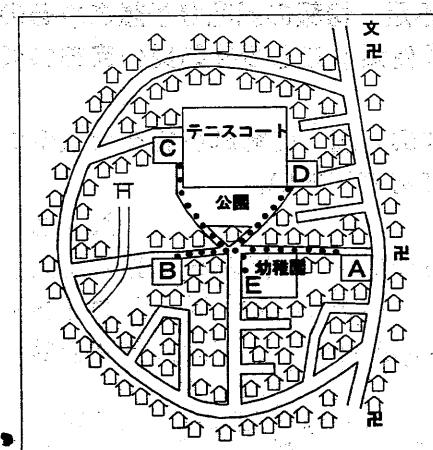
「年を取っても自分の町に暮らし続けられる」「周りの住人がそれを当然のこととして受け入れる」…そんな町くらいできないのだろうか。というのは大学生の時からのテーマです。

* *

自宅に一人で暮らすことは無理になってしまっても、小さなエリアの中に、段階に応じた小さなケア付き住宅があつて、自分の町に暮らし続けられるようにする。住宅内での生活に完結せずに、近くの通所施設に安全な道を通って通り、周囲の住人と自然な交流を持ち続けられ、逆に周りの住人の意識も変えていくような仕組みがある。

他の住人が普段通っているのと同じ道を通り、そこに通う途中では、自然な交流がおこり、ひなたぼうとする場所もある。施設の中の廊下をグルグル歩いたりティルームで所在なげに座っているより、友達に会ったり散歩したり外の空気も吸いたいと思うでしょう！？そんな仕組みがつくれないだろうか。

私の育った実家の近く、神奈川県藤沢市南部にある小さなエリアがあります。



現在、B、C、Dは駐車場または空地、Aはアパートと小公園、Eは幼稚園となっています。もしももしも、A～Dにケア付住宅やグループホームがあり、Eがデイサービスやリハビリを含めた地域施設+幼稚園になったら、暮らし続けられ、受け入れられる町ができるのです！？

この場所にはスバラシ周辺環境・建築条件が揃っています。

1. 現状のままで ● ● ● には車が入れず、公園も含めて、安全ゾーンが既存住宅地の間にできあがっている。しかも、A～Eの各所には外側から車でアプローチできる。
2. 公園・神社・幼稚園・寺といった地域資源がに集まっている。
3. 高齢者率は市内一。長く愛着を持って住んでいる人が多い。
4. A～Eをゲートとすれば、安全ゾーンの外側に出ようとする人に注意を促すことができる（徘徊老人などにも対応！）

年寄りを周りの住人が自然に受け入れて交流の進む…そんなエリアが、ここならできるような気がしません！？

* *

そんなテーマを心に思いつつ、建築の社会的な役割を考えつつ、建築設計の面白さ、ものづくりの面白さや様々な人とのかかわりを楽しみつつ、建築設計事務所に勤務して、昨年は元同僚と建築設計事務所を設立し、1年がたちました。充実した毎日の中、平和に(?)住宅設計や住宅地計画、店舗内装などの仕事をしています。

* *

ところがこの秋「野望！？」が生まれましたあ！！上記のエリア内Eの幼稚園が1年半後に閉園するという情報を入手。と同時にAのアパートが消えて売地になっているのを見つけてしまったのです！

うーん すわ私の出番か！？と思うも、まずはこの特殊でまたとないエリア条件をうまくいかして福祉事業を運営したい！という人達を探さなければ！！！（誰かいませんか！？）

私はほとんどこの場所への思い入れだけから、事業計画のたたき台をつくってみよう、と細々と福祉事業への助成や家賃補助額を調べて…うーんアパート経営に較べて採算は…、などと始めた次第です。経験無しの手探り状態ですが。（誰か助けて下さい！）

慌てものの自己紹介ですが…こんな近況です。どうぞよろしくおねがいします。akagiri@lilac.plala.or.jp

掲示板

(株) 日放ツーリストの企画で、下記の旅行が計画されています。参加したい方は吉田桂二までご連絡ください。12名から15名まで。早い者勝ち。

吉田桂二先生と行く南イタリアの街めぐり

2001年

2月7日（水）東京成田発12:30AZ789

2月10日（土）フェラーティナ滞在

ミラノ着 18:00

付近の小さい街を巡る

ミラノ発 20:05AZ1637

2月11日（日）フェラーティナ

バーリ着 21:40

ラ・ヴェッロ

マルティーナ・フランカ着

アマルフィ

2月8日（木）マルティーナ・フランカ滞在

付近の小さい街を巡る

2月12日（月）ナポリ発09:00AZ1822

2月9日（金）マルティーナ・フランカ着 パレルモ着

マテーラ

カラシベッタ

フェラーティナ

エンナ

2月13日（火）エンナ滞在

2月14日（水）エンナ

シラクーサ

タオルミーナ

2月15日（木）タオルミーナ滞在

2月16日（金）タオルミーナ

カターニャ発 10:05

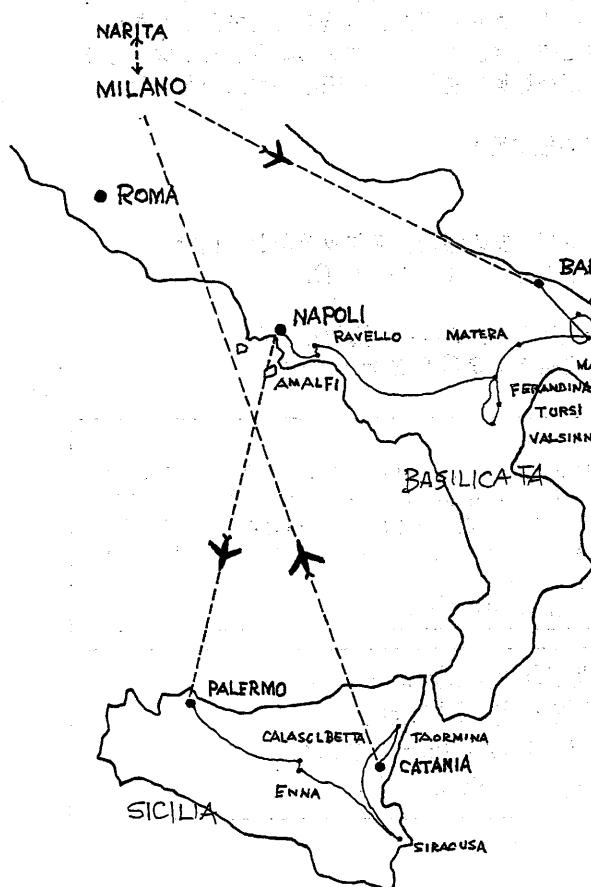
AZ1716

ミラノ着 12:00

ミラノ発 14:20AZ788

2月17日（土）東京成田着 10:05

約35万円の見込み



■2000年第5回「語る会」のお知らせ

日 時 11月1日(水) 午後6時30分から

場 所 代官山「無垢里」語る人 千葉弘幸

テマ 森からすまいを考える

この「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います(当然、酒代などは自前、割り勘になります)。

- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。

「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■次回世話人会のお知らせ

日 時 10月27日(金) 午後6時30分から

場 所 飯田橋 もてなし

- ・生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です(ただし、酒代などは自腹)。参加を希望される方は事前に事務局までご連絡ください。

■2000年度第5回目世話人会報告 (00.08.25 於: 飯田橋 もてなし)

1. 大平建築塾の総括を兼ねた世話人会であり、事務局からの総括報告がありました。今回の会報誌上(P13)にある通り、大平宿の火災からわずか2日後のことであったため、その対応および今後の方向性について主に協議されました。同人の動きとしては、とりあえず、9月の初旬に、吉田桂二さんに現地見舞いを兼ねて飯田市長さんをたずねていただくこととなりました。
2. 第4回目定例会の内容が決まりました(表紙参照)。

■会報編集局より

- ・会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください(Eメール可)。
- ・同人会員の活動等、情報を寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆編集後記

- ・このところ、すっかり秋らしくなって、オリンピックも終わっちゃいましたね。元スポーツマン(得意技バドミントン、ただし、25年前まで)の私は、見るのも好きなのですが、晩酌をしながら女子マラソンのダイジェスト版を見て感じました。明るく振舞うこの子は、信じられないような努力をしたんだろうなと。よし、俺もと少し元気をもらいましたが、できるかな? (まつもと)

会報編集局 〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-201 松本昌義

TEL/FAX 047-332-4413 Eメール mmatomo@d1.dion.ne.jp

2000年度事務局: 〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp

生活文化

S·E·I·K·A·T·U·B·U·N·N·K·A

生活文化同人会報 2000年第6号 No.46

もくじ

- ・総会・忘年会のお知らせ
- ・第4回定期例会報告と参加者の感想
- ・11月定期例会の報告
- ・第23回全国町並みゼミ日南大会報告
- ・同人紹介
- ・事務局報告

1
2
7
9
13
14

生活文化同人総会・大忘年会のお知らせ

拝啓

寒さが身にしみる季節になりました。皆様、お忙しくしていることと思います。さて、早いもので来月は忘年会シーズンが到来いたします。つきましては皆様御多忙とは存じますが、お誘い合わせのうえ、御参加ください。

日時：12月22日（金） PM18：30～

場所：地酒とワイン メランジュ（2階貸切）

東京都港区虎の門3-8-3 TEL/FAX 03-3431-3992

会費：¥5,000（飲み過ぎた場合は現場にて追加）

【案内図】



参加申し込みはお早めに、遅くとも12月15日（金）までには下記連絡先にお伝えください

忘年会幹事：連合設計社市谷建築事務所 岸 未希亞
戎居 連太

T E L 03-3261-8286

横手市立栄小学校について

講師 安藤 邦廣 氏：設計工房 畠
筑波大学教授

10月23日(月)18:30～21:00

池袋芸術劇場小会議室にて

今日の主題は「学校」です。学校の空間や構造、そのプロセス、特に木材の調達や職人との関係づくり、そうしたものに人力致しましたので、そのプロセスを重視しながら話したいと思います。

●学校建築を考えるきっかけ－宇和町小学校●

学生たちにはよく「民家に学べ」と言っています。

今回的小学校でも、民家をつくる中で考えていたことが反映されています。まず、私が学校建築を考えるようになったきっかけをお話しようと思います。今から15年前、木造フォラムの第2回フォラムをやったのが愛媛県宇和町の「宇和町小学校」でした。5,000m²を超す大きな学校で、大正の終りから昭和の始めまで約30年という年月をかけてつくりました。長さ100mを超す巨大な学校が3列程ありましたが、今はすべて建替えられてしまいました。一番古い第二校舎は移築されたものです。二間ある廊下の半分は土間になっていて、私はこれがとても好きです。ただの片廊下のプランが、この土間があることで一変してしまうのです。教室と板の間と土間と外、すべてが外に繋がります。この土間をつくった知恵は本当にすばらしい。恐らく地元の誰かの発想でしょう。文部省の基準はないものですから。本館は昭和になってできた2階建ての擬洋風、柱がとられた形に改良されました。この土間は、入口が各教室に付いていて誰でも喧嘩することなくすぐに外に出られるということです。これは小学校の基本です。今の学校はオープンプランやオープンスペースというものを重視するために、外側はみんな嵌め殺しのガラスで、非常に閉鎖された空間になっています。この「宇和町小学校」では空間そのものが非常に豊かで伸びやかで、子どもの生活の場所というものが感じられました。

そういうことを考えるうちにたまたまヤスがあり、ああいう学校をつくりたいなと思っていました。



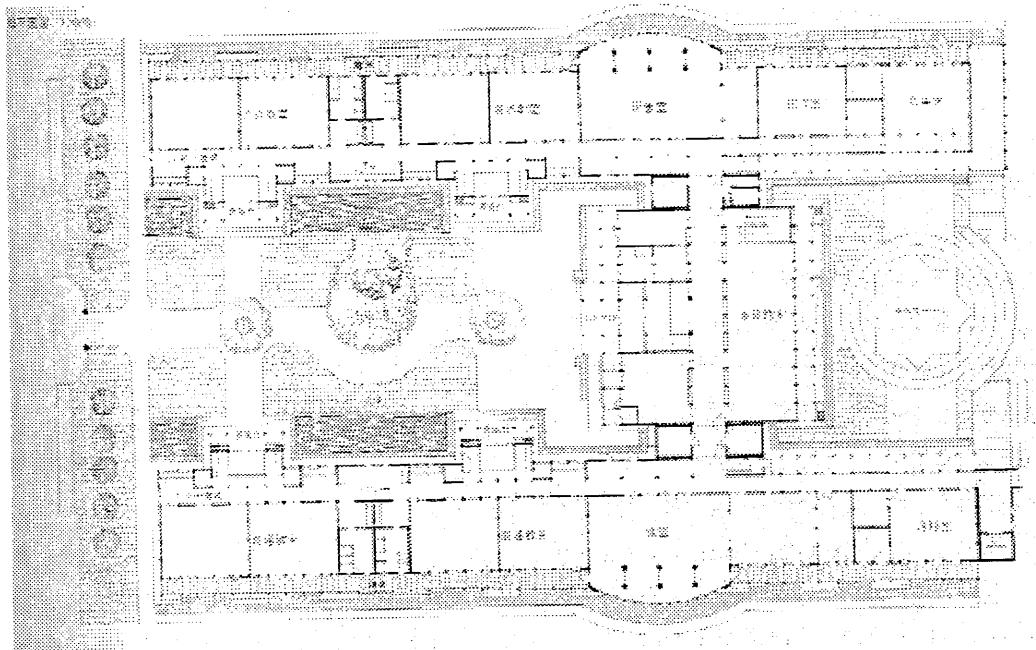
講義中の安藤 邦廣さん

●横手市立栄小学校●

“プロセス”

秋田県横手市の市長と縁があり、家しかついたことのない私に、3,500 m²という木造の小学校をいきなり任されるという幸運に恵まれました。竣工は5年前です。宇和町小学校のような子供たち自身がのがびり感じられる学校が何とかできないかと、この学校を引き受けました。実は私がこの仕事を受ける前に設計はできていたんです。鉄筋の3階建てが建つようなアプローチでした。ところが市長が選挙で代わって、全部やり直しになりました。古い学校がたっていた場所は「和談の森」と呼ばれていた丘です。ここには大きな3本の木があり、何か揉め事があるとそのまわりで皆が話し合いをするという村の由緒ある場所だったのでした。その丘に、昔と同じ平屋の学校の風景を戻してほしいということでした。

アプローチは極めてシンプルにしました。木造の軸組構造の整然とした骨組の中に、何か自由度の高い空間ができるいかと考えました。一学年一クラス、200人足らずの小さな学校です。教室は予備を入れて8つ、形から見れば片廊下ですが、廊下が庭をむいている点が少し違います。二教室に一つの玄関を付けました。冬はスキーや雪での登校もあるという地域ですから、ひとつの昇降口にするとどうなるかは自ずと見えていました。特別教室ゾーン側は社会開放を考えました。学校を、子供たちにも社会にも開くつくりにしました。



横手市立栄小学校 1階平面図

“民家の知恵”

この学校の最も大きな特徴は雁木です。ここをこの学校の最も大事な場所、子供たちの印象に残る空間をつくれないかと考えました。子どもに合わせた低い雁木で、巾はちょうど一間です。こういうのがこの地域の民家の特徴です。「民家に学べ」というのはこういうことです。周りの住宅を見ればすべて答えがあります。雁木は本来、戸建住宅にも必ず付いている雪国の装置なのです。この雁木をこの学校の要にしたいと計画を進めました。雁木にも欠点はあります。その解決法も民家が教えてくれます。高窓

です。そこから自然の光、自然の風を採ります。教室はごく当たり前の4~5間の教室ですが、高窓を付けるために天井は4mとしました。その代わりこの大きなスケルに対して低い雁木を付け、外観や内部からの視覚的な落ち着きを与えています。これでも暗いと思ったので、越し屋根も付けました。天井には障子を嵌めています。光が拡散して非常に柔らかい光が満たされ、とてもうまくいきました。

冬は、雪が降るとほとんど軒まで埋まります。そしてこれが鎌倉のような室になって暖かく寒さを防いでくれました。暖房は夜間電力を利用したソーラー蓄熱した輻射暖房です。ソーラーは外廻りだけアガラスの木製サッシを、また全体的に30mmの杉板を、床にも壁にも屋根にも使っています。コンクリートの校舎と比較すると60%の暖房費で、大変経済的になったと喜んでいます。暖房の立ち上がりも早く、体感気温が非常に良い。実際には17°Cぐらいなのに、子供たちはかえって暑いくらいだといいます。

夏になると子供たちは必ずこの雁木に出てきます。やっぱり一番好きなんですね。別にオーバンスペースをつくったつもりじゃなかったけれど、こういう自由な学習もできますね、という先生もいました。

私は、民家はあらゆる日本の住宅の中で最も日本の文化が蓄積されたものであると思っています。この学校でも、雪国特有の民家のいろんな知恵を、結果的には活かすことができたと思います。

“構造”

雁木のもう一つの効果は耐力壁です。中を全部アーチにしたかったので筋違いを外に出しました。現代的な考えの「筋違い雁木」です。雪下ろしをしなくてすむように、震度7の地震にも2mの雪を載せたまま耐えることを求められました。構造的には非常に厳しい条件でした。雁木は本来環境調節装置であり、戸外の空間ですが、それに構造と耐力を負担させ、内部の間取りを自由にさせました。今まで筋違いを使ったことは無かったのですが、ここでは徹底した筋違いを用いました。5寸×8寸の平角柱に4寸の筋違いを欠損なくタスキに掛けた、完全に圧縮・引っ張りの両方に効く、非常に信頼性の高い筋違いです。構造計算は建設省建築研究所の河合君で、どうやったら安全で、しかも美しくできるかということを、彼と徹底的に議論しました。筋違いは柱と梁の接合部には入れずに、7~8寸程下げたところに当てています。引抜きにはホルダーソーでしっかりとアカーリしました。めり込んで多少傾いても壊れたり破断したりしない。壊れ方として安全なんです。つまり、筋違いが悪いわけじゃない、入れ方が問題なんです。

屋根は母屋構造で垂木なしです。なるべく省力化したいので、4寸角の母屋に三尺ピッチで一寸の板を直接張りました。これで断熱性を上げ、屋根の剛性もとったわけです。

模型も精巧になりました。この模型で構造を確認し、大工さんとのやり取りもスムーズにいきました。木材は軸材と板を合わせて m^2 当たり1.5~1.8m²程度で、私が「板倉の家」をつくる時の3~4割増しという具合です。それは雪国であるための太さだと思います。圧縮で全部もたせようとする設計ですから。チャレンジですね、2mの積雪に絶対耐えてやるという。

“技能伝承”

歩留りを上げるために一尺末口から一尺角をとるという製材をやってもらいました。80%ぐらいになりました。普通は60%ぐらいですから2割方は上げました。非常に手間がかかりましたが資源を有効に使うということで。昔はこうして家をつくってきたわけです。板も天日で半年間乾かしました。

30人の大工が半年間かかって造ったわけですが、この仕事を経験して相当な蓄積になったと思います。つまり技能伝承です。地域の文化を守ること、それは空間をつくればいいだけじゃない。つくる技術、

その使い方を含めた全体、生活や技術の全体が新しい行政によって代わらないといけない。市長が地域の文化を守るために木造をつくってくれといわれたのですから。そういう大きな機会だったんです。これは木の化け物だという人もいます。でも実際に行くと木はとても柔らかいし、森に入ったようです。非常に神聖な気持ちになります。構造的な局限を設計するという気持ちは私にはない。安全でしっかりした構造を大工さんがつくればいい。

ぜひ行って、この中に立って頂きたい。木の力というのが、本当に五感に伝わってくると思います。

●質疑応答●

Q： 遮音の問題はどんな風にお考えですか？

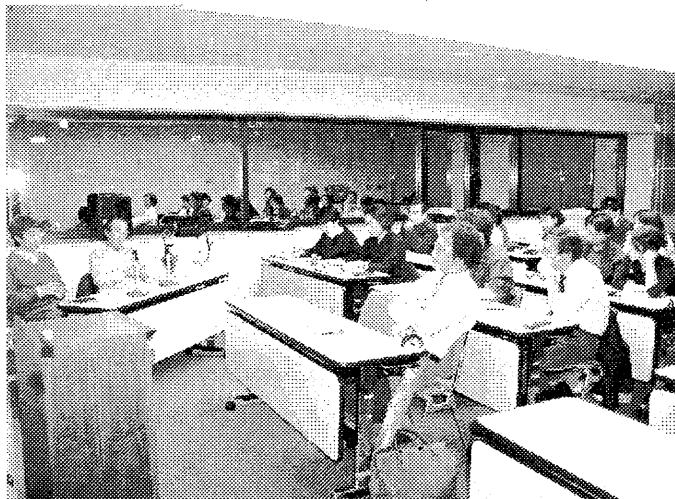
A： 1・2階で用途上 問題が無かったので一寸の捨て床の上に仕上が七分ぐらいです。もし校舎が上下に重なる場合は何か必要でしょう。軽量コンクリートか何か重いものを一旦打ってから根太を転ばして二重にすれば、大部遮音性は上がります。住宅ではそういうことをやっています。

Q： 建築のあり方そのものが既にアーバンを刺激するんだなあと、拝見しながら感じたのですが、教育アーバンのオープン化ということについてもう少しうかがわせてください。

A： はっきり言うとそちらを考える余裕はありませんでした。小さい学校なので、広い空間があれば何とでも自分たちでやるだろうと割り切りました。むしろ子供たちが本当に伸びやかな気持ちになるような空間をつくることに集中ました。学校建築の長澤悟さんに見てもらったんです。もちろん批判もありましたが、その上で、しかし木造というのは不思議な力があるというのも分かりましたと。だからあなたがおっしゃったことに尽きるわけです、私の気持ちは。そうあって欲しい。

Q： 2mの積雪を計算上で成り立てる木造校舎と昔の学校、強度的な比較ではどうでしょうか？

A： 宇和町小学校を耐震診断したんです、移築にあたって。部材断面やつくり方を調べて計算でチェックしたのですが、非常に土壁が厚い。窓があっても腰壁や蟻壁があるので全体としての剛性は非常に高い。ちゃんとつくられた壁の学校は全く今の耐震基準に比べて遜色ないと思います。ただ、横手市の場合はそれに雪が加わるので、計算上は無理です。それじゃなぜ昔の学校は大丈夫だったかというと、雪下ろしをしたからです。住民が守ってきたんです。守ることを前提に柔らかくつくってもいいわけですが、今はそれは認められませんね。



当日の会場、質疑応答の様子
安藤先生の右隣は吉田桂二さん

第4回定例会参加者の感想

学校建築というより、生活の場、家の延長としてのしきが、そこここに発見てきて、親しみのもてる空間に思えました。

季節と共に、時を過ごす子供の姿が目に浮かんだ。

八代 茂子

四季を通じて、私も、子供達と共に机を並べて、すごしてみたいなあと、思いました。地域の自然と人々の事を先生はものすごく研究されたとお話を伺って感じることが出来ました。

林 清子

私も小学校を木造の校舎で過ごしましたが、木のぬくもりや温かさがなんとなく記憶に残っています。その校舎は壊されてしまいましたが、これから先どんどん先生がつくったような学校が増えるといいなと思います。

山口 久美子

先生の真剣さが、声の調子、表情も含め生々しく感じられとても感激しました。教育施設と住宅は全く遠くない施設ではないかと再認識しました。

長谷川 順持

木の力を最大限に引き出そうと真剣に追求する姿勢に感銘しました。木には構造的にも精神的にも数字にはならない力があるとつくづく思いました。

泉市 啓一

僕も目に見えない木のを感じさせられましたと同時にその地方で育ち、受け継がれた文化の偉大さを感じました。そして、その民家の知恵と現代の学校に活かす先生の考え方、技に感銘させられました。

高松 俊秀

「ムクの木の持つ力とその木を無駄なく利用し、子供たちのために作った学校」という印象をフォラムの見学会の時に感じたということを、スライドを見ながら思い出しました。

岡部知子

環境や日本の林業を視野に入れながら木造建築を思うときに、木は国産材、さらに、頗るくばムク材でと考えている私にとって、大きな空間はこうつくるのよと、お手本を見せていただいているような気にさせられた。それにしても、前回の三井所先生しかり、木造に真剣に取り組んでいる人達は、それぞれに方法は違っても同じようなことを言うんだな。耐震性はもちろんだが、例えば地域の職人がつくれるような構法でないといけないとか・・・。そうですよね。

松本昌義

11月定例会 安東木材事務所棟の見学会

岡部知子

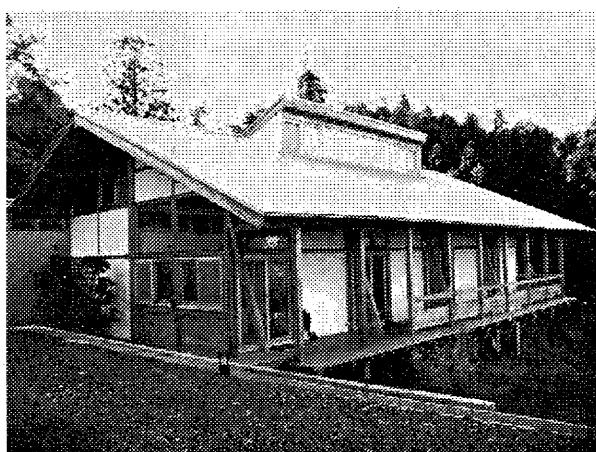
上野発9時30分、特急スーパーひたちに乗車。茨城県といつてももうすぐで福島県、高萩についたのはお昼を少し過ぎて、皆な小旅行気分で食事を。平日の昼間のため、八名の参加者だけだったが、足を延ばしただけの甲斐はあった。

高萩はクジ川に沿った林産地。駅から車で12、3分の、山林を切り開いた羨ましいほど広い製材工場〔14756.77m²〕に目的の建物〔291.71m²〕はあった。

安東木材の事務所と応接室、そして従業員の休憩所のためのものが二棟並行して建っている。切妻と片流れの屋根をそれぞれの棟に掛け、玄関でつないだ構成による外観は明快かつ美しい。二階建てでなく平屋というのも土地の広さの許すところ。玄関とデッキの取り方もなかなか普通では出来ない贅沢さだ。

今の建物は、杉の4寸角の柱を頑張って使っても壁には合板を貼るのが一般的だが、そこを自然素材のみで作るにはどうするか、そして国産材の見本になるような、展示棟を兼ねた事務所にしたいという意向を受けて、構造材から仕上げ材までヒバ、桧、杉、栗、松などを適所に使用したという。

また、石油製品等は使いたくないと、断熱材は一切不使用（ウレタンの断熱材は10数年でペちゃんこになるという）。断熱性への対応としては、4寸角の柱に厚板を落としみ、珪藻土を主原料としてワラスサや炭の粉等を混ぜ込み、乾くと日干し煉瓦のようになるものを壁、床、屋根に塗り込んで板の隙間を塞ぎ、適切な断熱性を得られるようにしたそうだ。屋根にもそれが塗られており、おまけに垂木が二重に入れられている。そしてその間を空気が流れるように、つまり通気層が設けられている。ちなみに、切妻屋根で通気層の熱気を抜くためには棟換



安東木材店事務所棟の外観

気の工夫が必要と思われるが、特別な工夫をしなくても、風下側の軒先から負圧によって換気できるとのこと。今年五月の竣工で、夏の暑い時期に高温の風が流れしていくのは確認できたという。

材木屋の材料は、直線のものが多い。そこにやわらかさと変化を織り込むために二棟ともに曲線の壁がある。板を堅張りにしてアールを付けるのはサネをゆるく加工すれば出来ることで、自分でも経験のあるやり方だが、このように板の長手方向にアールをつけるのは施工も技術が必要で大変だと思う。それも厚さが30ミリもあるとなるとなおさらのことだ。力強い180×300の杉の梁とやわらかな曲線の一面の壁が妙にマッチして印象的だった。

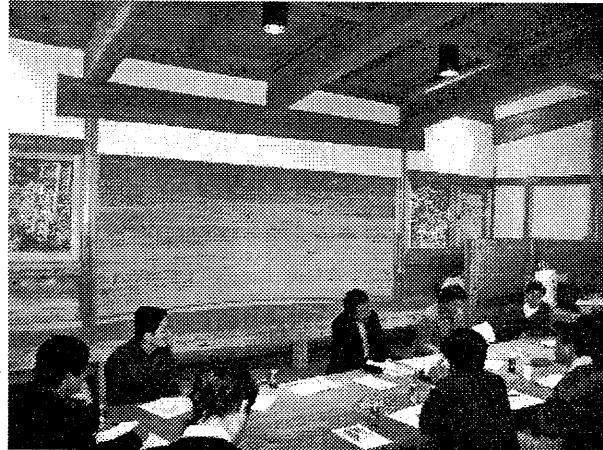
すばらしい事務所棟ではあったが、予算の限られた住宅をつくるときに、関わった皆が笑ってやれるようになるためには、これをどう展開したらよいのかということがこれから課題かなと思いながら事務所を後にした。

(追記)

この後、近くで保存修理中の茅葺き民家（立派な長屋門のある大きな民家であり、母屋はほぼ骨だけの状態だった）を見学。さらに車に便乗して取手近辺まで移動、事務所棟同様のコンセプトとつくりによる住宅「板倉の家」を現場見学会の前日にも関わらず見せていただいた。

洋風の建売住宅が立ち並ぶ町並みの中にあっては、ひときわ異風に見える、木造らしい外観に複雑な思いをいただきながら、時はすでに夕刻。お茶休憩をした後に現地解散の運びとなった。

(追記 松本昌義)



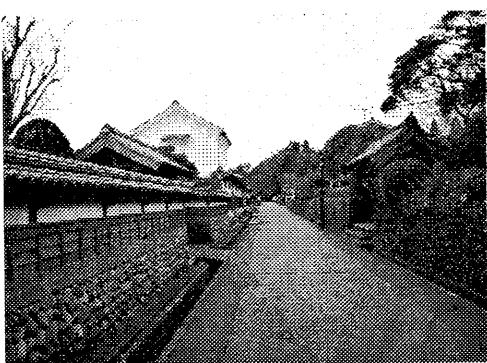
事務所棟の内部（従業員休憩所）で安藤先生と対馬さんから建物の説明を受けた。写真正面に、まるで曲げわっぱのようにアールをつけた板壁が見える

第23回全国町並みゼミ・日南大会 報告

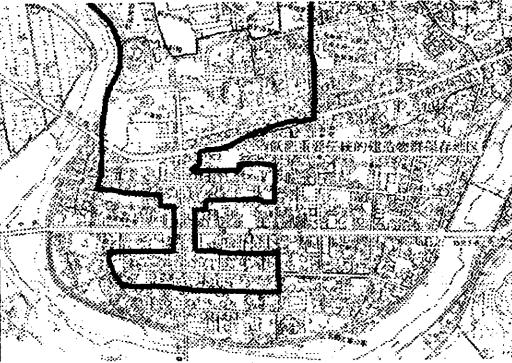
報告者 中村文美

第23回全国町並みゼミが、2000年10月6・7・8日の3日間宮崎県日南市飫肥・油津で開催されました。飫肥は九州で初めて重伝建に選定され、町並み保存の20年の歴史を持つ地域です。今回のゼミは「文化財保護法50年——伝えよう文化財の町並み」をテーマとし、町並み保存運動を進める住民・市民と、町並み保存に関心をもつ行政関係者・研究者・学生が沖縄や北海道をはじめ全国から600人が参加しました。今回、私が学生スタッフとして出席した中から主に分科会を中心に報告をさせて頂こうと思います。

第1日目は、二つのテーマで記念シンポジウムが行われた。前半では「伝えよう！住民が守り育てる町並みの文化」というテーマで、後半は角館町・犬山町・日南町の三首長が「育てよう！歴史を伝えるまちづくりの心」を行政責任者の立場からのまちづくりを語り合った。夕方の懇親会では“おび天”、“鮪の兜焼”など海の幸豊富な郷土料理を楽しみ、日頃の苦労と奮闘を交流し懇親を図った。なにしろ“芋焼酎”が最高においしい！あまりの“芋の香りのやさしさ”に、ついいつ飲み過ぎてしまったのは、私だけではないはず・・・



↑飫肥のまちなみ

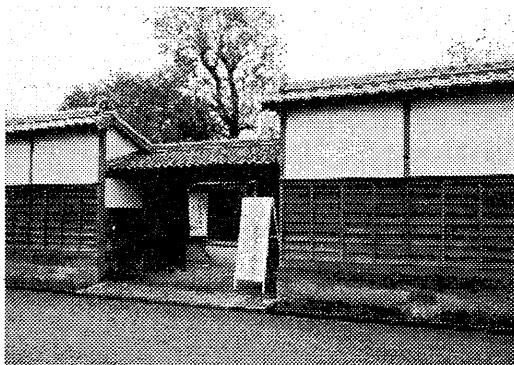


↑飫肥の地図

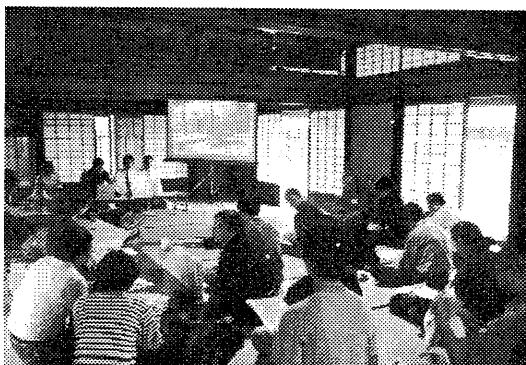
第2日目午前中、飫肥・油津見学。午後は各分科会が行われた。

- 第1分科会 「土木遺産とまちづくり」…日南市内酒屋地区棚田による村おこしへ訪問
 - 第2分科会 「文化財建造物の活用」…油津赤レンガ館をはじめ各地の事例報告
 - 第3分科会 「民家の再生」…内容は下記
 - 第4分科会 「商店街活性化と歴史的町並み」…中心市街地における商店街の意義共有の確認
 - 第5分科会 「伝建制度と町並み保存憲章」…“歴史的町並み・集落保存憲章”について
 - 第6分科会 「子どもまちなみ探検隊—未来へのゆずりはー」…路地アート・カルタ作り・劇
 - 第7分科会 「町並みと観光」…住民自身による訪問者との異文化交流の事例報告
 - 第8分科会 「次代に引き継ぐ景観づくり」…語る場づくり語り口を広げ深めることが重要
- 各分科会の場所は旧安藤正春家や、振徳堂、国際交流センター小村記念館、本町郷土芸能館などが利用された。

第3分科会「民家の再生」は、来年4月に一般公開されるという旧安藤正春家住宅を特別公開していただき、その座敷にて行われた。復旧工事が終了したばかりの、旧安藤正春家住宅は明治40年頃に建てられた商家で、玄関土間や水周りに凝った陶磁器が使われていたり、数奇屋風の意匠が特徴的だったり、また当時の町屋の配置計画を良く残しており参加者の興味をひいていた。今後、一般公開に向けて庭の整備がされていく。では、分科会で行われた4つの事例報告を紹介する。



↑旧安藤家住宅門



↑旧安藤家住宅内分科会の様子。右上に岡部知子さん！

コーディネーター： 土田充義（鹿児島大学教授）

サブコーディネーター：八木雅夫（明石高専助教授）

1. 旧安藤正春家の復旧工事について

<報告者：川原さん（宮崎県建築士会 日南支部長）／山本さん（設計管理）／田代さん（施工）>

*4年間、人が生活しておらず部材の傷みが進行していたが、築100年以上ということを考えると予想以上ではなかった。実測、解体、洗浄をしたあと、一部の部材を補充し組み立てた。木材は7割程度残すことが出来た。

*飫肥地区の旧安藤家一帯は準防火地域ではあったが、見えない部分に耐火材を組み込む、消火器・バケツの設置、カーテンの使用禁止、などにより特例として木造であることが許可された。

*耐震問題については、壁を増やす、筋交いを入れることで解決した。

*修理方針として補充された部材に対しては、本来の部材と同じ色にまで古色付けをするのではなく、一段階薄い色を採用した。

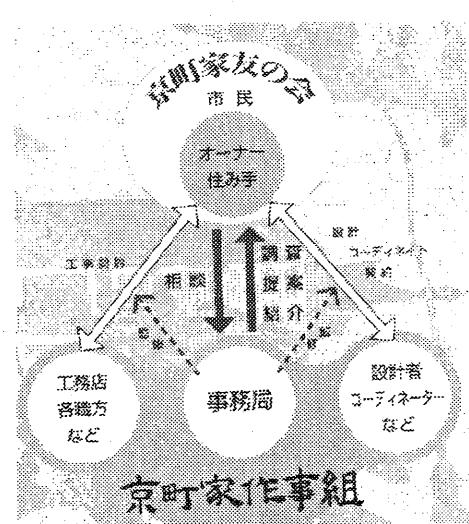
*初期の意匠を継続するという目的は達成されたと考える。

2. 京町家の保全再生

<報告者：京極さん（京町家再生研究会）>

*事例紹介…3世代同居の家族が、住み続けるため職住併用として改修／空き家であった京町屋を賃借し、アトリエ兼異業種交流サロンとして利用している事例／外観・構造材はそのまま残してあるがバリアフリー仕様に変えデイサービスセンターとして活用／SOHO

- として利用／大規模な町屋の店の間部分のみを賃借し、ケーキハウスとして利用……など
- * 市民活動団体ネットワークの紹介…「京町屋再生研究会」は1992年7月に発足し、周知活動のほか、左官屋・屋根屋・大工などの職人を集めて小学校で体験実習をしている／「京町家作事組」は、1999年4月に発足した加入39社16団体で構成されている。啓蒙活動の他、修復・改修に関する相談・調査・提案を初めとして木造建築に熟達した技術者・職人や設計士を紹介し、工事費の査定や契約に関する助言および工事の監修を行う。



↑京町屋作事組の案内から



↑分科会の様子・玄関より

3. 台湾地震後の歴史的建造物の復興について

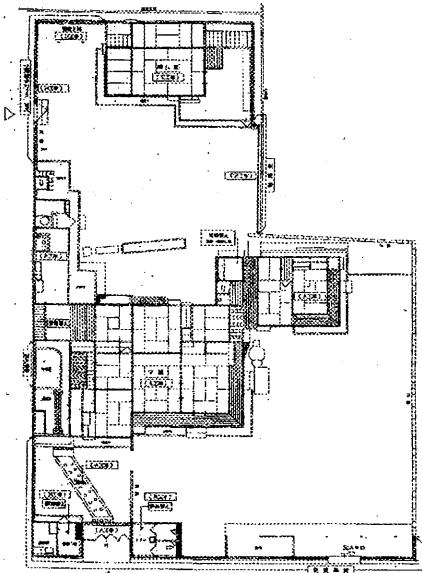
<報告者：徐副教授（華梵大学建築系）／劉講師（雲林科技大学）／葉さん（通訳）>

- * 災害をうけ全壊となった建造物の中には、日本占領時代に建てられたものが多くある。
- * 台湾建築の災害時における壊れ方の特徴／①壁が崩れても軸部・屋根とは別構造のため崩れない／②大黒柱中心に軸部が繋がっているので、倒れる時は全壊
- * 集集駅の修復工事報告
 - ・震源地である町の駅ということと、日本の占領時代に建てられたものという2つの「負・弱点的意味」を今後の町の活性化に活かそうということで、耐震計画をたてた。
 - ・文化財ではない建物なので、住民・メディア達の運動にかかっている。
 - ・今後も町の広場として重要な駅になるであろう。
- * 斗六町
 - ・メディアなどでも注目をあびていなかった町なので文化財の修理は順調ではない。
 - ・町並みを守ろうとしても家主の考えが新築に向いている。
 - ・今は崩壊した建造物の材を収集する作業から始めている。
 - ・指定されていない建造物の保護をすることが目標。
- * 震災後、今年1月に指定物件を増やすため文化資産保存法が改正された。

4. 居住環境改善のための方策としての定着をめざして

<報告者：八木雅夫さん（民家・まちなみ再生ネットワーク兵庫）>

- * 民家再生ブームの中で、民家再生の位置づけ・方向性の確認が必要
- * 民家の脆さを知る…兵庫県南部地震では、小さな被害でも人々は公費解体を選択した。残せという周りの声は重荷になるという中で、再生は現実的な方法として住み手に伝わっているかという構造的よりも精神的問題の難しさを考えさせられた。地震があるたびに「古い建物は弱い」といわれる。メディアがこの反対意見を広めるべき。「古民居家も再生できる」ということを広めよう。
- * 納得費用・快適性・安全性という民家再生の設定条件において、いかに住み手や所有者、そして地域を満足させるか。
- * 公的支援には限界があり、競争的にもなってしまう。公的支援に頼るだけではない方策が必要なのではないか。



↑旧安藤家平面図



↑旧安藤家・玄関より通り土間風の通路

どの事例からも、やはり住みつづけながら歴史的ストックを生活者の日常的意識のこだわりとして大切にしていくことの重要性が訴えられました。特に台湾の事例紹介では、戦争と地震の被害に怯んでいるだけではなく、しっかりと受け止め、それに立ち向かっていく「まちづくり強さ」を感じました。地域、国によって様々な特色を持つからこそ、町並みづくり・民家再生に対しての様々な苦闘はつきまといますが、逆にそれが住み手の“暮らしのパワーや楽しみ”になっている事も確かなようです。各地の報告からそれを確認できたのではないでどうか。

来年の第24回全国町並みゼミの開催地は…“北海道小樽”です。

同人紹介

西山 珠美

(にしやま ますみ)

福井県在住の西山珠美(旧姓:堀川)です。近頃では、年に一度の大平にも参加出来ない有様で、まさにユーレイ会員、「誰?」と思われる方も少なくないでしょう。

同人との出会いは、もうかれこれ14年前。(おお、月日の流れはオソロシイ・・・。)そのころ、私は東京におり、女子大を卒業したばかりで某設計事務所に勤めていました。一方、私の父は福井で、ある住宅会社を任されており、仕事の上で吉田先生にお世話にな

っていました。それでこの会の存在を知り、「一度参加してみれば?」と勧めたのです。

吉田先生の名前すら知らない私でしたが、その時はなぜだか、中野の狭くて古くさい、傾きかかったような居酒屋の2階に、のこと一人で出かけて行ったのです。そこは、今まで足を踏み入れたことのないような雰囲気の店でした。当時の私としては、とても勇気のいることでしたが、そこに集まる個性的で(!!?)エネルギーに満ちあふれた人々に、かなりのカルチャーショックを受け、なんだか訳の分からない力に圧倒されて、毎回足を運ぶようになったのでした。

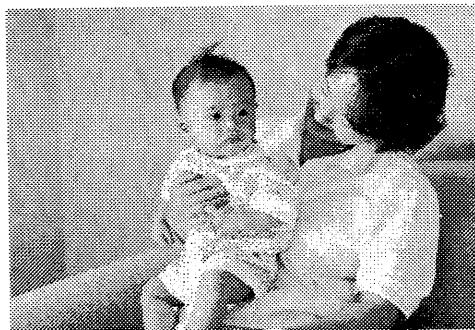
その後、父は自分で『住まい工房』という工務店を旗揚げし、楽しげにイソイソと仕事をやりだしました。最初のうちは、それを横目で眺めていたのですが、吉田先生にお尻をたたかれ福井に戻り、父と一緒に仕事をするようになって現在に至るというわけです。

『生活文化同人』とは少し違いますが、福井にも『ふくい・木と建築の会』というものがあります。木や建築を愛する人々の集まりなのですが、実に様々な人がいます。現在は、活動はさほど活発ではありませんが、細く、長く続いています。このような、人と人との集まりはある意味で自分のエネルギーの源であり、また発散の場です。細くとも大切にしていきたいと思っています。

『住まい工房』では、木造の住宅を中心とした設計施工を行っています。10人程度の小さな会社です。最近では、同人のメンバーでもある松井郁夫氏設計の住宅の施工を請け負うということもありましたが、これからも、色々な形で皆さんとつながっていけたらと思います。

私事では、今年の春に男の子を出産しました。子供を授かって初めて経験することはとても多く、それは大変しんどいことでもありますが、とても新鮮で、刺激的で、そしてとてもなく幸福なものです。日々のニュースや物事に対する受け止め方や考え方、ある部分変わったような気がします。母親としての気持ちが、少しばかり理解できるようになったことが嬉しく、これから仕事が益々楽しくなりそうです。

今、育児休暇を終え仕事に復帰しましたが、時間との戦いです。しばらくは、思うように仕事ができないことが悩みの種ですが、「二足のわらじ」で頑張っていきたいと思います。



■2001年第1回「語る会」のお知らせ

日時、テーマ等、未定です。総会の時に決める予定ですが、われこそはと思われる方は「語る会」担当者までご連絡ください。

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います（当然、酒代などは自前、割り勘になります）。
- ・発表および参加希望者は事前に下記担当者までご連絡ください。
「語る会」担当者 桂設計工房 豊崎洋子 TEL 048-261-3123 FAX 048-261-3146

■次回世話人会のお知らせ

日時、場所等、未定です。

総会の時に決めますので後日事務局までお問い合わせ下さい。

- ・生活文化同人の活動方針や定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」で、世話人以外の方の参加も自由です（ただし、酒代などは自腹）。参加を希望される方は事前に事務局までご連絡ください。

■2000年度第6回目世話人会報告 (00. 10. 27 於：飯田橋 もてなし)

1. 2001年度役員および世話人候補者（下記参照）が決まりました。総会の席で承認を受けて決定されます。
(2001年度役員・世話人候補者)
吉田桂二〔代表〕 岡部知子〔事務局〕 岸未希亞〔会計〕 鈴木久子 吉塚幸雄〔会報〕
益子昇 日影良孝〔機関誌〕 佐々伸子〔大平塾実行委員〕 豊崎洋子〔NPO準備〕
新井聰 石引浩子 戎居連太 勝見紀子 金田正夫 小林一元 佐々木貴章
高松俊秀 飛山龍一 内藤敬介 長谷川順持 松本昌義 八代茂子
2. 大平建築塾が受けた補助金に対する報告書の構成案について話し合われました。
3. 機関紙の準備状況が報告されました。原稿依頼を受けた方はご協力を願います。

■会報編集局より

- ・来年から編集局が変わりますのでご注意ください。
- ・会報用原稿を募集しています。私の近作・主張、旅の報告、スケッチなど、何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください（Eメール可）。
- ・同人会員の活動等、情報を寄せください。
- ・掲示板を活用して下さい。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締切は奇数月の20日です。

◆編集後記

・会報の編集を引き受けてからばたばたと、やっているうちに吉田先生の個展も終わって、もう12月です。忘年会の時期ですね。この1年間、会報の原稿その他でご協力いただき、ありがとうございました。新編集局となる来年からはもっとスピーディに発行されることでしょう。（まつもと）

会報編集局 〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-2-201 松本昌義

2000年度事務局：〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

Eメール tankoro@post.click.or.jp